兵器保存要領

特110
953

始

兵器保存要領

特110
953

兵器保存要領第二類正誤表

頁	行	誤	正
二	六	機能良存	機能良好
九	一一	長駐螺ノ端本	長駐螺ノ端末
一六	二	磨損ヲ起因ス	磨損ニ起因ス
同	五	頭部カ其ノ鋸……	頭部カ某鋸……
二二	四	始メテ射撃ヲ行フ銃及……	始メテ射撃ヲ行フ銃又ハ……
二八	四	水干	水平
附圖第八	其ノ二		

第五圖	断面圖上方	圖形…	
同	同	弦断面	削除ス

陸軍

特110
953

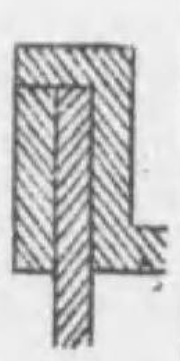
正誤

陸軍省副官

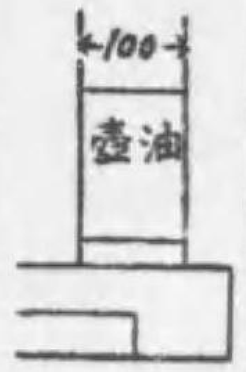
大正十三年九月九日

六月十二日陸普第二二〇五號兵器保存要領中左記ノ通正誤ス

兵器保存要領第一類正誤表

頁	行	誤	正
八	五	概ネ附表第十五、十六ニ依ル	概ネ附表第二順次十五、十六ニ依ル
一一	四	溶解	熔解
一七	一（用途ノ欄）	用	削除ス
一八	一二	石油「ベンツオール」	石油「ベンチン」
二〇	表（最上欄）	一種害蟲	第一種害蟲
二五	第八項（性質ノ欄）	綠帶黑褐	帶綠黑褐
	同（注意事項ノ欄）	石油「ベンツオール」	石油「ベンチン」
二八	第十八項（注意事項ノ欄）	熔解	溶解
三一	第二十七項（用法ノ欄）	炭酸遭達	炭酸曹達
同	第三十一項（名稱ノ欄）	苛性遭達	苛性曹達
三二	第三十三項（順次ノ欄）	三十	三十三
	第三十五項（同右）	三十	三十五
	同（性質ノ欄）	液ニシテ特	液ニシテ特異
	同（用法ノ欄）	遊標約三七度	遊杼約三七度
三三	第三十八項（注意事項ノ欄三）	其ノ調度ヲ	其ノ欄度ヲ
三四	第三十九項（用法ノ欄）	「コーバルワニス」ト「ゴールドサイズ」トノ間ニアル實線	削除ス
三五	第四十項末部（性質ノ欄）	溶融シ	熔融シ
四一	一	混シタルモノ「アイス……	混シタルモノ、「アイス……
四五	六	合番（符）號	合符號
五四	四	混交	混淆
附圖第一圖、第二圖	蓋斷面圖		
附圖第一圖	胴斷面	鐵葉鋲製	
附圖第五圖	斷面圖上方	圓形鐶	
同	同	弦斷面	削除ス

兵器保存要領第二類正誤表

頁	行	誤	正
二	六	機能良存	機能良好
九	一一	長駐螺ノ端本	長駐螺ノ端末
一六	二	磨損ヲ起因ス	磨損ニ起因ス
同	五	頭部カ其ノ鋸……	頭部カ某鋸……
二二	四	始メテ射擊ヲ行フ銃及……	始メテ射擊ヲ行フ銃ハ……
二八	四	水干	水平
附圖第八	其ノ二		

特110
953

陸普第二二〇五號

兵器保存要領第一類、第二類改正ノ件陸軍關係部隊ヘ通牒

大正十三年六月十二日　　陸軍省副官　中村孝太郎

兵器保存要領第一類、第二類別冊ノ通改正相成候也

追テ大正三年陸普第九九六號兵器保存要領中兵器保存要領配賦理由書以下第一類第八編迄竝附錄脂油類ヲ廢止シ第一類第九編以下ハ本要領通則ニ牴觸セサル限リ改正要領發布迄從前ノモノニ依ル儀ト承知相成度候

別冊

一　兵器保存要領（第一類）通則

一　同（第二類）刀、劍、銃、喇叭、步兵砲

但十一年式輕機關銃、喇叭、步兵砲ハ追テ定ム

追加　大正十四年四月十八日陸普第一四一〇號　大正十四年十一月十七日陸普第四四三八號

大正 15. 1. 16 内交

陸軍

綱領

第一　兵器保存ノ要旨ハ兵器ニ對シ常ニ適切ナル保護ヲ加ヘ其ノ精度命數ヲ保全シ以テ戰鬪ニ際シ其ノ威力及能力ヲ完全ニ發揚セシムルニアリ故ニ兵器保存ハ敎育ト須臾モ離ルヘカラサルモノニシテ彼此相俟チテ始メテ戰鬪ヲ完全ニ遂行シ得ルニ至ルモノトス

第二　兵器保存ノ要訣ハ兵器ノ構造ニ精通シ機能ノ機徹ニ通曉スルニアリ兵器ノ構造複雜精巧ナルモノニ於テ特ニ然リトス

第三　兵器尊重心ノ向上ハ兵器ノ保存ヲ良好ナラシムルノ基礎ナリ故ニ之カ涵養ニ就テハ上下ヲ通シ時ト所トヲ論セス常ニ至大ノ考慮ヲ拂ハサルヘカラス

第四　兵器檢査ノ適否ハ兵器ノ保全ニ關係ヲ有スルコト極メテ大ナリ蓋シ現況ニ應シ須要且適切ナル處置ヲ講シ得ルハ獨リ檢査ニ依ルアルヲ以テナリ故ニ將校以下常ニ兵器ニ親炙シ以テ檢査眼識ノ向上ヲ圖ラサルヘカラス

第五　兵器ニ對スル周到ナル敎育ノ實施ハ其ノ保存ヲ良好ナラシムルノ要件ナリ之カ爲兵器ニ關スル一般ノ敎育ハ勿論手入分解等ノ時機ヲ利用シ洽ネク實際的敎育ヲ施スノ著意ヲ緊要トス又之カ使用ニ方リテハ豫メ十分ナル敎育ヲ施行シ使用者ノ伎倆ヲシテ能ク兵器ノ取扱法ニ適應セシメサルヘカラス然

大正 15. 1. 16 内交

ラサレハ啻ニ兵器ヲ毀損スルノミナラス往々危險ヲ惹起スルノ虞アレハナリ

第六　兵器ノ手入ハ常ニ其ノ使用ト平衡セサルヘカラス使用ノ度愈〻頻繁ナルニ從ヒ益〻手入ノ程度ヲ高メ以テ其ノ保存ヲ完全ナラシムルヲ要ス一度手入ノ時機ヲ失シ其ノ方法ヲ誤ラムカ忽チ損傷ヲ來シ衰損ヲ早メ遂ニ廢棄ニ陷ラシムルニ至ルモノトス故ニ演習教練間ニ於テハ勿論戰鬪間ニアリテモ常ニ機會ヲ捉ヘテ之カ保護ニ努ムルノ習慣ヲ養成スルコト緊要ナリ

第七　兵器ヲ使用スルニ方リテハ其ノ初期ニ於テ特ニ保全ニ注意スルコト極メテ緊要ナリ蓋シ當初ニ於ケル不注意ニヨリ一旦損傷ヲ惹起スルトキハ其ノ恢復通常困難ナルノミナラス爾後急激ニ其ノ程度ヲ增進スルモノナルヲ以テナリ又損傷ヲ發見セシトキハ努メテ其ノ早期ニ於テ修理シ且爾後ノ保存ニ注意ヲ倍蓰スルヲ必要トス

第一類　通則

第一類通則

目次

	頁
第一篇　兵器構成ノ材料及之カ保存	一
第一章　金屬	一
第二章　木材、竹	三
第三章　皮革	四
第四章　麻（眞布ヲ含ム）、毛製品、毛類	九
第五章　護謨、「エボナイト」	一〇
第六章　光學用硝子製品	一二
第七章　兵器用脂油及塗料ノ性質竝用途	一四
第二篇　手入	四一
第三篇　格納	四五
第四篇　檢査	四八
第五篇　塗換	五九
第六篇　取扱上ノ注意	六一

第一類通則

第一篇　兵器構成ノ材料及之カ保存

第一章　金屬

第一條　兵器ニ用ウル金屬ハ鋼、鐵、銅、黃銅、青銅、錫、亞鉛、鉛、礬素、「ニッケル」及此等ノ合金ヲ主トス而シテ其ノ保存、手入法概ネ左ノ如シ

第二條　鋼及鐵部ニ對シテハ左ノ如ク實施スヘシ

一　鋼（鐵部ヲ含ム以下同シ）ノ素地部（塗漆又ハ鍍金等ヲ施サザル本來ノ地金面ヲ謂フ）ハ乾布ヲ以テ拭淨シタル後通常常用品ニ對シテハ常用礦油ヲ格納品（鑢類ヲ含ム）ニ對シテハ格納用礦油ヲ塗布スヘシ

二　素地部ノ舊油ヲ除去スルニハ通常乾布ヲ以テ拭淨スヘシ若シ乾布ヲ以テスル拭淨困難ナルトキハ常用礦油、石油又ハ揮發油ニ浸シタル布片ヲ以テ拭淨シ後乾布ヲ以テ拭フヘシ舊油剝脫ノ爲要スレハ木片又ハ竹箆等ヲ使用スルコトヲ得

舊油膠著シ若ハ油燒狀ヲ呈シ之カ除去著シク困難ナル時ハ銹ノ除去法ニ準シ實施スヘシ

三　素地部ノ銹ヲ除去スルニハ石油又ハ揮發油ニ浸シタル刷毛若ハ絨、綿布等ヲ以テ摩擦スヘシ、

又發錆甚シキ時ハ石油ヲ注キ三十分以上經過ノ後石油ニ浸シタル木賊又ハ絨布等ヲ以テ摩擦シ除錆スヘシ

四　拭淨ノ爲石油等ヲ用キタル時ハ其ノ油氣ヲ十分拭ヒ去リ常用礦油ヲ以テ更ニ拭淨スヘシ

五　素地部ノ發錆若ハ腐蝕ヲ除去スルニ金剛砂、布鑢、磨粉、土砂類其ノ他藥品類等ヲ使用スヘカラス

但シ兵器ノ種類ニ依リ精密寸度、滑度ヲ要スル部分其ノ他機能又ハ抗力ニ影響ヲ及ホス部分ノ外已ムヲ得サレハ錆斑ノ除去ニ金剛砂、布鑢又ハ磨粉等ヲ使用スルコトヲ得

六　錆染又ハ染烘部ニ塵埃、泥土ノ附著セシトキハ十分之ヲ除去シタル後ニアラサレハ乾布等ヲ以テ拭淨スヘカラス拭淨後常用品ニアリテハ薄ク常用礦油ヲ、格納品ニアリテハ格納用礦油ヲ塗布シ置クヘシ

七　錆染又ハ染烘シタル鋼部ヲ摩擦シテ白色ニシ又ハ著色セサル部ニ光輝ヲ發セシムヘカラス

第三條　青銅、黄銅、銅、錫、亞鉛、鉛、礬素製等ノ部ハ摩擦部ノ外塗油スルヲ要セス乾布ヲ以テ拭淨スヘシ但シ强摩シテ光輝ヲ發セシムヘカラス又貯藏品ニアリテハ要スレハ薄ク「ベルニー」ヲ塗布スヘシ尚銅類礬素等ニ錆若ハ汚物ノ附著セシモノハ成ルヘク之ヲ除去スヘシ之カタメ乾布若ハ小量ノ石油ヲ含メル布片ヲ以テ拭淨スヘシ

第四條　鍍部ハ塵埃、汚垢ヲ除去シタル後乾布ヲ以テ輕ク拭淨スヘシ又拭淨ノ爲酸類、「アルカリ」ヲ使用スヘカラス但シ鍍錫、鍍亞鉛ノ剝脫セル鐵部ニ發錆ノ徵アルトキハ布片又ハ布鑢ヲ以テ之ヲ除去シ「ワセリン」又ハ常用礦油ヲ塗布スヘシ尚鍍部ハ長時格納ニ方リ往々發錆スルコトアルヲ以テ兵器ノ種類ニヨリ薄ク「ワセリン」又ハ格納用礦油ヲ塗布スヘシ

第五條　金屬部ヲ雨雪等ニ濕潤セシメタルトキハ成ルヘク速ニ之ヲ拭除シ以テ發錆ノ機會ヲ與ヘサル如ク注意スルヲ要ス

泥土ノ附著セシトキハ過度ニ摩擦スルコトナク且他ヲ汚損セサル如ク拭除スヘシ又塗料塗施部ニシテ他部ニ害ヲ及ホス虞ナキ場合ニアリテハ要スレハ水洗除去スルコトヲ得

第二章　木材、竹

第六條　木、竹部ハ塵埃、汚垢ヲ除去シ乾布ヲ以テ拭淨スヘシ

第七條　木部ノ塗漆剝脫シタルモノハ該部ニ亞麻仁油ヲ塗布シ其ノ吸收ヲ待チテ乾布ヲ以テ拭淨スヘシ

第八條　木材又ハ木、竹製品ノ貯藏ニ方リテハ特ニ變歪、乾裂、腐朽及蟲害ヲ防止スルコトニ注意スヘシ之カ爲成ルヘク日光ノ直接交感ヲ受ケシメサル如クシ木口ノ割裂ヲ防ク爲ニハ同部ニ「サリチール」

酸塗布紙ヲ貼布（「サリチール」酸配合糊ヲ以テ）スルカ若ハ「ペンキ」ノ類ヲ塗施シ又濕潤セル場所ニ格納スルコトヲ避クヘシ

防蟲ノ爲ニハ「クレオソート」油ヲ使用スルヲ可トス

木、竹製品ニ附著スル害蟲ノ種類、發育ノ狀態等附表第一ノ如シ

第三章　皮革

第九條　革ハ酸素、濕氣、日光及温熱等ノ作用ニ依リ水分ノ蒸散、含有脂肪ノ變废及脫出、夾雜植物質ノ酸化竝黴菌ノ附著等ヲ來シ其ノ品質漸次不良トナルヲ以テ之カ豫防ノ爲良質ナル脂油ヲ適度ニ補給シ且發黴セル時ハ速ニ拭淨スヘシ又汚垢ノ附著セルモノハ鼠害ヲ被ルコト多キヲ以テ特ニ注意スヘシ

第十條　革具ノ手入ハ概ネ左ノ如ク實施スヘシ

一　革具ハ刷毛又ハ乾布ヲ以テ塵埃ヲ拭淨シタル後塗油スヘシ然レトモ拭淨ニ際シ強摩シ革ノ表面（毛ノ生スル方側所謂銀面）ヲ剝脫スヘカラス又革質ノ硬化セルモノハ含水布片ヲ以テ拭ヒ革質內ニ少シク濕氣ヲ帶ハシメタル後含油布片ヲ以テ稍〻多量ニ塗油スヘシ

但シ單寧鞣革以外ノ革ニアリテハ乾燥セル布片ヲ以テ拭淨シ通常塗油セサルモノトス而シテ「クローム」鞣革ニアリテハ拭淨ノ爲水若ハ石鹼水ヲ使用スルコトヲ得

二　塗油ニ方リテハ主トシテ革ノ表面ヨリ僅ニ含油セル布片ヲ以テ等齊且數次ニ塗施シ其ノ吸收ヲ待チ乾布ヲ以テ過剩油ヲ拭ヒ去ルヘシ

但シ硬化セル革具ニ對シテハ要スレハ表裏兩面ヨリ塗油スルヲ可トス

常用ノ革具中馬體若ハ被服ニ觸接スル部位及表面ヨリ行フヲ得サル部位ニ塗油スルニハ其ノ反對方側ヨリスヘシ

三　革具ニ塗油スルニハ脂油ノ吸收ヲ良好ナラシムル爲湯煎鍋ヲ以テ脂油ニ微温ヲ與フルヲ可トス殊ニ寒冷期ニ於テ然リトス

寒氣甚シキ時ハ革ノ表面ニ脂油滲出シテ結晶狀ヲ呈スルコトアルモ之ヲ除去スルヲ要セス

四　革具ノ縫絲部ニ於ケル贅油ノ殘存ハ往々絲質ヲ害シ破綻ヲ來スヲ以テ除去スルヲ可トス縫絲ノ磨損シ易キ部分及腐朽シ易キ箇所ニハ防擦防濕ノ爲要スレハ白蠟ヲ塗施スルヲ可トス

五　革具ノ手入ニハ水ヲ用ウルコトヲ避クヘシ特ニ貯藏革具ニ於テ然リトス但シ常用品ニシテ汚垢、泥土附著シ除去困難ナルトキハ含水布片ヲ以テ拭淨シ已ムヲ得サレハ清水若ハ軟石鹼水ヲ用キ刷毛又ハ布片ヲ以テ徐々ニ洗除スルコトヲ得

六　革具ノ手入ニ水ヲ用キタルトキ又ハ雨雪等ノ爲多量ノ水分ヲ吸收シタル時ハ乾布ヲ以テ拭ヒタル後通風良好ナル場所ニ於テ蔭乾シ其ノ全ク乾カサル以前ニ稍〻多量ノ塗油ヲナシ其ノ吸收ヲ待

チテ輕ク拭摩スヘシ決シテ直射日光又ハ火氣ニ觸レシムヘカラス

七　黑色又ハ半透明ナル樹脂狀ノ分泌物ヲ生シ若ハ金屬類ト接著シ面ニ汚垢膠著シ布片ヲ以テ除去困難ナルトキハ「テレビン」油或ハ揮發油等ヲ局部ニ塗施シ之ヲ溶解拭淨シ爾後適宜塗油スヘシ

八　革具ノ手入ハ日光ノ直射セサル場所ニ於テ實施スヘシ特ニ貯藏革具ニアリテハ成ルヘク快晴ノ日ヲ選ヒ屋蓋下ニ於テ行フヲ要ス

第十一條　革具ハ用途及種類ニ從ヒ塗油ノ度ヲ異ニスルヲ要ス例ヘハ褐色堅牛革ハ變形ヲ防ク爲其ノ量ヲ減シ之ニ反シ褐色多脂牛革ハ稍〻多量ナラシメ其ノ他屈曲部ノ如キハ特ニ塗油ヲ潤澤ニシ其ノ龜裂ヲ豫防スルカ如キ之ナリ又革具ハ常ニ現況ニ適應シ塗油スルヲ要ス其ノ量過度ナルトキハ革質柔軟トナリ爲ニ變形若ハ伸長シ又過少ナルトキハ硬化變質ヲ來スモノトス

第十二條　革具ハ手入ヲ怠リ或ハ其ノ方法ヲ誤リ一度變質、損敗等ヲ來ストキハ其ノ恢復通常困難ナルヲ以テ日常ノ手入特ニ初期ノ手入ニ際シテハ注意スルヲ要ス

第十三條　革具ト金屬（就中銅、黃銅、鐵）トノ接觸面ニハ銹ヲ生シ且革質變化ヲ來シ易キヲ以テ之カ格納ニ方リテハ兩者ヲ分離シ得ルモノハ成ルヘク之ヲ分離シ置クヲ可トス

第十四條　革具ノ發黴ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　濕氣ハ最發黴ニ影響スルコト大ナルモノトス故ニ革具ノ貯藏ニ方リテハ濕氣ノ虞少ナク清淨乾燥ニシテ且四季ヲ通シ低溫淸凉ナル倉庫ヲ選定スヘシ

二　濕氣多ク且溫暖ナル季節（春季ノ終リヨリ夏季就中梅雨期ニ於テ最發黴ヲ促進セシム）ニ於テハ屢〻拭淨ヲ實施スヘシ又拭淨後僅ニ「ワセリン」ヲ塗施スルヲ可トス

三　革具ニ發黴ヲ認メタルトキハ速ニ之ヲ拭淨スヘシ（黴ノ發生ヲ認メ得ルハ既ニ胞子發育シテ菌絲トナリ網狀ヲ成形シ革具カ其ノ侵害ヲ受ケツツアルノ時ナリ故ニ通常革具ノ取扱ニ際シテハ既ニ胞子ノ移植ヲ受ケアルコトニ留意シ發育ノ機會ヲ與ヘサルヲ要ス）

四　黴ヲ除去スルニハ乾布若ハ濕布ヲ以テ其ノ表面ヲ拭淨スヘシ然レトモ其ノ方法不完全ナルトキハ反ツテ往〻其ノ移殖ヲ助成スルコトアルヲ以テ特ニ注意シ一旦發黴部ニ使用セル布片ヲ其ノ儘他ノ發黴セサル革具ニ再用スヘカラス

五　發黴ノ度稍〻大ナルモノニ對シテハ布片ヲ殺菌液ニ浸シ輕ク絞リテ其ノ一枚ヲ以テ發黴部ヲ覆ヒ其ノ黴カ四方ニ飛散セサル如ク拭淨除去シ次テ他ノ一枚ヲ以テ發黴セル附近ノ表面ヲ拭掃シタル後乾燥殺菌布ニテ十分革面ヲ摩擦拭淨シ之ヲ蔭乾スヘシ

六　革具ノ發黴ハ直ニ他ニ傳播スルヲ以テ貯藏品ニ於テ發黴ヲ認メタルトキハ速ニ之ヲ良品ト分離シ拭淨後モ成ルヘク良品ト格納位置ヲ別チ置クヲ要ス（一旦發黴セシモノハ再發シ易キモノトス）

七　革具ハ黴ノ發生及脂油ノ發散豫防ノ爲成ルヘク密閉格納ヲ行フヲ有利トス

第十五條　革具ノ塗油回數及複合脂ノ配合比ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　貯藏革具中密閉格納品ニアリテハ概ネ三乃至四年毎ニ一回脂油ヲ塗施シ其ノ他ニアリテハ必要ニ應シ適宜塗油スヘシ

二　貯藏革具中過度ニ乾燥スル倉庫ニ格納セルモノハ塗油回數及牛脂ノ配合比ヲ增加シ又脂油ノ浸透十分ナラサルモノニハ鯨油ノ配合比ヲ增加スヘシ

三　革具ニ用ウル脂油配合ノ標準概ネ附表第十五、十六ニ依ル

第十六條　革具ノ密閉格納ハ乾燥期ニ於テ概ネ左ノ如ク實施スヘシ

一　革條類其ノ他小部品ヨリ成ル革具ヲ密閉格納スル場合ニハ木製箱ノ類ヲ用キ蓋ノ接際及箱ノ外部ノ乾裂、小孔等ハ空氣ノ流通セサル如ク十分目張ヲ施スヘシ（要スレハ内部ノ景況ヲ外部ヨリ覘視シ得ル如ク適宜小窓ヲ設クルヲ可トス）

二　馬具其ノ他多數兵器ヲ集團シ密閉格納スル場合ニハ乾燥セル木材ヲ組立テ（要スレハ棧架、鉄架等ヲ利用スルコトヲ得）外廓ヲ造リ内部ハ數段ニ分チ外部及底面ハ「ゴム」引布、厚麻布（裏面ヲ紙張リトシ「ベルニー」ヲ塗布ス）又ハ厚紙（「ベルニー」ヲ塗布ス）等ヲ以テ被包シ且適宜ノ位置ニ窓ヲ設ケ外部ヨリ内部ノ狀況ヲ覘視シ得ル如クスルヲ可トス

三　革具ノ密閉前ニ於テハ嚴ニ發黴、害蟲發生ノ有無、含油量ノ適否及格納用具等ヲ檢査シ且所要ノ手入ヲ施行シ要スレハ防蟲劑ヲ添加シ尙格納品ノ損傷ヲ來ササル如ク配列スヘシ

第四章　麻（製布ヲ含ム）、毛製品、毛類

第十七條　麻、毛製品、毛類ハ常時乾燥シアルヲ要ス之カ爲時々日乾スヘシ若シ塵埃、汚垢ノ附著セル時ハ之ヲ除去シ要スレハ日乾ノ後輕打スヘシ

但シ甚シク汚染セル部分ハ水、要スレハ石鹼水ヲ以テ洗滌シタル後十分ニ之ヲ乾燥スヘシ

第十八條　毛及毛製品中最顧慮スヘキハ害蟲ノ發生ニアリ之カ爲常ニ其ノ清潔乾燥ニ注意スルト共ニ之カ防遏ニ力メ且絶エス害蟲發生ノ徵候ヲ視察スルヲ要ス

第十九條　毛製品、毛類ノ貯藏品ニアリテハ防蟲及防腐用トシテ「テレビン」油ニ溶解シタル「ナフタリン」ヲ噴霧器ヲ以テ撒布スルカ又ハ防蟲劑ヲ添加シ置クヘシ

第二十條　害蟲ハ其ノ幼蟲ノ時機ニ於テ之カ撲滅ヲ圖ルヲ要ス若シ幼蟲ヲ發見スルカ或ハ其ノ棲息ノ徵候ヲ認メタルトキハ蟲害ヲ蒙リ易キ塡毛、毛製品等ニ對シテハ直ニ其ノ内部ニ殺蟲液ヲ注射シ若ハ二硫化炭素其ノ他ノ燻蒸法ヲ行ヒ又害蟲ノ寄生シ易キ麻製品ハ點檢拭淨ノ上要スレハ分離シ且庫内ノ大掃除ヲ行フヲ要ス

第二十一條　二硫化炭素ヲ用ヒ燻蒸ヲ行ハンニハ倉庫又ハ其ノ他ノ建築物ト離隔シタル獨立建物ヲ使用シ晴穩ニシテ温キ日ヲ選ヒ（攝氏一五度以上ニ非サレハ蒸發鈍シ）先ツ窓戶ヲ密閉（目塗土等ヲ使用ス）スルノ外天井、壁、床板等瓦斯漏洩ノ

廣アル箇所ニ目張ヲ施シ二硫化炭素ノ所要量（容積三〇立方米ニ對シ約二瓩）ヲ瀬戸引盥或ハ之ニ類スル容器ニ充テ被燻蒸物ヨリ上方ノ各所ニ分置シ約二四時間放置ノ後各部ヲ成ルヘク一齊ニ開放シ瓦斯ヲ戸外ニ放散セシムヘシ燻蒸ニ際シテハ絶對ニ火氣ヲ近接セシメサルコト及作業間瓦斯ヲ呼吸セサルコトニ注意スヘシ

第二十二條　毛製品、毛類ノ格納ハ努メテ密閉格納ヲナスヘシ而シテ之カ密閉ニ方リテハ前章第十六條ニ準スルノ外密閉物間ニハ防（殺）蟲劑ヲ添加シ「サリチール」酸配合糊ヲ以テ目張ヲ施シ又被包ノ爲ニハ「サリチール」酸塗布紙ヲ使用スルヲ要ス

麻製品ハ空氣ノ流通良好ナル場所ニ格納スヘシ

第二十三條　麻、毛製品、毛類ニ附著スル害蟲ノ種類、發育ノ狀態等附表第一ノ如シ

第五章　護謨、「エボナイト」

第二十四條　護謨類ハ手入殊ニ取扱ノ如何ニヨリテ著シク命數ヲ減スルニ至ルモノトス依テ左ノ件ニ注意スヘシ

一　一般ニ護謨類ニ對シテ濫リニ延伸又ハ屈折スヘカラス之カ爲遂ニハ彈力ヲ失ヒ其ノ用ニ適セサルニ至ルモノトス

二　凍結硬化セルモノニ對シテハ特ニ之カ取扱ニ注意シ俄ニ延伸若ハ屈折スル等ノコトアルヘカラス斯ノ如キモノニ對シテハ徐々ニ溫メ靜ニ揉ムトキハ彈力ヲ恢復スルコトアルモノトス

三　軟化及粘著ノ虞アルモノ又ハ軟化粘著ニ傾キタルモノハ滑石類ヲ其ノ表面ニ塗布スヘシ

四　熱スルトキハ漸次軟質トナリ遂ニ溶解粘著スルニ至ルヲ以テ成ルヘク火氣、日光殊ニ高熱ニ觸レシメサル樣注意ヲ要ス

五　護謨ハ二硫化炭素、「ベンツォール」、石油、揮發油、「テレビン」油、「エーテル」、樹脂、酒精等ニ溶解スルヲ以テ之等ヲ近ツクヘカラス

六　濕潤セルモノハ乾布ヲ以テ拭淨シ蔭乾スヘシ

第二十五條　護謨類ノ格納適當ナラサルトキハ硬化龜裂ヲ生スルニ至ルカ又ハ軟化粘著シ彈力ヲ失フニ至ルモノトス而シテ一旦此ノ如キ狀態ニ陷リタルモノハ殆ト之カ恢復困難ニシテ爾後使用シ得サルニ至ルヲ通例トス

格納ニ方リテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　清凉ニシテ且溫度ノ變化僅少ナル場所ニ於テ成ルヘク密閉格納スヘシ

二　壓迫、屈折、延伸等總テ外力ヲ加ヘタル儘格納スルハ嚴禁トス

三　一般ニ日光々線ニヨリ變質スルコト多キヲ以テ之カ遮斷法ヲ實施スヘシ之カ爲黃色若ハ黑色

黄色テ最易トス等ノ被包物ヲ以テ覆フヲ可トス

四　護謨類ハ金屬部（鐵、銅、黄銅等）ト接觸スルトキハ遊離硫黄ノ爲金屬ヲ發銹セシムルコト多キヲ以テ兩者ヲ分離シ得ルモノニアリテハ成ルヘク離隔シテ格納スルヲ可トス

第二十六條　「エボナイト」ハ其ノ保存並格納要領護謨製品ニ準ス

第六章　光學用硝子製品

第二十七條　硝子面ノ手入ハ左ノ如ク實施スヘシ

一　手入ハ成ルヘク連晴乾燥ノ日ヲ選ヒ砂塵及濕氣ヲ受ケサル清潔ナル場所ニ於テ之ヲ行フヘシ

二　拭淨用材料ニハ清潔柔軟ニシテ乾燥セル毛筆又ハ刷毛及軟綿布（木綿布ノ清洗シタルモノ）ヲ用ウヘシ此等ハ純良ナル酒精、「エーテル」又ハ「ベンツォール」等ノ溶劑ヲ以テ洗滌乾燥シ脂油塵埃等ノ附著ヲ避ケ且他ノ用途ニ充ツヘカラス

絹布、「フランネル」類、紙、鹿革等ハ硝子面ヲ搔傷腐蝕セシムルヲ以テ之ヲ使用スヘカラス

三　拭淨ニ方リテハ毛筆又ハ刷毛ヲ以テ表面ニ附著ノ塵埃ヲ輕ク拂ヒ落シタル後軟綿布ヲ以テ表面ヲ拭ヒ要スレハ軟綿布ノ一部ニ少量ノ溶劑（酒精「エーテル」若ハ「ベンツォール」）ヲ浸シテ面ニ塗リ其ノ蒸散スルニ先チ該布ノ乾燥セル部分ヲ以テ輕ク拭ヒ數回反復シテ硝子面ヲ清潔ナラシムヘシ

四　硝子面ニ泥土附著セシ場合ニハ毛筆又ハ刷毛ニ少量ノ清水ヲ浸シ叮嚀ニ洗滌シタル後要スレハ溶劑ヲ以テ拭淨シ乾燥軟綿布ヲ以テ拭淨スヘシ

五　前項ノ手入ヲ行フ餘裕ナキ時ハ濕リタル軟綿布ヲ以テ表面ヲ強ク摩擦スルコトナク又使用セル部分ヲ再用セサルコトニ注意シテ泥土ヲ拭ヒ去リ使用ニ差支ナキ程度ニ至ラシメ後時機ヲ得ハ直ニ前項ノ手入ヲ行フヘシ

六　硝子面ヲ濕潤セシメタルトキハ軟綿布ニテ拭淨ノ後乾燥セシムヘシ

第二十八條　硝子製品ノ取扱ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　硝子面ハ常ニ乾燥シアルヲ要ス又雨露若ハ濕氣ト永ク觸接スル時ハ其ノ表面ニ灰白色ノ曇リ或ハ斑紋ヲ生スルヲ以テ直ニ之ヲ拭淨シタル後前述ノ手入ヲ實施スヘシ

特ニ海岸ニ於テハ此ノ注意ヲ必要トス

二　硝子面ニハ脂油若ハ「パラフイン」ノ類ヲ觸レシムヘカラス若シ此等ニ觸ルルトキハ透明ヲ害シ或ハ面ヲ浸蝕スルコトアルヲ以テ溶劑ニヨリ叮嚀ニ手入スヘシ

三　硝子面ニハ塵埃ヲ附著シ置クヘカラス若シ永ク之ヲ放置スル時ハ硝子面ヲ腐蝕シ遂ニ斑紋若ハ斑點ヲ現ハスニ至ルヲ以テ常ニ清潔ナラシムヘシ

四　硝子面ニハ指頭ヲ觸レサルコトニ注意スヘシ若シ指ヲ觸レ其ノ儘之ヲ放置スルトキハ指ノ痕跡

ハ漸次斑紋トナリテ現ハルルニヨリ溶劑ヲ以テ拭淨スヘシ

五　硝子ハ其ノ質脆弱ナルヲ以テ衝突又ハ墜落スヘカラス又面ハ容易ニ搔傷ヲ受クルヲ以テ拭淨ニ方リ特ニ注意スヘシ

第七章　兵器用脂油及塗料ノ性質竝用途

第二十九條　脂油及塗料ハ兵器ノ保存上最緊要ニシテ其ノ品質ノ良否竝使用法ノ如何ハ直ニ兵器ノ保存ニ關スルモノトス

第三十條　兵器保存用脂油、塗料、染料等ノ名稱主要ナル用途及使用區分左ノ如シ

名稱	用途	使用區分
格納用鑛油（「ドーエール」油）	防錆用	永ク使用セサル鋼（鐵）部
「コールタール」		永ク使用セサル車輪々帶、軌條、鐵桁類
防錆脂		永ク使用セサル鋼部特ニ脂油剝脫シ易キ部分及日益用
常用鑛油（「スピンドル」油）	防錆防	常用品ノ鋼部ノ防錆用及「パラワセリン」ヲ施シ難キ銃砲機關部、腔中、滑走部、注油孔等ノ防擦用、腔中洗滌用

「ワセリン」（「パラワセリン」）	擦兩用	鋼鐵類ノ防錆用、樞軸部、關節部、齒部、螺絲部等ノ摩擦部及脂油溜等ノ防擦用
防擦脂	防擦用	車軸々臂、車輪轂筒內脂油溜等
高速用防擦脂（「グリース」）		回轉速度大ナル特種ノ軸又ハ滑走部、航空機用發動機ノ給油困難ナル摩擦部
汽箭鑛油（「シリンドル」油）		汽箭內部
蓖麻子油（「カストル」油）		航空機用發動機各摩擦部
機軸鑛油（「マシン」油）		機關車、貨車等ノ高速回轉軸又ハ滑走部
橄欖油（「オレーフ」油）		軍樂器、喇叭ノ滑走管又ハ螺絲發條部
時計油		發電機斷續器其ノ他精密器具機械中塗料ヲ施シアラサル鐵部、摩擦部、「ニッケル」鍍金部ノ防錆、防擦
鎖油		齒輪嚙合部、齒輪樞軸部、齒輪ト鎖トノ間ノ防擦
常用鑛油ト石油トノ混合油		極寒地ニ於テ鋼部ニ使用ス
「アイスマシーン」油（「ハリス」油）		仝右
鯨油 牛脂	革具塗施用	復合脂トシテ使用ス 褐色多脂牛革、同牝牛革製品ノ保存 舶牛脂ハ防錆脂 防擦脂用ニ供ス

馬油		褐色牛革ノ保存
「クレオソート」油	防腐防(殺)蟲用	木材及竹製品等ノ防腐防蟲用
「コールタール」		木材ノ防腐防蟲用(主トシテ地面ニ埋沒又ハ配置スヘキ木材ニ使用ス)
樟腦及樟腦油、「テレビン」油、「ナフタリン」		木材、毛製品、麻、絲、絹布製品ノ防蟲用 尙「テレビン」油ハ「ナフタリン」樟腦等ノ溶劑ニ用ユ
「サリチール」酸		木材、毛製品ノ防蟲用、「サリチール」酸紙、「サリチール」酸糊トシテ使用
「フォルマリン」		革具ノ發黴其ノ他ノ殺菌用
二硫化炭素		革製品、毛製品、毛類、麻製品等ノ殺蟲用(主トシテ格納品ニ對シ燻蒸又ハ注液ス)
鞣皮「タンニンエキス」	染色用	麻類、綿布ノ染色用
石炭酸曹達	洗滌(拭淨)用	一般汚垢、脂肪ノ洗滌用
苛性曹達		「ペンキ」類塗料ノ剝脫
石油、揮發油「テレビン」油		鋼部、木部ニ附著セル汚垢、舊油及塗料、錆ノ除去用、尙石油、揮發油ハ燈滌ノ洗滌用
酒精「エーテル」「ベンツォール」		眼鏡ノ硝子面及精密器具ノ拭淨用 尙酒精ハ「ベルニー」用トシテ「セルラック」ノ溶劑竝冷却裝置用水凍結豫防用

「クレオソート」油	用	油製塗料ノ剝脫用
下塗料	塗料	鋼鐵部ニ於ケル各色「ペンキ」ノ下塗用
上塗料		金屬又ハ木部ノ上塗用
假漆		油性「ワニス」ハ金屬及木部塗布用 酒精性「ワニス」(「ベルニー」)ハ木部金屬又ハ紙類塗布用 「テレビン」性「ワニス」ハ露天金屬部塗布用
「エナメル」		金屬塗布用
生亞麻仁油 煮亞麻仁油(「ボイル」油) 生(煮)荏油		麻、綿布、桐木、銃床、銃把、鋼索ノ塗布用、別ニ「ペンキ」ノ錬油又ハ媒溶劑トシテ使用ス
黃色防光塗料		氣球用
護謨液		氣球用、防水布用
漆		木部及金屬ノ塗布用
「メニー」		防水防腐用又ハ摺合部ノ點檢用

脂油類ノ性質、用法竝注意スヘキ事項附表第二ノ如シ

第三十一條 脂油類ノ購買ニ方リテハ前各條ニ依リ用途ニ從ヒ其ノ性質ヲ檢査スヘシ但シ左ノ脂油類ハ

造兵廠ヨリ之ヲ購買スルヲ可トス

格納用礦油	常用礦油
「ワセリン」	「パラフイン」
高速用防擦脂	「グリセリン」
牛脂	豚脂
鯨油	生(煮)亞麻仁油
鉛丹(光明丹)	上塗塗料

第三十二條　脂油類ノ格納法ハ左ノ如ク實施スヘシ

一　格納セル脂油ノ容器ニハ購入年月日ヲ記入セル標牌ヲ貼布スヘシ

二　脂油ハ之ヲ油庫ニ格納シ日光ノ直射ヲ避クヘシ但シ樟腦油、「サリチール」酸、「ナフタリン」、「フォルマリン」ハ油庫以外ノ倉庫ニ格納スルコトヲ得

三　「ベンッオール」、二硫化炭素、揮發油、「エーテル」、酒精、石油「ベンッオール」等ハ引火シ易キ性質ヲ有スルヲ以テ一般脂油ト區分シ墜落顚倒セサル如ク格納シ且格納場所ノ床面ニハ適當ノ厚サニ細砂ヲ盛ルヲ要ス

其ノ他石油、「テレピン」油、亞麻仁油モ亦燃燒シ易キヲ以テ右ニ準シ取扱フヘシ

四　引火性藥品ニ對シ火焰ヲ使用スル際ニハ適當ノ防護設備ヲ施シ直接火焰ノ接觸ヲ防止スルヲ要ス

五　脂油類ハ永ク大氣ニ觸ルルトキハ變敗又ハ各種ノ變化ヲ生スルヲ以テ必ス容器內ニ之ヲ密閉スヘシ

六　油庫ハ倉庫又ハ其ノ他ノ建築物ヨリ離隔シ周圍ニ相當ノ餘地ヲ存シ附近ニ消火用砂、水槽等ヲ設クヘシ又內部ハ常ニ乾燥清潔ナルヲ要ス

第三十三條　脂油類ノ分配ニ關シテハ左ノ如ク實施スヘシ

一　分配ハ成ルヘク油庫外一定ノ場所ニ於テ晝間之ヲ行フヘシ但シ已ムヲ得ス油庫內ニ於テ之ヲ行フ際ハ格納品トノ間ニ區劃ヲ設クヘシ

二　分配所ニハ種類ニ應シ所要ノ器具ヲ備ヘ且之カ混用ヲ避クヘシ

三　脂油類ノ容器ハ通常鐵葉製ニシテ其ノ形狀液狀油ノ爲ニハ附圖第一圖ニ固體及半固體狀油ノ爲ニハ第二圖ニ準スル容器ヲ用ヰ且之ニ脂油ノ名稱札ヲ附スヘシ

但シ塗料ノ分配ニハ第三圖ニ又之カ濾過ニハ第四圖ニ依ル器具ヲ用ウルヲ可トス

第三十四條　脂油類ノ取扱ニ關シテハ尙左ノ件ニ注意スヘシ

一　脂油類ヲ含有セル布片、雜巾等ヲ堆積シ置クトキハ自然發火ノ虞アルヲ以テ此等ハ使用後直ニ

容器內ニ入レ蓋ヲナシ置キ隨時洗滌シ乾燥ノ後再用シ又要スレハ直ニ之ヲ燒却スヘシ

二　格納用礦油、「パラワセリン」、防擦脂及革具用脂油ヲ熔融スルニハ湯煎鍋附圖第五圖ヲ用ユヘシ

尙寒冷ノ季節ニ於テハ冷却ヲ防ク爲毛布ノ類ヲ以テ鍋ノ周圍ヲ卷クヲ可トス

三　湯煎鍋ヲ使用シ得サルトキハ脂油ヲ容レタル容器ヲ直接火上ニ置クコトヲ得此ノ場合ニハ强ク加熱シ若ハ一回ノ溶融量ヲ過多ナラシメサルコトニ注意シ加熱間之ヲ攪拌スヘシ

附表第一

兵器害蟲一覽表

	名稱	科目	發育ノ狀態	被害物及被害時期	殺蟲防蟲法
一種害蟲	ひめかつを	鰹節蟲科	一代凡ソ二ケ年ニシテ幼蟲ノ儘越年五、六月頃成蟲ス	毛皮、毛織物、毛、革、天鵞絨、一般乾燥動物質製品四月—十一月幼蟲時代	(殺蟲)二硫化炭素ノ燻蒸(防蟲)防蟲劑ト共ニ密閉若ハ被包
	ひめまるかつを	右同	年二、三回發生シ概ネ幼蟲ノ儘越年ス性强健ニシテ食物ナクモ長時日間生息ス五、六月頃成蟲ス	毛皮、毛織物、毛、革、天鵞絨、一般乾燥動物質製品	右同
	ちびまるかつを	右同	年二、三回發生シ概ネ幼蟲ノ儘越年ス其ノ性强健	右同時トシテ絹織物ヲ害ス四月—十一月幼蟲時代	右同
	くろちびかつを	右同	年二、三回發生シ概ネ幼蟲ノ儘越年ス其ノ性强健	右同時トシテ絹織物ヲ害ス	右同
	いが	穀蛾科	年一、二回發生シ幼蟲ハ胸脚及尾脚ヲ有シ筒巢ヲ作リテ其ノ內ニ生活ス幼蟲ノ儘ニ越年シ五月頃第一回ノ成蟲ヲ見ル	毛、毛織物一般動物質製品四月—十月幼蟲時代	右同
	こいが	右同	年二回發生シ幼蟲ハ胸脚腹脚ヲ有シ不規則ナル長キ筒巢ヲ作リテ其ノ內ニ生活ス幼蟲ノ儘越年シ第一回ハ五、六月第二回ハ八、九月成蟲ス	毛皮、毛、毛織物、一般乾燥動物質製品四月末—十月中旬幼蟲時代	右同
	もうせんが	右同	年二回發生シ胸脚腹脚ヲ有シ楕圓ノ淡褐綾アル長キ筒巢ヲ作リ其ノ內ニ生活ス幼蟲ノ儘越年シ第一回ハ五、六月第二回ハ八、九月成蟲ス	毛、毛織物鞍褥ハ其ノ著シキモノ四月末—十月中旬幼蟲時代	右同
	へうほん蟲	標本蟲科	年二、三回發生シ通常幼蟲ノ儘越年スルモ時トシ成蟲ニテ越年スルコトアリ一代凡ソ三ケ月半トス	毛、毛皮、毛織物一般乾燥動物質製品	右同
	しよもつ蟲	金花蟲科	年一回發生シ六、七月頃成蟲ス	麻、麻布、綱、紙、書籍	右同
	まだらばんし蟲	番死蟲科	年一回發生シ六月ヨリ八月迄成蟲ヲ見ル	麻、革、毛、軟木	右同

第二種害蟲				
ながほそかた蟲	細堅蟲科	年一回發生シ幼蟲ノ儘越年ス四月ヨリ運動活潑トナリ材外ニ蝕屑ヲ排泄シ五、六月成蟲ス	樫(主トシテ白樫ノ幼木)欅	(殺蟲)「クレオソート」油注入又ハ二硫化炭素ノ燻蒸 (防蟲)「クレオソート」油浸漬又ハ塗布昇汞、酒精塗布後「ベルニー」塗布
たけのしんくひ蟲	竹蠹蟲科	年一回發生シ五、六月頃成蟲トナリ六、七、八月頃竹外ニ飛翔シ産卵ス	竹(殊ニ軟竹)	(殺蟲)「クレオソート」油注入又ハ二硫化炭素ノ燻蒸 (防蟲)防蟲劑ヲ塗布シ密閉ス又ハ昇汞、酒精塗布後「ベルニー」塗布
たけこくぞう	象鼻蟲科	年二回發生シ成蟲ノ儘越年ス	竹	右同

附表第二

順次	名稱	性質	用法	注意事項
一	格納用礦油(「ドーエー」油)	礦油ノ一種ニシテ帶綠褐色ノ半固體トナリ	通常熔融シテ使用ス	
二	防錆脂	一種ノ複合脂ニシテ左ノ配合(重量配比)ヲ有スルモノトス 白色「ペンキ」 一・〇〇 牛脂 一・〇〇 鉛糖 〇・五 少量ノ生亞麻仁油 鉛糖(醋酸鉛)ハ無色透明又ハ白色結晶ノ塊状體ニシテ微カニ醋酸臭ヲ有ス甘味ニシテ收歛性ナリ	本複合脂ハ必要ニ際シ所要量ダケ煉成スルモノトス之カ爲先ツ白色「ペンキ」、牛脂、鉛糖ヲ十分ニ煉和シ之ニ少量宛生亞麻仁油ヲ加ヘテ適度ノ硬度ヲ與フ	
三	常用礦油(「スピンドル」油)	透視スルトキハ淡黄又ハ淡赤褐色ヲ有スル液状油ニシテ臭味ヲ有セス 比重〇・九〇〇乃至〇・九三五ナリ凝固點零下五度以下トス	單獨ニ使用スルヲ通常トスト雖防錆用トシテハ牛脂又ハ豚脂ト混合シ複合脂トシテ使用スルコトヲ得又極寒時ニ於テ石油ト混用シ以テ脂油ノ凝固點ヲ低下シ防擦用ニ使用ス 但シ石油ハ常用礦油ノ滑度ヲ減少シ且鐵部ニ發錆ノ媒介ヲナスヲ以テ其ノ量ハ氣温ニ從ヒ適當ニ決定スルハ勿論ナルモ實用ニ鑑ミ可成少量ナルヲ可トス又使用後ノ手入ヲ勵行シ拭淨ヲ頻繁ナラシムルヲ要ス 常用礦油ト石油トノ混合油ノ實用限界氣温標準左ノ如シ	

實用限界氣温	常用礦油ト石油トノ混合油種類	摘要
零下二〇	石油量 1/6	石油ヲ混合セシトキハヨク振盪シテ兩油ノ混合ヲ確實ニス
同 二五	同 1/4	
同 三〇	同 1/3	
同 三五	同 1/2	
同 四〇	同 3/5	

四	「ワセリン」	常溫ニ於テ軟膏狀ヲナシ白色半透明ニシテ臭味ナク大氣中ニアリテ變化セス 比重〇・八五〇乃至〇・八九五ナリ	適當ノ粘稠度ヲ得ンタメ氣溫ノ高低及用途ニ應シ或ハ單獨ニ使用シ或ハ概ネ左記配合（重量配比）ニ於ケル複合脂トシテ使用ス 「パラフイン」一、「ワセリン」一乃至四 右ノ配合ニ於ケル脂油ヲ熔融シ攪拌混合ス 複合油トナセルモノヲ「パラワセリン」ト稱ス「パラフイン」紙ハ「パラフイン」ヲ熔融シ之ヲ紙ニ塗布セルモノナリ	
五	「パラフイン」	白色蠟狀ノ半透明結晶體ニシテ臭味ヲ有セス 比重〇・八九五以上ナリ		
六	防擦脂	一種ノ複合脂ニシテ通常左ノ配合（重量配比）ヲ有スルモノトス 牛脂 一〇〇 常用礦油 一〇〇 但シ牛脂ニ代フルニ豚脂ヲ以テスルコトヲ得豚脂ハ白色ノ半固體ニシテ味ナク微弱ナル特異臭ヲ有シ溫度三〇度以上ニ於テ熔融ス	本複合脂ノ配合ハ氣溫ノ高低ニヨリ適度ノ粘稠度ヲ得ルカ如ク變更スルヲ要ス而シテ之ヲ製スルニハ熔融シ攪拌混合スルモノトス	一 要スレハ高速用防擦脂ヲ用ウ 二 豚脂ハ其ノ表面黄色ニ變スルコトアリ 此ノ如キ場合ニハ該部分ヲ除去シ使用スヘシ
七	高速用防擦脂（「グリース」）	礦油ノ一種ニシテ帶綠橙黄色ノ半固體ナリ大氣中ニアリテ變化セス微礦油臭ヲ有シ溫度四五度以上ニ於テ熔融ス	航空機ニ於テハ主トシテ給油困難ナル場所ニ防擦用トシテ使用ス之カ爲「キヤツプ」又ハ「ケイス」內ニ充塡シ若ハ局部ニ厚ク塗布ス	

八	汽罐礦油（「シリンドル」油）	綠帶黑褐色ノ礦油ニシテ殆ト無臭 比重〇・九〇〇乃至〇・九二〇粘度（「レッドウード」粘度計ヲ用フ）ハ溫度五〇度ニ於テ一三〇〇秒乃至八〇〇秒溫度一五〇度ニ於テ五〇秒以上引火點（「ペンスキーマルテン」式引火點試驗器ヲ用ウ）二三〇度乃至三〇〇度凝固點零下三度以下トス		一 永ク空氣ニ曝露スルモ渣滓又ハ沈澱物ヲ生スルコトナカルヘシ 二 塗布セル場合其ノ表面ニ護謨質又ハ乾燥性皮膜ヲ生スヘカラス 三 石油「ベンツオール」（比重〇・六七〇乃至〇・七〇〇）ニ完全ニ溶解スルヲ要シ容量ニ於テ三倍以上ノ石油「ベンツオール」ヲ用キ溶解シテ數日間放置スルモ沈澱ヲ生スルコトナカルヘシ
九	蓖麻子油（「カストル」油）	無色又ハ淡黄色若ハ淡黄褐色ノ植物性油ニシテ凝固點零度以下一〇度以下ニシテ四八時間靜置スルモ沈澱物水滴ヲ認メス反應中性ニシテ夾雜物ヲ含マス比重〇・九五八乃至〇・九七〇又「レッドウード」式粘度計ヲ用ヰテ五〇ccヲ滴下スルニ要スル秒數左ノ如クナルヘシ 三五度ニ於テ　一、二三〇乃至一、三三〇 一〇〇度ニ於テ　七〇乃至八五 一五〇度ニ於テ　三五乃至四五		本油ハ空氣ニ曝露スルトキハ漸次遊離酸ヲ增加シ金屬ノ發錆ヲ誘起スヘキヲ以テ常ニ容器ノ口ヲ密閉シ置クヲ要ス
		帶綠黑褐色ノ礦油ニシテ殆ト無臭 比重〇・九〇〇乃至〇・九四〇引火點（「ペンスキーマルテン」式引火點試驗器ヲ用ウ）一七〇度乃至二〇〇度トス又本油ハ粘度（「レッドウード」粘度計ヲ用ウ）		汽罐礦油ニ同シ

十	機軸礦油（「マシン」油）	及凝固點ヲ異ニスルヨリ次ノ二種ニ區別ス	
十一	橄欖油（「オレーフ」油）	本油ハ植物ノ果實ヲ冷壓シテ得タル脂肪油ニシテ淡黃綠色或ハ黃色ノ液體ナリ微カニ特異ノ臭氣ヲ有シ其ノ味緩和ニシテ慶油性ナリ比重〇・九一五乃至〇・九二〇ナリ不乾性油ニシテ溫度約一〇度ニ於テ溷濁シ結晶狀ノ析出物ヲ生シ零度ニ至リテ軟膏樣塊トナル	永ク空氣ニ曝露スルトキハ臭氣ヲ放チ且酸性反應ヲ呈スルニ至ル
十二	時計油	充分精製セル椿油、鯨腦油及礦油ノ一種類ナリ	
十三	黑鉛油	黑鉛末ト「パラフイン」若ハ之ニ類スル粘稠度高キ礦物油ヲ煉成セル黑色半固體狀油ナリ	

區分／名稱	粘度（秒）溫度二〇度ニ於テ	粘度（秒）溫度五〇度ニ於テ	凝固點（度）
冬候機軸礦油	八〇〇乃至一二〇〇	一二〇以上	零下一〇以下
中候（春秋）機軸礦油	一二〇〇乃至一五〇〇	一五〇以上	零下一〇以下

十四	「アイスマシン」油及「ハリス」油（極寒地減摩用）	常用礦油ニ比シ「アイスマシーン」油ハ約一〇度「ハリス」油ハ約二〇度凝固點低シ	上記油ト石油トノ混合油ノ實用限界氣溫標準次ノ如シ
		透明ナル無色又ハ淡黃色ノ液狀油ニシテ殆ト臭味ナキカ或ハ輕微ナル本油特有ノ臭味ヲ有ス比重約〇・九〇〇ナリ	

實用限界氣溫	「アイスマシン」油ト石油	「ハリス」油ト石油
零下二五	石油量、0	石油量 0
同三〇	1/5	0
同三五	1/4	0
同四〇	1/3	1/5
同四五	1/2	1/4
同五〇	3/5	1/3

右表ノ限界氣溫ハ其ノ一般ヲ指示スルモノニシテ塗油ノ多寡、方法及用所ニヨリ其ノ狀況一樣ナラス表示ノ溫度ニ對シ前後五度附近ノ差アルヲ免レス

常用革具	鯨油及牛脂ヲ配合シ複合脂トシテ使用スルヲ一般トス尙之ニ少量ノ「ワセリン」ヲ加フ其ノ配合（重量配比）ハ通常左ノ如シ	「ワセリン」ヲ配合スル目的ハ殺菌ニアルヲ以テ過多ナラシメサルヲ要ス（過多ナルトキハ革質ノ軟化スルモノトス）冬季鯨油ノ溷濁セルトキハ之ヲ單獨ニ使用スル場合ニモ亦暖ク加溫シ溶融狀態トナスヲ要ス

十五	鯨油		鯨油 三・〇 牛脂 一・〇 「ワセリン」 〇・二 格納革具 名稱／區分：夏季又ハ暖地・冬季又ハ寒地 鯨油：一・〇・一・〇 牛脂：二・〇・一・〇 「ワセリン」：〇・四・〇・二 鯨油及牛脂ノ配合比ハ大約ノ標準ヲ示セルモノトス故ニ革質、天候其ノ他革具保存ノ状態ヲ考ヘ適度ニ之ヲ加減セサルヘカラス本調合脂ヲ製スルニハ熔融シ攪拌混合スルモノトス	牛脂ハ表面黄色ニ變質スルコトアリ此ノ如キ場合ニハ該部分ヲ除去シテ使用スヘシ
十六	牛脂	常温ニ於テハ白色若ハ淡黄色ノ固體ニシテ味ナク殆ト無臭ナリ又温度四五度以上ニ於テ熔融ス比重約〇、九三〇ナリ		
十七	馬油	通常黄色ニシテ牛酪狀態ヲナス靜置スルトキハ液分ト固形分トニ分離ス比重〇、九二〇四乃至〇、九二二二	革ヲ柔軟ナラシムル點ニ於テハ牛脂ニ優リ其ノ價格亦廉ナリ	
十八	「クレオソート」油	本油ハ石炭「タール」ヲ蒸餾シテ温度二一〇度以上二七〇度以下ニ於テ餾出シタル帶緑褐色ノ油ニシテ比重一、〇〇以上一、〇七以下トス特異ノ臭氣ヲ有ス	一 防腐又ハ防蟲スヘキ材ヲ本液中ニ浸漬スルカ又ハ數回之ニ本液ヲ塗布スヘシ 二 防蟲法ハ害蟲傳播時期（附表第一）前ニ之ヲ行フヲ要ス 三 蟲害ヲ受ケタルモノハ其ノ	本油ハ主トシテ塗料ヲ施サヽル木材及竹製品等ニ使用ス是レ木油ハ各種ノ油類塗料ヲ溶解スル性質アルヲ以テナリ石油「タール」製重油又ハ樹脂油ヲ本油ト誤認セサルヲ要ス是レ之等ノ諸

			程度小ナルモ速ニ之ヲ隔離シ其ノ傳播ヲ豫防スルト共ニ同油ヲ其ノ蟲孔ニ注入シ撲滅ヲ圖ルヘシ	油ハ本油ニ比シ其ノ效力良好ナラサレハナリ
十九	「コールタール」	石炭ヲ乾餾シテ得タル黒色油狀ノ液體ナリ	地面ニ埋設又ハ配置スヘキ鋼鐵、木材等ニ塗布スルニ供ス	
二十	「ナフタリン」	光輝アル無色葉狀或ハ稜柱狀ノ結晶體ニシテ錠劑トシテ販賣セルアリ竄透性ノ臭氣ヲ有シ味灼クカ如ク常温ニ於テ徐々ニ揮發ス、水ニ溶解スルコトナク温酒精、揮發油、「テレビン」油ニ溶解ス	通常單獨ニ又要スレハ溶劑（通常揮發油ヲ用ヒ要スレハ「テレビン」油ヲ用フ）ニ溶解シテ使用ス	單獨ニ使用スル際褐ノ填毛内ニ挿入スルカ如キ場合ノ外通常紙ヲ以テ之ヲ包ムヲ良トス
二十一	樟腦及樟腦油	樟腦ハ白色半透明ノ光澤アル結晶狀塊ヲナシ柔靱ニシテ粉碎シ難シ但シ少量ノ酒精ヲ以テ之ヲ潤ストキハ粉碎スルコトヲ得特異ノ芳香ヲ有シ味初メ灼クカ如ク後清涼ナリ大氣中ニ放置スレハ漸次揮發ス樟腦ハ水ニ溶解スルコトナク酒精、「エーテル」、揮發油、「テレビン」油等ニ溶解ス又樟腦ノ一小片ヲ水ニ投スレハ水面ニ在リテ自ラ廻轉ス	樟腦ヲ液狀トシテ使用セントスルトキハ之ニ「テレビン」油、若ハ揮發油ヲ加ヘ溶解スヘシ	樟腦油ハ樟腦製造ノ際得ル所ノ副産物ニシテ多量ノ樟腦ヲ含ミ無色乃至褐色ヲ呈シ香氣樟腦ニ等シキ液體ナリ樟腦ヲ水ニ投シタルトキ白砂、食鹽、石膏、硼砂等ノ僞交品ヲ含有セハ之ヲ水中ニ沈降スルヲ以テ其ノ多寡ニヨリ品質ノ良否ヲ鑑識スルヲ得
二十二	「テレビン」油	本油ハ「テレビンチン」ヲ蒸餾シテ採取スルカ又ハ樹脂ニ富ミタル樹木ヲ乾餾ノ際副産物トシテ採取セラル無色若ハ淡黄色透明ノ液ニシテ特異ノ香氣ヲ有シ空氣中ニ曝露スルコト久シケレ	本油ヲ用ヒ洗滌シタルモノハ爾後十分ニ清拭シ置クコト必要ナリ	本油二、三滴ヲ白紙ニ點下シ炭火上ニ蒸發セシムルトキ良好ナル「テレビン」油ニアリテハ悉ク蒸散シ痕跡ヲ止メサルモ脂肪又ハ樹脂油ヲ混入スルモノハ痕點ヲ生ス

		ハ樹脂狀トナルノ性アリ比重〇・八四五乃至〇・八七五ナリ		往々、石油揮發油等ヲ混入セル偽品アリ購入ノ際臭氣ニ注意スルヲ要ス
二十三	「サリチール」酸	「サリチール」酸ハ白色鍼狀ノ結晶或ハ白色輕鬆ノ結晶分ヲナシ無臭ニシテ味甘酸且苛辣ナリ沸騰水ニ溶解シ酒精「エーテル」等ニ能ク溶解ス殺菌性強キモ有毒ナラス	「サリチール」酸紙ヲ製スルニハ稀薄ナル生麩糊汁〇・一八〇立(約一合)、「サリチール」酸五瓦ヲ數回ニ分チテ少量ツヽ添加攪拌シツヽ混合シ次ニ刷毛(熱湯ニ浸シ能ク不潔物ヲ去ルヘシ)ヲ用キ紙ノ兩面ヨリ該液ヲ平等ニ塗布シ綱ニ懸ケテ乾燥スヘシ「サリチール」酸糊ハ稀薄ナル生麩糊〇・一八〇立(約一合)ニ付「サリチール」酸約三瓦ヲ數回ニ分チ少量宛添加攪拌シテ混合セルモノトス	
二十四	「フォルマリン」	無色透明ニシテ特異ノ臭氣ヲ有ス揮發性ニシテ水、酒精ニ任意ノ比ニ溶解ス「フォルマリン」液ヲ蒸發乾固セハ白色無定形ノ固體「フォルマリン」ヲ得ヘシ比重約一・一ヲ有スルヲ眞品トス	革具ノ黴ヲ除去スルニハ「フォルマリン」一〇%溶液中ニ革ヲ浸スカ又ハ同液ニ布片ヲ浸シタルモノヲ以テ拭淨ス	拭淨ニ際シ黴カ四方ニ飛散セサルコト、一旦使用セシ布片ヲ其ノ儘ニテ他ノ部ニ再用セサルコトハ黴ノ傳播防止上必要ナリ皮革等ニ對シ變化ヲ及ホサストモ永年月觸レシムレハ硬化龜裂セシム
二十五	二硫化炭素	無色ノ液體ニシテ擴散力著大且殺蟲力大ナルモ引火シ易ク有毒ナル麻醉性ヲ有シ又溶解力強シ酒精ニヨク混和ス	二七・八立(約一立方尺)ニ對シ約一五瓦ヲ用ウレハ三六時間ニテ確實ニ殺虫ス又大ナル殺虫法ニアリテハ三〇立方米ニ對シ約二瓩ニテ二四時間ヲ要ス	銅、黃銅ニ對シ變色セシムルモ他ノ兵器素材ニ對シテハ始ト變化ナシ
二十六	石油乳劑	乳白色ノ糊狀劑	製法ハ洗濯石鹼六七五瓦(約一八〇匁)ヲ約四・五立(約二升五合)ノ溫湯ニ溶解シ其ノ未タ冷却セサル間ニ石油九立(約五升)ヲ注加シ攪拌ス	害虫ノ強弱ニ應シ一〇乃至三〇倍ノ水ニ稀釋シ撒布ス

二十七	槲皮		槲皮煎汁ヲ作リ被浸物ヲ染浸ス但シ氣溫低キトキハ煎汁ヲ溫ムルヲ良トス又要スレハ炭酸曹達水(一〇〇〇分ノ五溶液)ヲ以テ約一時間煮沸シ脂油又ハ汚垢ヲ除去スヘシ	
二十八	「タンニンエキス」	槲皮煎汁ヨリ得タルモノニシテ一般ニ收斂味ヲ有ス	溶液トシテ使用スヘシ其ノ用法ハ全ク槲皮ノモノニ同シ	
二十九	石鹼	石鹼ニハ加里石鹼(軟石鹼)ト曹達石鹼(硬石鹼)トアリ	革具ニ使用スル石鹼ハ遊離「アルカリ」ヲ含有セサルヲ要ス而シテ其ノ存否ヲ化學的ニ檢スルニハ酸ヲ含マサル無水ノ「アルコール」ニ石鹼ヲ溶解シ其ノ液中ニ「フェノールフタレイン」ヲ一、二滴々下スヘシ此ノ際赤變セハ遊離「アルカリ」存在ノ證ナリ但シ石鹼ヲ水ニテ溶解スヘカラス	石鹼ヲ永ク貯藏スルニ方リ其ノ表面ニ白色ノ小斑點ヲ多ク發生スルモノハ遊離「アルカリ」ノ存在多キヲ示スモノニシテ不眞品トス
三十	炭酸曹達	炭酸曹達ハ透明ナル結晶體ナレトモ之ヲ大氣中ニ放置スレハ風化シテ白色ノ不透明體トナリ水ニ溶解シ易シ	通常水一・八立(約一升)ニ付本劑約九瓦ノ比ヲ以テ溶解シ使用ス(一〇〇〇分ノ五溶液)要スレハ被洗滌品ヲ本液中ニ浸シ煮沸スヘシ	本液ヲ用キ洗滌シ終レハ更ニ十分ニ清水ヲ以テ洗滌スヘシ
三十一	苛性曹達	苛性曹達ハ無定形白色ノ脆キ固形體ニシテ大氣ニ曝露スルトキハ潮解シ水及酒精ニ能ク溶解シ多量ノ熱ヲ發ス又強キ腐蝕性ヲ有ス	多數ノ塗料ヲ剝脫スルタメニハ次ノ配合比ヲ有スル劑ヲ用ウルコトヲ得 工業用苛性曹達一瓩ヲ清水五・〇四立(約二升八合)中ニ溶解シテ之ニ一瓩ノ常用礦油ヲ加ヘテ乳狀トナル迄攪拌シ尙鋸屑粉ヲ加味シ泥狀トナス 護謨製品ノ硬固シタルトキ之ヲ	上記ノ塗料剝脫劑ヲ用キタルトキハ爾後ノ水洗及拭淨ニ最注意スルヲ要ス又使用ニ方リテハ皮膚ヲ犯シ易キヲ以テ注意ヲ要ス

			洗滌スルニハ清水一・八立ニ對シ化學用苛性曹達約一八〇瓦(一〇分ノ一溶液)ノ比ヲ以テ加ヘ且其ノ過度ヲ五〇度トナセル液中ニ該品ヲ浸シ約一時間ノ後之ヲ取出シ清水ヲ以テ再三洗滌シ次ニ清拭陰乾スルモノトス	
三十二	石油	石油ハ無色澄明ナルカ又ハ輕微ナル黃綠色ニシテ特異臭ヲ有シ脂肪、樹脂等ヲ溶解スル性ヲ有ス大氣中ノ酸素ヲ吸收シ樹脂狀酸化物ヲ生ス比重〇・七八乃至〇・八六ナリ	寒地ニ於テ常用礦油「アイスマシン」油、「ハリス」油等ト混シ凝固點ヲ低下シ防擦用トシテ使用スルコトアリ	普通ノ石油ヲ用ウ石油使用後ハ被洗品ヲ十分拭淨スルコト必要ナリ
三十三	揮發油	揮發油ハ原油蒸餾ノ初期ニ餾出スル無色ニシテ且芳香ヲ有スル液體ニシテ比重〇・七四〇以下トス常溫ニ於テ揮發シヨク脂肪類ヲ溶解スルノ性ヲ有ス		揮發油ハ手掌ニ滴下スレハ全部揮發シ去リテ惡臭又ハ石油臭ヲ止メサルヲ良トス本品ヲ用ヒ拭淨ヲ行ヒタル後ハ十分之ヲ拭淨スルコト必要ナリ
三十四	「ベンツオール」	無色ノ液體ニシテ一種ノ臭氣ヲ有シ燃ヘ易ク光明及油烟ニ富メル熖ヲ發ク、水ニハ殆ト不溶ナルモ酒精、「エーテル」等ニハ任意ニ混和ス樹脂、脂肪等ヲ容易ニ溶解スルヲ以テ貴重ナル溶劑及清淨劑ナリ比重〇・八七四冷却スレハ結晶トナリ五・四度ニテ溶融ス沸點八〇・五ナリ	溶劑及拭淨用ノ外種々ナル「ベンツオール」誘導體ヲ製スル母體タリ	
三十五	酒精	無色透明揮發性ノ液ニシテ特異竄透性ノ香氣ヲ有シ味灼クカ如シ能ク脂肪、樹脂等諸種ノ物質ヲ溶解ス比重〇・八三〇乃至〇・八四〇ナリ	眼鏡ノ硝子面及精密器具ノ拭淨ニハ比重〇・八三〇乃至〇・八三四(「ボーメー」進秤約三九度)ノ酒精ヲ使用ス「ベルニー」用ニハ比重約〇・八〇(「ボーメー」進標約三七度)ノ酒精ヲ使用ス	

三十六	「エーテル」	無色透明極メテ揮發シ易キ液ニシテ特異ノ臭氣ヲ有ス能ク脂肪、樹脂等諸種ノ物質ヲ溶解ス比重約〇・七二ナリ		
三十七	下塗々料	鉛丹(光明丹)ト亞麻仁油トヲ混シ之ニ若干ノ乾燥劑ヲ加味シタル赤色粘稠性ノ物質ニシテ乾燥迅速展伸力大ナリ又緻密ナルヲ以テ良好ナル防銹劑タルノ特性アリ	光明丹ニ少量ノ生亞麻仁油ヲ加ヘ能ク槌打煉和シ餅狀トナシ之ニ「ドライヤー」及生亞麻仁油ヲ逐次少量ツツ加ヘ更ニ煉和シ擂鉢中ニ於テ生亞麻仁油ヲ加ヘツツ擂リ混セ塗抹シ得ル稠度ノ液體トナスヘシ 其ノ配合左ノ如シ 光明丹　八・二瓩 「ドライヤー」　〇・六瓩 生亞麻仁油　一・二瓩 但シ寒冷ノ候ニアリテハ生亞麻仁油ニ代フルニ煮亞麻仁油ヲ以テシ且「ドライヤー」ヲモ增加スヘシ	光明丹ハ赤色酸化鉛ニシテ其ノ色帶黃赤色ヲ有シ細微ナル粉末ナリ 上記配合劑ハ永ク貯藏スルトキハ光明丹ハ沈澱固結スルヲ以テ必要ニ際シ煉成使用スルモノトス。
三十八	上塗 白色	諸種ノ顏料ト揉溶劑(亞麻仁油)トヲ配合セルモノニ若干ノ乾燥劑ヲ加味煉成シタルモノニシテ物體ノ表面ニ塗布スレハ乾燥スルニ從テ其ノ表面ニ不透明ナル附著性ノ皮膜ヲ成形シ以テ大氣ノ交感ヲ防護スルノ用ヲナスモノナリ	白鉛「ペンキ」、「ドライヤー」、煮亞麻仁油、「テレビン」油ヲ以テ合劑シ要スレハ之ニ「コーパルワニス」ヲ加ヘ適度ノ調製「ペンキ」トナシテ使用ス	一 普通販賣セラルル「ペンキ」ハ之ヲ硬製「ペンキ」ト稱シ其ノ儘直ニ使用スルコト能ハス必ス必要ニ際シテ調製「ペンキ」トナシテ使用スルモノトス 二 「ペンキ」ノ乾燥時間ハ一八時間乃至三〇時間內外ナルモノヲ良トス 三 調製「ペンキ」ト雖購買後時日ノ經過氣候等ノ關係ヲ顧慮シ其ノ調度ヲ適當ニ變更シテ使用スルヲ要ス之カ爲生(煮)亞麻仁油若ハ「テレビン」油ノ若干量ヲ添加スヘシ
	赤色・黃色・鉛色・黑色		各色「ペンキ」、煮亞麻仁油「ドライヤー」、「コーパルワニス」「テレビン」油ヲ合劑シ適度ノ調製「ペンキ」トナシテ使用ス	

	料々 茶褐色		白色、錆色、藍色、紺色、黄色及黒色「ペンキ」、煮亞麻仁油、「ゴールドサイス」、「コーパルワニス」、「テレビン」油ヲ合劑シテ適度ノ調製「ペンキ」トナシテ使用ス	
	鼠色		白色「ペンキ」、油煙、煮亞麻仁油ヲ合劑シ適度ノ調製「ペンキ」トナシテ使用ス	
三十九	「ドライヤー」	灰白色無味殆ント無臭硬錬製ニシテ粘性少ク自己ノ乾燥度ハ速カナラサルモ「ペンキ」等ニ配合シテ乾燥度ヲ増サシム	原料ニヨリ其ノ色澤ヲ異ニス主トシテ滿俺、「コバルト」ノ鹽類即チ硼酸「コバルト」、安息酸「コバルト」或ハ硼酸、滿俺等ト乾燥性油トノ煉合劑ナリ	
	「コーパルワニス」	透視スレハ淡褐色ナレトモ外觀黒色ノ粘稠液體ニシテ輕微ノ苦味ヲ有シ且「テレビン」油臭アリ「コーパル」ヲ主成分トシ粘著性強ク乾燥速ナリ	「コーパルワニス」、「ゴールドサイズ」ハ一種ノ油性假漆ニシテ「コーパル」樹脂ト亞麻仁油トノ合劑ナリ	
	「ゴールドサイズ」	琥珀色粘稠液體ニシテ輕微ノ苦味「テレビン」油臭ヲ有ス其ノ性「コーパルワニス」ニ酷似スレトモ乾燥度ハ稍ゝ遲シ		
	假 油製	種々ノ樹脂ヲ乾性油(亞麻仁油)ニ溶解シタルモノニシテ其ノ質堅靭能ク耐久性ニ富ミ熱及濕氣ニ抵抗スル力強ク且塗面ノ光澤ヲ増加ス		乾燥ノ遲速ヲ檢スルニハ玻璃板上ニ本品ヲ薄ク塗布シ試ムヘシ其ノ乾燥時間ハ塵埃ノ附着セサル迄ニ乾燥スルニ七乃至一〇時間又全ク乾燥スル迄二四時間以内ナルヲ標準トス又乾燥後三日間ニ於テ色彩ヲ變セサルモノヲ

四十	各色「ワニス」			良トス光澤ヲ失シ塵リヲ生スル如キモノハ不良ナリ其ノ他本品ヲ薄キ鐵葉鈑ニ塗布シ乾燥後鈑ヲ屈曲スルモ塗面ニ異狀ナキヲ要ス「ワニス」塗抹ニ用ヰタル刷毛ハ使用後直ニ揮發油又ハ「テレビン」油ニテ洗滌スヘシ然ラサレハ乾固シテ用ヲナサヽルニ至ルヘシ
	漆 酒精製「ワニス」一名「ベルニー」	通常酒精〇・九九立(約五合五勺)ト「セルラック」二〇〇瓦トヲ配合シ製スルモノニシテ乾燥迅速且美麗ナル光澤ヲ呈ス「セルラック」ハ茶褐色薄葉狀或ハ濃褐色ノ固體ニシテ無味無臭水ニ溶解セス酒精ニ能ク溶解スルモノナリ		本品ハ使用ニ際シ之ヲ調製スヘシ又其ノ濃度ハ適宜溶媒ヲ加減シテ所望ノ稠度トナスヲ得「ベルニー」ヲ塗布スルニハ一般ニ過厚ニ失セサルヲ要ス
	「テレビン」製「ワニス」	土瀝青「セルラック」、「コールタール」「テレビン」油ヲ混和煉成セルモノニシテ耐久性大ナリ土瀝青ハ黒色ニシテ光澤ヲ有シ熱ヲ與フレハ溶融シテ濃厚ノ液トナル灰色ニシテ光澤ナキモノハ不良品ナリ「セルラック」ハ前欄ノモノニ同シ	土瀝青(「アスファルト」)一九・三「セルラック」三・七「コールタール」七五・二「テレビン」油一・八ノ比(重量配比)ヲ以テ煉成ス但シ此ノ配合ハ氣溫ノ高低及用途ニ應シ適宜變更スルコトヲ得	本品ハ使用ニ際シ之ヲ調製スヘシ
四十一	「エナメル」一名「エナメルペイント」又ハ「ワニスペイント」	顔料ヲ油製假漆又ハ酒精性假漆ト煉合シ之ヲ假漆(最可ナリ)若ハ「ボイル」油、「テレビン」油等ヲ以テ適度ニ稀釋セシモノニシテ時トシテハ顔料ヲ「ボイル」油ト煉合シ之ヲ假漆ニテ稀釋シ製スルコトアリ塗布後乾燥膜ハ粘著性ニ富ミ比較的薄ク塗裝面ハ漆ニ似タル美	塗抹法ハ精巧塗及普通塗ノ二種ニ分ツ前者ハ相當ノ體裁ト大ナル耐久度トヲ要スルモノニ施シ後者ハ其ノ程度稍ゝ低キモノニ對シ行フモノトス尚何レニアリテモ金屬具ニ塗抹スルニハ高溫硬化法ニ依ルヲ常トシ又塗施前ニ於ケル除油拭淨ハ十分ナルヘシ	「エナメル」ハ其ノ香氣及乾燥後ノ塗裝面ニ依リテ調製「ペンキ」ト容易ニ之ヲ區別シ得ヘシ「エナメル」ヲ除去スルニハ約六・七倍ニ溶解シタル「カンムス」溶液中ニ浸シ置ク時ハ約一〇時間ニシテ剝離ス又除去後淸水ニテ洗滌シ十分「アルカリ」分ヲ拭ヒ去ルヘシ

		シキ光澤ト假漆ニ似タル香氣ヲ有スルヲ特徴トス尙乾燥速ニシテ燒付ヲモ爲シ得ヘシ		
四十二	生亞麻仁油 煮亞麻仁油（「ボイル」油）	生亞麻仁油ハ亞麻ヨリ得タル透明微黃色ノ液體ニシテ輕微ナル特異臭及甘キ苦味ヲ有シ比重〇・九三〇乃至〇・九三五ナリ乾燥性大ニシテ大氣ニ曝ストキハ漸次酸素ヲ吸收シテ粘著性ヲ帶ヒ遂ニ乾固シテ皮膜ヲ形成ス煮亞麻仁油ハ生亞麻仁油ノ乾燥性ヲ一層強大ナラシメンカ爲加熱シ且之ニ乾燥劑ヲ加味シタルモノニシテ帶青若ハ帶褐黃色ヲ呈シ輕微ノ特異臭及苦味アリ比重〇・九三〇乃至〇・九五〇生油ニ比シ粘度大且乾燥度一層速ナリ	各單獨ニ若ハ兩者相混同シテ使用スルコトアリ煮亞麻仁油ハ生油ヲ一同煮沸スルカ又ハ酸化鉛或ハ硼酸、滿俺等ヲ加ヘ熱シタルモノナリ	礦油、魚油、樹脂油、有害ナル植物油及夾雜物ヲ含有スヘカラス琥珀色若ハ帶褐色ナルハ熱搾ノモノニシテ不快ノ臭氣、辛烈ナル味ヲ有シ粘力強ク塗料ニ使用スヘカラス
四十三	生（煮）荏油	淡黃（黃）色ノ液體ニシテ殆ント無臭比重生荏油ハ〇・九三四ナルモ煮荏油ハ煮熱ノ程度ニヨリ一定スルヲ得ス組成、性質亞麻仁油ニ酷似ス	亞麻仁油ニ代用スルコトヲ得	
四十四	護謨液	「パラ」護謨固有ノ淡褐飴狀態ヲ有スル液體ナリ		本液ヲ檢スルニハ硝子棒ヲ用キ洋紙上ニ薄ク本液ヲ塗布シ乾燥膜ヲ作ラシメ次テ之ヲ剝離延伸シテ透視スルニ不純物ヲ有セス且彈力ニ富ムヲ要ス又本液ヲ塗布スヘキ布片若ハ護謨ノ一片ヲ採リ之ヲ清潔ニ拭ヒ且乾燥セル後可檢液ヲ塗リ適當ニ壓迫ヲ加ヘ粘著ノ度合ヲ檢スヘシ
四十五	黃色防光塗料	護謨液ト黃色染料ヲ混合セル液體ナリ		
四十六	漆	通常生漆ヲ用ウ漆ハ灰色ノ濃褐液ニシテ光線ニ觸ルレハ其ノ色黑褐色ニ變化ス溫氣ヲ含メル溫暖ノ空氣中ニ於テ乾固スル性ヲ有ス採取ノ方法ニ依リ名稱區々ナリ	漆ハ漆刷毛ヲ以テ塗抹シ溫氣ヲ含メル箇所ニ於テ乾燥セシムルヲ通常トス塗漆方法ノ如何ニ係ラス塗漆回數ハ二回以上ナラサレハ效果尠キモノナリ燒漆ハ一三〇乃至一四〇度ノ溫度ニ於テ塗漆ヲ乾燥セシムルモノナリ	生漆ヲ靜置セハ其ノ下層ニ不良部分ヲ沈降スルコトアリ故ニ之ヲ使用スルニ方リテハ攪拌スルコトナク上層ヨリ逐次採出スルヲ可トス生漆ノ良否ヲ檢スルニハ之ヲ薄ク硝子板上ニ塗布シ透視スヘシ此ノ際透明ナル色ヲ呈スルモノヲ良トス又良好ナル生漆ハ前記ノ如ク硝子板ニ塗布後空氣中ニ放置セハ通常ノ天候ニ於テ五、六時間以內ニ乾燥スルモノナリ（梅雨期ニハ二、三時間內ニ）塗漆作業ヲ行フニ當リ要スレハ手指ニ荏種類ノ植物性油ヲ塗リ又作業間漆液ニ觸レタル手指ハ荏種油ノ類ヲ以テ之ヲ拭ヒ去ルヘシ是レ漆「カブレ」ヲ防止センカ爲ナリ又被塗物ニハ油分附著シアラサルコトニ注意スヘシ
四十七	「メニー」	光明丹、白色「ペンキ」亞麻仁油若ハ單ニ光明丹、亞麻仁油ノ合劑ニシテ赤褐色餅狀ノ粘著性大ナル物質ナリ	光明丹ト少量ノ白色「ペンキ」トヲ混和シ之ニ亞麻仁油ヲ少量ツツ加ヘ槌ヲ以テ極メテ叮嚀ニ之ヲ煉リ且敲キ適度ノ餅狀トナスヘシ又緊密ニ密合スヘキ部品相互間ノ塡塞等ニ併用セントスルトキハ白色「ペンキ」ヲ加ヘサル「メニー」ヲ前同法ニ依リ煉和シ亞麻仁油ヲ加ヘテ柔軟ナラシムヘシ	亞麻仁油ヲ煉和スルノミニテハ速ニ乾涸シ易ク使用困難ナルニ至ルコトアリ故ニ粘性保續ノ爲ニ之ニ種油又ハ常用礦油等ヲ混和シ使用スルヲ有利トス

四十八　「アツタペルカ」	帶褐灰色、類褐色ニ帶赤黄色或ハ類白色ノ塊ニシテ熱湯ニ投スレハ軟化シ撓捏性トナリ冷却スレハ復タ固化ス 本品ハ過「クロロフオルム」ニ溶解シ些少ノ殘留物ヲ遺スニ過キス	精製セル「アツタペルカ」ハ六五度乃至七〇度ニ於テ可塑性トナリ一〇〇度ニ於テ溶融ス
四十九　「グリセリン」	澄明無色舍利別樣ノ液ニシテ臭味ナク水、酒精ニハ隨意ノ比例ニ溶解シ脂肪油ニハ溶解セス 比重一・二二五以上トス	駐退機用トシテ規定量ノ水ヲ加ヘ使用ス 極寒地ニ於テハ「グリセリン」二、水一、酒精一ノ配合ニテ使用スルトキハ零下五〇度附近迄ノ射擊ニ堪フルモノトス
備考	一　温度ハ攝氏温度ヲ以テ示ス 二　特ニ測定温度ヲ示ササル比重ハ總テ攝氏一五度ニ於ケルモノトス	

第二篇　手入

第三十五條　兵器手入ノ要旨ハ其ノ構成材料ノ素質ニ應シ常ニ適切ナル保護ヲ加ヘ其ノ發銹、磨損、變質、變形、發黴、蟲害、鼠害等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存竝機能ヲシテ完全且確實ナル狀態ヲ維持セシムルニ在リ

兵器ノ手入ヲ分チ常用品ノ手入及貯藏品ノ手入ノ二トス

第三十六條　常用品ノ手入ヲ分チ普通及精密ノ二トス普通手入トハ通常日常ノ手入及使用ノ前後ニ行フ手入ヲ謂ヒ精密手入トハ普通手入ニ依リ手入十分ナラサル部分又ハ普通分解セサル部分ニ亘リ行フ手入ヲ謂フ

第三十七條　貯藏品ノ手入法ハ常用品精密手入ニ準シ之ヲ行フ而シテ該手入ノ效力ヲ其ノ有效期限迄持續シ爲シ得レハ其ノ期限ヲ延長セシムル爲補修手入ヲ行フコトアリ

第三十八條　手入一般ニ關シテハ前篇ノ規定ニ依ルノ外左ノ件ニ注意スヘシ

一　兵器ハ必要ニ應シ分解シテ手入ヲ行フモノトス但シ精度又ハ機能ヲ害スル虞アル部分ハ已ムヲ得サル場合ノ外分解スヘカラス

二　凡テ塗油ハ多量ニ失スル時ハ徒ニ塵埃ノ附著ヲ増加スルノミナラス反ツテ保存上有害ナルヲ以

ニテ其ノ塗油ハ常ニ適度ナラシムルヲ要ス

但シ摩擦部ニ對シテハ常ニ十分ノ施油ヲナスコトニ注意スヘシ

三 塗料塗施部ニ塗油シ又ハ含油布片ヲ以テ之ヲ拭フヘカラス

但シ鋼部ノ塗料剝脫シタルトキハ適宜補修シ置クヲ要ス若シ塗染スヘキ材料ナキトキハ一時「パラワセリン」若ハ常用礦油ヲ塗布シ置クヘシ

四 注油壺、注油孔及摩擦部等ニ注油スルニハ油ヲ普及セシムル爲觸接部位ヲ回轉壓縮若ハ相互移動セシメツツ行フヲ要ス

五 精密兵器及精密ヲ要スル部位ヲ拭淨スルニ方リテハ塵埃ヲ避ケ得ヘキ場所ヲ選ヒ手入用毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テ之ヲ行フヘシ

六 電氣的接觸部ハ清潔柔軟ナル布片又ハ磨革ヲ以テ拭淨シ決シテ塗油スヘカラス

七 手入ニ方リテハ當該兵器ニ屬スル手入用具ヲ使用スヘシ而シテ反起、損傷、變形、屈曲若ハ機能上ノ缺點ヲ有シ又ハ砂塵等ノ附著セル手入用具ヲ使用スヘカラス之カ爲使用前必ス點檢ヲ行フヘシ

八 手入ノ際各部ノ螺、駐栓、割栓等弛緩セルモノアルトキハ適度ニ之ヲ緊定スヘシ

九 極寒時ニ於テハ防擦用脂油ノ凝固ニ基因スル機能ノ障碍ヲ來スコト多キヲ以テ氣溫ノ程度ニ從ヒ輕ク塗油ヲ拭除スルカ又ハ常用礦油ニ石油ヲ混シタルモノ「アイスマシーン」、「ハリス」油其ノ他ノ耐寒性脂油ヲ使用スルヲ有利トス

第三十九條 兵器ノ手入ニ方リテハ重要ノ度ニ應シ幹部監督ノ下ニ實施スルヲ要ス蓋シ保存ノ良否ハ手入ノ適否ト其ノ巧拙トニ關係スル處大ナルノミナラス此ノ機會ニ於テ實際的敎育ヲ行ヒ得レハナリ

第四十條 常用品ニ在リテハ濕潤期及極寒時ヲ避ケ毎年少クモ一回精密手入ヲ實施スヘシ

第四十一條 貯藏品ニ對スル兵器手入ノ計畫竝實施ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一 貯藏品ニ對スル手入ハ風土、氣候、倉庫ノ景況、兵器ノ種類、保存ノ狀態等ニ依リ其ノ時機及回數ヲ一定スル能ハス以下諸項ヲ參酌シ現況竝抽出檢査等ノ結果ニヨリ適當ニ之ヲ定ムヘシ

二 多數兵器ノ格納ニ在リテハ手入有效期限ノ標準及手入ニ要スル人員材料等ヲ調査(手入基準表)シ之ヲ基礎トシテ永年ニ亙リ一貫セル方針ニ從ヒ手入計畫ヲ確定シ兵器ノ現況及抽出檢査ノ結果等ニヨリ取捨ヲ加ヘ當該年度ノ手入計畫ヲ定ムヘシ

三 兵器保存ノ爲之ニ施シタル脂油類ノ有效期限ハ衞戍地ノ氣候風土、倉庫ノ景況、手入ノ精粗竝格納法等ニ應シ著シク變化スルヲ以テ一定スルヲ得ス抽出檢査其ノ他ノ結果ニ依リ必要ニ應シ機ヲ失セス之カ塗換又ハ補修塗ヲ行フト共ニ必要ノ時機ニ到ラサルニ之カ塗換ヲ行フハ避クルヲ要ス

四　手入ノ有效期限ハ手入實施ノ季節ニ關スルコト大ナルヲ以テ實施ニ方リテハ衞戍地ノ氣象ヲ顧慮シ適切ナル時期ヲ選定スヘシ但シ害蟲發生期濕潤季及極寒時ハ避クルヲ要ス

五　手入ノ實施ハ兵器ノ現況ニ適應スルコト緊要ナルモ動モスレハ其ノ方法一律ニ失シ手入ノ目的ヲ達成スル能ハサルノミナラス往々保存上惡影響ヲ來スコトナシトセス故ニ幹部ハ手入ニ先チ所要ノ選別ヲ行ヒ各選別ニ應スル手入法ヲ指示シ且實施ノ狀態竝結果ヲ確認スルコトニ努ムルヲ要ス

第三篇　格納

第四十二條　兵器ノ格納ニ方リテハ保存ニ注意スルノ外點檢、手入、新陳交換及動員實施ニ便ナル如クスルヲ要ス

第四十三條　格納兵器ノ保存上ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　兵器ハ格納前必ス所要ノ手入ヲ實施スヘシ

二　兵器ヲ陳列懸吊又ハ依托スルニハ保存、取扱竝負擔量ヲ顧慮シ墜落、顚倒、相互ノ損傷及變歪等ノ虞ナキ樣注意スヘシ

三　貯藏品ニハ成ルヘク覆ヲ施シ戶外ヨリ侵入スル大氣ノ直接交感或ハ濕氣、塵埃、蟲害等ヲ防止スヘシ

四　倉庫ノ側壁、屋根裏ニ近接セル位置又ハ入口附近ニ兵器ノ格納ヲ避クヘシ若已ムヲ得サル場合ニアリテハ外氣ノ影響少ナキ厩具、木製品類ヲ格納スルヲ要ス

五　塗油セル鐵部ヲ油ヲ吸收スヘキ物體（棚又ハ木箱等）ニ觸接セシメサルヲ要ス之カ爲メ亞鉛鈑若ハ亞鉛鍍鐵鈑、同鐵線等（已ムヲ得サレハ脂油ヲ吸收セサル油紙ヲ使用スルコトヲ得）ヲ介在セシムヘシ又發條ハ通常壓縮ノ儘格納セサルモノトス

六 格納庫ニ於テ手入ヲ行フコトハ避クヘシ若已ムヲ得ス手入ヲ行フトキハ塵埃ヲ他ノ格納品ニ及ホサシメサル顧慮ヲ要ス

七 庫内ニハ點檢及出納ニ便ナル如ク適宜ノ通路ヲ存シ且採光ヲ顧慮シ格納スヘシ

第四十四條 兵器庫ハ兵器ノ保存ト至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ左ノ件ニ注意スヘシ

一 兵器庫ハ常ニ之ヲ完備シ雨漏、塵埃濕氣、害蟲及鼠族等ノ侵入ニ對シテハ屋根、側壁、床板、入口等ニ密塞若ハ防止ノ設備ヲナスヘシ

二 窓戸ハ平素閉鎖シ出入口ハ出入時ノ外開カサルモノトス然レトモ乾燥ニシテ塵埃ノ飛揚セサル日ヲ選ヒ時々換氣ヲ行フヲ要ス殊ニ庫内濕潤スルカ温熱高キ際ニ於テ然リトス床下ノ換氣孔ハ通常之ヲ開放スヘシ

三 庫内ハ常ニ清潔ニシ且窓ニハ日覆ヲ用ウル等日光ノ直射ヲ避クヘシ

四 倉庫ノ周圍ハ排水ヲ良好ナラシムヘシ

五 床面、梁及革具掛等ハ安全荷重ヲ調査シ格納兵器ヲシテ該荷重ヲ超過セシメサルヲ要ス

六 倉庫內ハ勿論其ノ附近ニ於テモ火氣ノ使用ヲ避クヘシ而シテ倉庫ノ近傍ニハ必要ニ應シ水桶、砂函、砂嚢等防火用設備ヲナシ置クヲ要ス

第四十五條 格納兵器ノ區分並標記ハ兵器取扱規則ニ依ルノ外左ノ件ニ注意スヘシ

一 格納兵器ハ使用ノ順序、新陳交換等ニ便ナル如ク制式ノ區分、製作年次及程度ニ從ヒテ區分スヘシ

二 多數ノ小部品ヨリ成ル兵器及交換性ヲ有セサル部品ヨリ成ル兵器ハ特種ノ格納ヲ要スルモノノ外組毎ニ格納スルヲ可トス

三 部品少數ニシテ保管員數夥多ナル兵器ハ部品毎ニ集團スルヲ有利トス

四 保存上分離格納ヲ要スルモノニシテ彼此交換ヲ許サザルモノニハ合番(符)號ヲ附スヘシ

五 數量夥多ナルモノハ抽出及視察ニ便ナル如ク格納スヘシ又取扱上及員數點檢ニ便ナル如ク基數ヲ定メ一基數毎ニ結束、懸吊、堆積又ハ集團スルヲ可トス

六 密閉格納品ニアリテハ密閉年月日及收容員數等ヲ掲記シ要スレハ密閉時ニ於ケル濕度、氣温等ヲ附記スヘシ

第四篇　檢査

第四十六條　兵器檢査ノ要旨ハ兵器ノ現況ヲ知悉シ手入取扱ノ進歩ヲ促シ併テ將來ノ處置ヲ迅速ニシ以テ兵器ヲ良好ナル狀態ニ保存セムトスルニアリ之カ爲損傷、機能ノ障碍、發銹、發黴其ノ他ノ事故ヲ發見セシトキハ必ス其ノ原因、制式、製造、取扱又ハ保存等ノ何レニ歸著スヘキヤヲ探究シ同一過失ニ陷ラサル如ク速ニ手入、加修、豫防法若ハ將來ノ處置ヲ講スヘシ

第四十七條　常用品ノ檢査ヲ分チテ普通及精密ノ二トス普通檢査トハ通常日常手入後若ハ使用ノ前後ニ行フ檢査ヲ謂ヒ精密檢査トハ通常精密手入後若ハ特ニ必要ナル時期ニ於テ行フ檢査ヲ謂フ

第四十八條　檢査一般ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　材料各部ノ傷損變形及變質

イ　腐蝕、燒蝕、局部膨脹、疵痕及磨滅ノ景況

ロ　著シキ打痕、反起、變形ナキヤ就中重要部分ノ打痕、變形等ハ微少ト雖注意ヲ要ス

ハ　裂傷、挫折、屈撓又ハ捻轉ナキヤ及其ノ程度ハ實用上差支ナキヤ

ニ　摩擦部滑走部ニ著シキ磨損ナキヤ

ホ　桿、軸中實用ニ適セサル程度ノ屈撓變歪ナキヤ

ヘ　諸樞軸磨滅ノ爲連繫部相互ニ著シキ動搖ヲ生シ實用上差支アルモノナキヤ

ト　殼筒軸及軸承ノ摩擦部磨滅シ若ハ燒損ヲ生シアラサルヤ

チ　支駐、支耳、駐楔、駐鍵、割栓等ニハ反起磨損、缺損ナク其ノ效用十分ナリヤ

リ　及部、齒部、螺子部等ニ磨損、缺損ナキヤ及研磨良好ナリヤ

ヌ　刳缺部隅角、綴釘部等ニ龜裂ナキヤ特ニ塗抹部ニ對シテハ注意ヲ要ス

ル　革具中實用ニ適セサル程度ニ軟化延伸、硬化、龜裂、損傷及縫絲部破綻セルモノナキヤ

ヲ　木部ニ反張、乾裂、腐朽、蟲害、缺損ナキヤ又相互遊隙ノ爲弛緩動搖ヲ生セルモノナキヤ

二　各部機能ノ良否

イ　發條中折損セルモノナキヤ又其ノ抗力ハ實用上適當ナリヤ

ロ　諸轉把轉輪ハ旋回圓滑容易ニシテ且作用確實ナリヤ又著シキ空轉ナキヤ各部ノ給油裝置ハ機能完全ナリヤ

ハ　指標ト分畫(刻線)ト一致セサル爲誤差ヲ生シ實用ニ適セサルモノナキヤ又指針ノ指度正確ナリヤ

ニ　齒輪、永轉螺、起動螺桿、諸樞軸部ハ塗油十分ニシテ嚙合確實ナリヤ

ホ　瓦斯又ハ液體ノ漏孔部著シク開大セサルヤ

ヘ　瓦斯又ハ液體ノ漏洩ナキヤ

ト　冷却裝置ハ其ノ機能完全ナリヤ

チ　軋音ヲ發スルモノナキヤ又ハ過熱スル部分ナキヤ

リ　各種瓣、活筍、活塞等ノ機能十分ナリヤ

ヌ　鉤部ニ鉤スヘキモノハ其ノ作用確實ナリヤ

ル　絶縁抵抗、導體抵抗ハ規定ノ範圍内ニアリヤ

ヲ　規定ノ電力ヲ有スルヤ

ワ　漏電部ナキヤ

カ　磁石類ノ磁力ハ完全ナリヤ

ヨ　避雷裝置竝其ノ機能ハ完全ナリヤ

タ　絶縁物ハ完全ニシテ其ノ效用十分ナリヤ

レ　曇リ、斑點又ハ斑紋、其ノ他手入不良等ノ爲透視、反射、屈折等ノ作用十分ナラサルモノアリヤ

三　結合法ノ適否

イ　結合法ノ不良ナル爲機能、精度ニ影響ヲ及ホセルモノナキヤ

ロ　結合部品中落失又ハ損失セルモノナキヤ就中坐鈑、緊塞革、緊革護謨等ハ其ノ效力十分ナリヤ

ハ　駐螺、牝螺、駐釘、綴釘、駐鐶、脚鐶、托鐶等ハ確實且十分ニ緊定セラレアリヤ

ニ　駐栓、割栓、駐鍵等ハ完全ニ結合セラレ且作用十分ナリヤ

ホ　部品番號ハ一致シアリヤ

ヘ　駐螺發條又ハ其ノ他ノ部品ヲ誤リテ結合セルモノナキヤ

ト　轉螺器、分解器等ノ使用法ハ適當ナリヤ

四　修理法ノ適否

イ　加修期ヲ失スルモノナキヤ

ロ　加修法適當ナラス反ツテ機能ヲ害シ又ハ毀損セルモノナキヤ

ハ　熱處理ハ適當ニ實施セラレアリヤ

ニ　加修ノ爲不適當ナル材料ヲ使用シアラサルヤ又古品修理ニ夥多ノ新品材料ヲ使用セルモノ若ハ加修ノ位置適當ナラサルモノアリヤ

ホ　加修ニ方リ制式改修正ヲ確實ニ實施シアリヤ

ヘ　戻回又ハ移動防止ノ爲駐剋若ハ目打止ヲ確實ニ實施シアリヤ

ト　金屬部ニ生シタル反起等ハ適時鑢削又ハ適當ニ加修シアリヤ

チ　研磨又ハ齒振適當ニシテ次回ノ使用ニ支障ナキ程度ニナシアリヤ

リ　部品ヲ交換シ加修シタル際其ノ適合良好ニシテ且仕上作業ハ十分ナリヤ

ヌ　革具穿孔ノ實施ハ規定ニ合シアリヤ

ル　麻製品中甚シク褪色セルモノナキヤ

五　施油ノ適否

イ　塗油ノ量適當ナルヤ（革具ノ脂油適度ナルモノハ之ヲ指大ノ曲度ニ彎曲スルニ龜裂ヲ生セスシテ稍、變色スルモ原形ニ復スレハ革色舊ニ復スルモノトス但シ彎曲點ハ鐶孔及縫綴部ノ位置ヲ避クヘシ）

ロ　塗脂油ノ前後ニ於ケル手入十分ナリヤ（特ニ貯藏品手入ノ際ハ塗油前拭浄ノ良否及塗油後ニ於ケル塗油普及ノ狀況ヲ檢スヘシ）

ハ　塗脂油ハ隅角部迄十分治及シ且等齊ナリヤ

ニ　塗脂油ノ使用區分ヲ誤ラサルヤ

ホ　注油孔、注油壺、油溜等ノ油ノ補給十分ナリヤ

ヘ　摩擦部、滑動部等ニ對スル施油量潤澤ナリヤ

ト　射撃前ニ於ケル各部ノ施油十分ナリヤ

チ　格納兵器ニ對スル脂油ノ效果ハ尚十分アリヤ又脂油ノ剝脱セルモノナキヤ

リ　乃部ヲ有スル部品中乃部ニ塗料ヲ塗施セルモノアリヤ

ヌ　塗料膠著ノ爲機能ヲ害セルモノナキヤ

ル　革具ハ現況ニ應シ種類竝用途ヲ顧慮シ塗油ヲ實施シアリヤ

六　銹及汚垢ノ有無

イ　金屬部特ニ主要部ニ發銹ナキヤ

ロ　塗染、鍍金（鍍部全體ヲ含ム以下同シ）ノ内部ニ發銹ナキヤ（外觀完全ナルカ如キ皮膜モ詳細ニ檢スルトキハ往々其ノ内面ニ發銹、腐蝕ヲ來セルコトアリ多クハ龜裂又ハ膨起等ヲ存スルニヨリテ容易ニ識別スルヲ得）

ハ　發銹ニ對スル手入又ハ適當ノ處置ヲ講シアリヤ

ニ　革具、麻布製品中著シク汚垢脂油ノ膠著又ハ塵埃ノ附著セルモノナキヤ

ホ　諸收容罐或ハ箱匣内等ニ塵埃汚垢ナキヤ

七　發黴、蟲、鼠害ノ有無

イ　革、各種布製品及綱類中發黴ナキヤ之カ豫防法適當ナリヤ又黴ノ傳播防止法ヲ講シアリヤ

ロ　革、各種布製品及綱類中鼠害ナキヤ

ハ　毛、布、木製品及綱類中蟲害ナキヤ（害蟲ノ排泄物、小孔又ハ生虫棲息ノ有無等ニ注意ス）

ニ　防蟲、防鼠、防腐法ハ適當ニ實施シアリヤ

八　銹染、染烘、鍍金又ハ塗料塗施ノ適否及剝脫ノ有無

イ　銹染、染烘、鍍金又ハ塗料塗施前ニ於ケル舊塗物若ハ鍍金ノ剝脫淸拭十分ナリヤ

ロ　前項各部ニ著シキ剝脫ナキヤ又剝脫部ニ發銹ナキヤ

ハ　不要ノ部分又ハ塗施スヘカラサル部分ニ塗料ヲ施セルモノナキヤ

ニ　塗料平等ナラサルモノ又ハ下塗塗料ヲ施ササルモノナキヤ

九　手入又ハ取扱方法ノ良否

イ　兵器內外部ニ土砂、塵埃、汚垢又ハ汚油等ノ著シク附著セルモノナキヤ特ニ主要部ニ土砂等ノ逆入セルモノナキヤ

ロ　手入又ハ取扱法ヲ誤リ機能ヲ害シ或ハ局部ヲ磨損セシメタルモノナキヤ

ハ　手入ノ時期ヲ遷延セシ爲兵器ヲ損傷セルモノナキヤ

ニ　腐蝕又ハ銹ノ除去ニ方リ案リニ布鑢若ハ藥品類ヲ使用シタルモノナキヤ

ホ　手入用具ハ確實ニ之ヲ使用シアリヤ

ヘ　使用間局部ノ破損又ハ衰損ヲ生シ易キ部品ニ對シ時々局部ノ位置ヲ變換スル如ク注意シアリヤ

ト　布製品及綱類ハ淸潔ニシテ且乾燥シアルノ注意ヲ拂ヒアリヤ

十　保存用脂油ノ品質及效力

イ　脂油ハ固有ノ色度ヲ有シ異樣ノ臭氣ヲ發セサルヤ

ロ　透明度ハ可ナリヤ又比重ハ適當ナリヤ

ハ　酸廢等ノ爲變色セルモノナキヤ又膠狀物質ノ發生ナキヤ

ニ　異物ノ混入ナキヤ

十一　格納法ノ適否

イ　格納品ニ對スル手入ハ適當ニ實施シアリヤ

ロ　格納兵器庫內ニ於ケル濕氣、塵埃、蟲鼠害、雨漏等ニ對スル處置適當ナリヤ

ハ　密閉格納ハ其ノ方法適當ナリヤ

ニ　格納兵器ノ區分法及其ノ標示法適當ナリヤ

ホ　格納位置配列及懸吊堆積法ハ適當ナリヤ又倉庫ノ負擔荷重ニ對スル顧慮ヲ拂ヒアリヤ

ヘ　塗油ノ木部等ニ吸收ニ對スル防止處置適當ナリヤ

ト　發條及螺子類ハ輕ク緩メテ格納シアリヤ

十二　制式改正實施ノ適否

イ　兵器制式ノ改修正ハ適當ニ計畫シ實施シアリヤ

ロ　制式改修正實施作業ハ誤リナキヤ

十三　員數ノ過不足、部品ノ混交、異式品ノ有無、豫備品、附屬品ノ整否

第四十九條　檢査スヘキ部分竝其ノ程度等ハ使用又ハ貯藏ノ狀況ニ依リ一定スルヲ得スト雖要ハ保存ノ目的竝爾後ノ使用上遺憾ナカラシムルヲ主眼トシ適宜取捨スルニ在リ

第五十條　檢査ハ兵器各部ヲ區分シテ施行スルトキハ遺漏ナク且綿密ニ行フコトヲ得ヘシ

第五十一條　貯藏品ノ檢査ハ常用品精密檢査ニ準シ之ヲ行ヒ又數量夥多ナルトキハ若干數量ノ結果ニヨリ全般ノ狀態ヲ推定スル爲抽出檢査ヲ行フコトアリ

第五十二條　抽出檢査ヲ行フヘキ時機及數量ハ左ノ要旨ニヨリ決定スヘシ

一　抽出檢査ハ通常保存上不良ノ感作ヲ與フル季節（害蟲ノ孵化或ハ蛹化期節等）又ハ其ノ前後ニ於テ行フ

二　檢査數量ハ其ノ大ナルニ從ヒ判定愈〻確實ナルモ兵器ノ構造、保存ノ現況竝保管數量特ニ精密手入後ノ經過年月等ヲ顧慮シ既往ノ經驗ニ徵シ之ヲ定ムヘシ

三　抽出檢査ハ全般ニ亙ルヲ要ス然レトモ各種ノ狀況最不良ナル部分ヨリ成ルヘク多ク之ヲ選出スヘシ

第五十三條　抽出檢査ニ於テ異狀ヲ認メタル兵器ハ其ノ狀況ニヨリ概ネ左ノ處置ヲ爲スヘシ

一　異狀ノ程度若ハ其ノ數量僅少ナルトキハ更ニ若干數ヲ檢シ其ノ狀態カ一般的ナルヤ否ヤヲ判定スヘシ

二　異狀カ一般的ナルモ一局部ニ止マルモノハ其ノ局部ノミ一般ニ手入ヲ施行シ否ラサルモノハ全般ニ亙リ有效期間ノ如何ニ關セス精密手入ヲ行フヘシ

第五十四條　常用品ニ對シテハ使用前主トシテ要部ノ點檢ヲ行ヒ損傷ヲ豫防スヘシ又使用後ニアリテハ各部ノ變歪、毀傷及紛失ノ有無ヲ檢シ特ニ要部ニ生セシ損傷ノ如キハ輕微ノモノト雖速ニ修理ヲナスヘシ其ノ他使用間ニアリテモ休止等ノ際ヲ利用シ動搖又ハ緩解シ易キ部分ニ對シ注意スルヲ要ス

第五十五條　加修品ノ竣工受領ニ際シテハ必ス檢査ヲ實施シ加修法ノ適否若ハ所要部加修ノ如何ヲ確認スルヲ要ス

第五十六條　腔中又ハ管ノ內壁等ヲ檢スルニハ日光、電燈、蠟燭等ニヨリ鏡面ノ反射ヲ利用シ若ハ覘視用眼鏡ノ類ヲ使用スルトキハ一層其ノ點檢ニ有利ナリトス

第五十七條　腔中瑕瑾ノ形跡又ハ一般機能上摺合部相互密合ノ狀態等ヲ點檢スルニハ「グッタペルカ」ヲ以テ摸取シ若ハ「メニー」ノ類ヲ其ノ局部ニ塗抹シテ檢査スヘシ

「グッタペルカ」ハ之ヲ溫湯ニ浸シ手ヲ以テ十分捏和シ適度ノ軟性ヲ呈シタルトキ之ヲ摸取セムトスル部分ニ當テ其ノ上ニ該局部ニ準シタル木板ヲ載セ十分ニ之ヲ壓シ約三、四分ノ後硬化スルニ至リ除去スヘシ

「メニヒ」ハ光明丹ヲ錬和シ之ニ亞麻仁油ヲ加ヘテ柔軟ニシ鈍著性ヲ有スル物質(永ク粘度ヲ保メシムル爲ニハ種油、常用礦油等ヲ混和スルヲ可トス)トナシ之ヲ検セムトスル摺合部ニ薄ク塗飾シテ挿入又ハ嚙合セシメ塗布面ノ状況ニヨリ相互密接ノ程度等ヲ知ルヘシ

第五篇　塗替

第五十八條　塗換ハ部具全部ニ行フヲ通常トス然レトモ發銹又ハ剝脱ノ景況一部ニ止マルモノニアリテハ其ノ局部ノミニ補修塗ヲ施スコトヲ得

第五十九條　金屬部ノ塗料ヲ塗換フルニハ齒鎚等ヲ用キ其ノ面ヲ輕ク且直角ニ敲クカ或ハ掃除箆、削箆ノ類ヲ以テ輕ク舊塗料ヲ搔キ落シ布鑢、木賊等ヲ以テ殘餘ノ塗料又ハ銹ヲ除去シ雜巾類ヲ以テ拭淨(此ノ際成ルヘク研磨部ニ素手ヲ觸レシムヘカラス)シタル後塗料ヲ施スヘシ塗布面研磨ノ際要スレハ石油、揮發油、「テレビン」油、「クレオソート」油等ヲ用ウルコトヲ得

第六十條　塗料ヲ除去スル爲薬液(有效ナルハ「カンムス」液(甲號(木材用)乙號(鐵材用))ヲ其ノ儘又ハ水ニ稀釋シタルモノ、苛性曹達ト白絞油トノ混合液、苛性曹達ヲ水ニ溶解シ之ニ生石灰若ハ礦油ヲ加ヘ攪拌セルモノ及「クレオソート」油等トス)ヲ用ウル場合ニハ棕梠刷毛ニテ之ヲ塗料表面ニ塗リ暫時放置ノ後簓(ササラ)ノ類ヲ以テ其ノ塗抹面ヲ搔キ廻シ更ニ棕梠刷毛ニテ搔キ目ヲ整ヘ約十四、五分以上ヲ經過スレハ塗層溶解スルヲ以テ之ヲ箆ニテ掬取リ且撒水シツツ十分塗層ヲ除去シ後清水ヲ以テ洗滌スヘシ

第六十一條　塗料塗換ヲ行フニハ通常下塗一回上塗二回トシ刷毛類ヲ以テ平等ニ塗布スヘシ但シ毎回下層塗料ノ十分乾燥セシヲ確認シタル後其ノ塗面ヲ布鑢等ヲ以テ平滑ニシ且塗層ノ瑕瑾ヲ除去シ以テ新塗層トノ密著ヲ良好ナラシムヘシ補修塗モ亦之ニ準ス

第六十二條　器具箱其ノ他木部ノ塗換ニ方リテハ拭淨ノ後十分之ヲ乾燥セシメ通常舊塗料ヲ剝脫スルコトナク其ノ一部若ハ全部ニ塗料ヲ施スヘシ

第六十三條　假漆ノ塗換ヲ行フニハ「クレオソート」、「テレビン」油若ハ酒精ニ浸シ舊塗料ヲ溶解セシメ之ヲ除去（舊塗料ノ溶解ニハ約二十四時間ヲ要ス）シ素地ヲ乾燥、拭淨ノ後數回ニ亙リ假漆ヲ塗施スヘシ（塗層ハ下層程薄クシテ必要トス又塗面ハ常ニ乾燥シアルヲ要ス）

第六十四條　塗料ノ塗施ハ酷暑、嚴寒、濕潤期等ヲ避ケ通常三乃至五月及九乃至十一月ニ於テ天氣晴朗ナル日ヲ選ヒ之ヲ實施スルヲ可トス

第六篇　取扱上ノ注意

第六十五條　兵器ハ濫ニ之ヲ分解及結合スルトキハ機能ヲ害スルニ至ルヲ以テ必要ノ場合ノ外之ヲ避クヘシ又分解ニ方リテハ手入檢査及修理等ニ必要ナル部分ノミニ限リ猥リニ他ノ部分ニ及ホスヘカラス

第六十六條　分解結合ハ兵器取扱法ノ規定ニ遵フ外左ノ件ニ注意スヘシ

一　分解ハ規定ノ順序及方法ニ遵ヒ且分解セル各部品ハ順序正シク之ヲ竝列シ毀損、汚染、混同又ハ紛失等ヲ避クヘシ又結合ニ際シテハ各部品ノ番號ニ注意シ順序正シク之ヲ行フヘシ

二　轉螺器其ノ他ノ分解器ハ手力ノ及ハサルトキニ限リ之ヲ使用シ確實ニ部位ニ嵌入若ハ之ヲ挾持セシメ偏傾滑脫セシメサルヲ要ス

三　螺子ニ相當セサル轉螺子或ハ螺鑰ヲ使用スヘカラス尙鎚頭螺鑰又ハ自在螺鑰ナキ場合ニ限リ之ヲ使用スルモノトス

四　螺子ヲ緊定スルニハ通常右旋シ戻囘スルニハ左旋スルモノトス然レトモ時トシテハ之ニ反スルモノアルヲ以テ分解ニ方リテハ其ノ方向ヲ確認スルヲ要ス螺子ノ緊定ニ方リテハ常ニ過度ノ力ヲ加フルコトヲ避クヘシ

五　數箇ノ螺子ヲ以テ螺著セルモノヲ戻回若ハ緊定スルニハ相對スル螺子ヲ交互ニ旋回スヘシ

六　割栓ヲ嵌裝セシトキハ其ノ端末ヲ開キ置クヘシ但シ發條性ヲ有スルモノニアリテハ此ノ限リニアラス

又駐鍵及駐楔ノ全部ヲ挿入セラルルモノハ其ノ效ナキヲ以テ交換スヘシ

七　蛇線發條ハ猥リニ之ヲ伸縮スルコトナク又結合ニ際シ必要以外ニ力ヲ加ヘ全壓縮ヲセシメサルヲ要ス

平扁發條ハ必要以外ニ屈撓セシムヘカラス折損スルコトアレハナリ

八　結合ニ際シテハ各部ノ檢査及手入ヲ十分ニ施行スヘシ特ニ屢、分解セサルモノニ於テ然リ

九　分解及結合困難ナルトキハ強テ之ヲ行フコトナク將校ノ指揮ヲ待チテ處置スヘシ

第六十七條　螺桿、樞軸等ニ於テ磨滅ノ爲遊隙ヲ生シ軸方向ニ著シク動搖スルモノハ適宜坐鈑ノ類ヲ挿入シ木部乾燥ノ爲相互間ニ遊隙ヲ生シアルモノハ塡木ヲ行ヒ以テ空轉又ハ動搖ヲ防止スルヲ要ス

木部ノ傷裂、反傷等ハ適宜傷部ヲ除去シ塗料ヲ塗施シ要スレハ塡木スヘシ

第六十八條　屬品匣、中箱、器具箱等ハ其ノ塡實ヲ確實ニシ要スレハ木綿又ハ苧屑ノ類ヲ以テ空部ヲ充塞シ運動間裝塡品ノ動搖スルコトナカラシムヘシ

第六十九條　各部品竝屬品匣内ノ豫備品ハ主體ニ適合セルコトヲ確認シ置クヲ要ス但シ豫備品ニアリテハ本部品ト交換シ交互ニ使用セサルモノトス

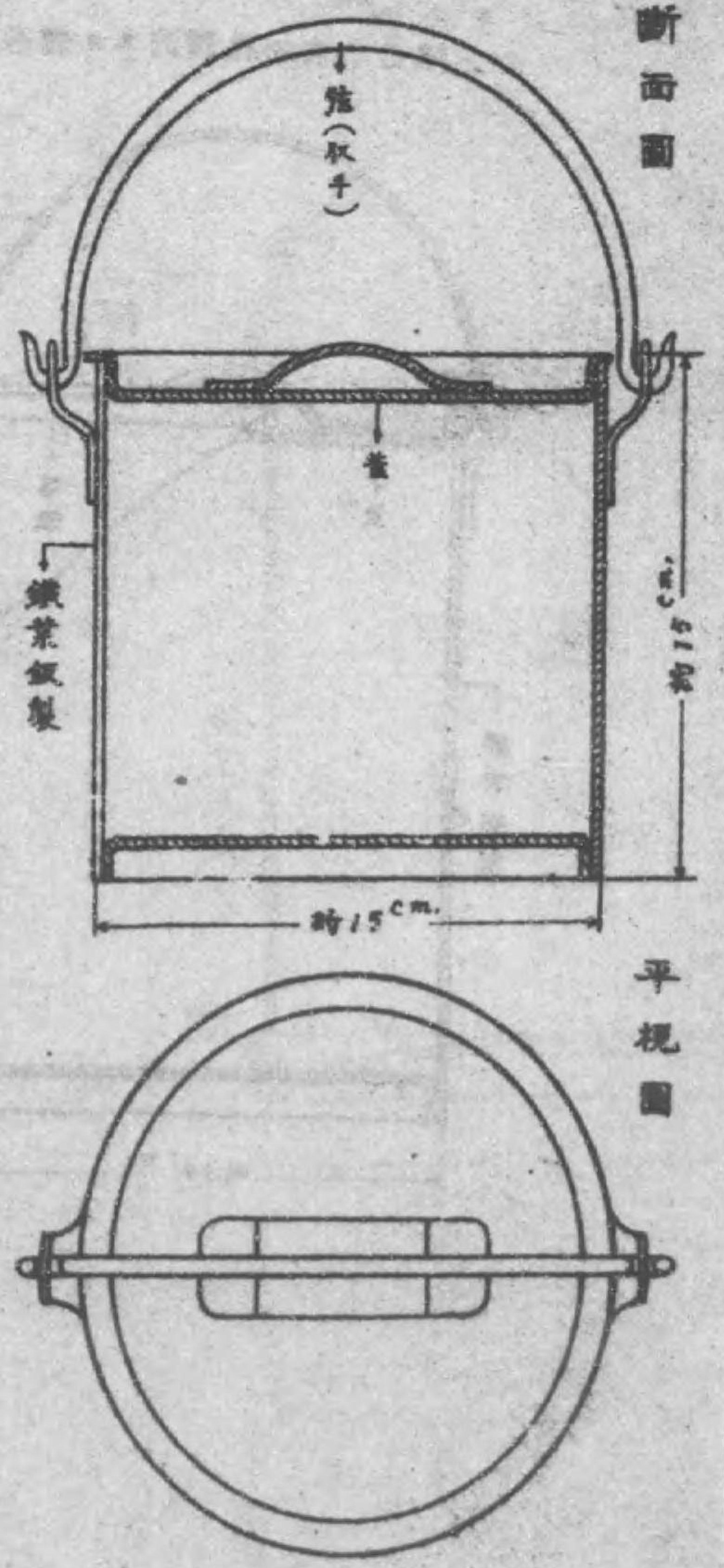
第七十條　空擊ハ必要ナル場合ノ外之ヲ避クヘシ

第七十一條　極寒地ニ於テハ銃砲屬品中ノ豫備品ニハ格納用礦油ヲ塗布スルコトナク常用礦油若ハ「ワセリン」ヲ用ウヘシ之レ急遽ニ豫備品ノ交換ヲ要スルトキ格納用礦油膠著シテ加熱スルニアラサレハ除去シ難キヲ以テ野外ノ取扱ニ適セサレハナリ

附圖

第三圖

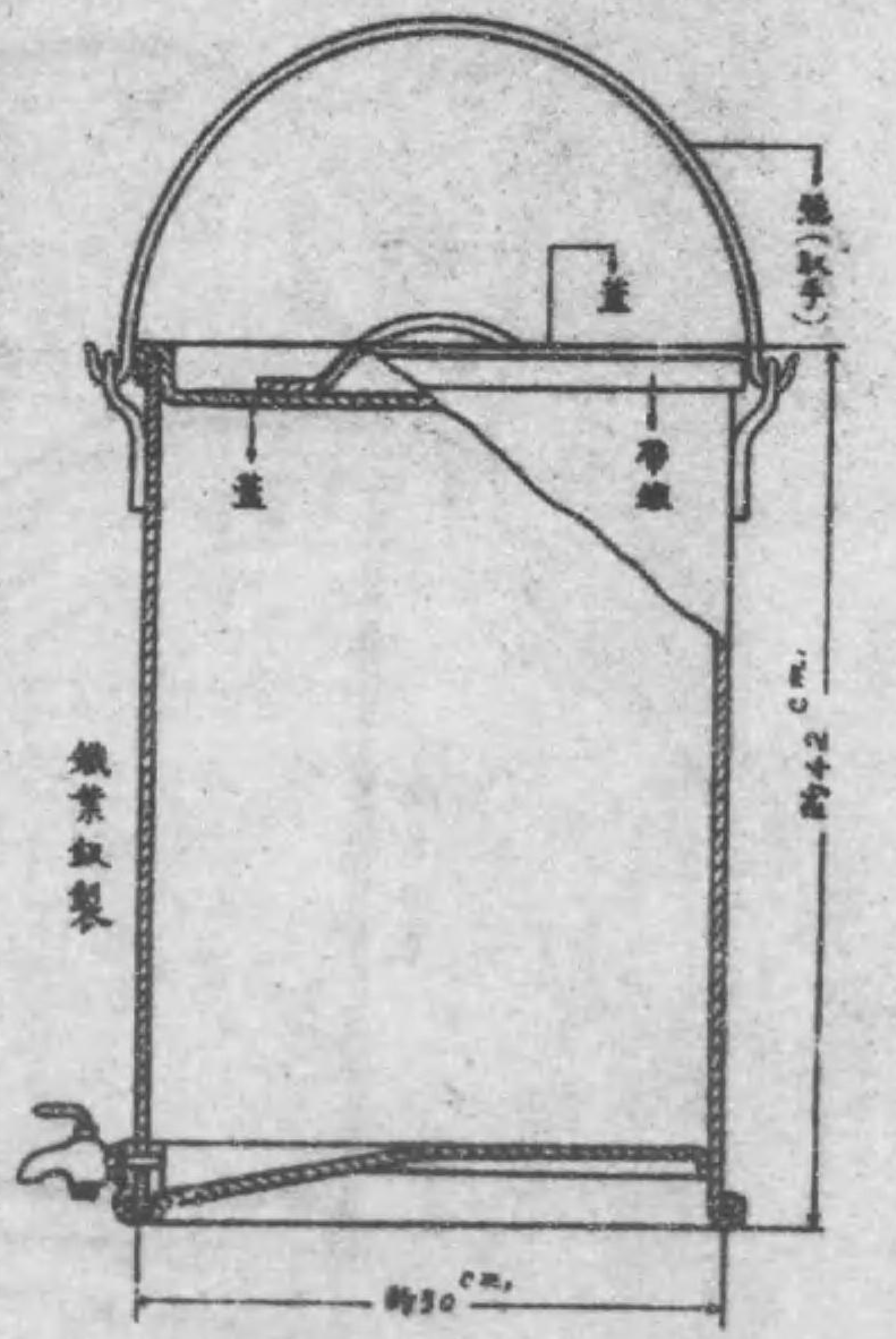
「ペンキ」容器



附圖

第一圖

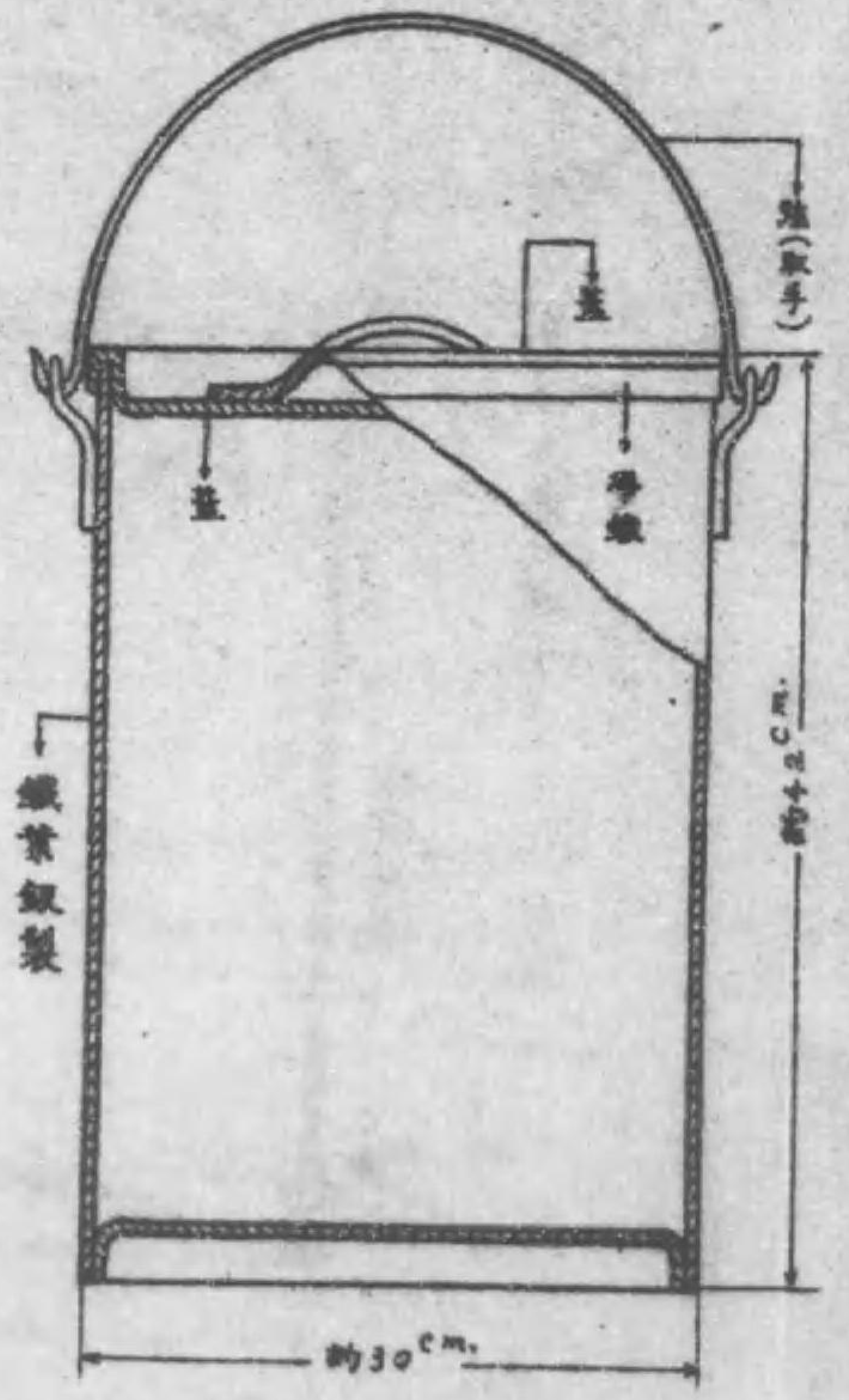
液状脂油用小出罐



備考　平視圖ハ概ネ第三圖ニ同シ

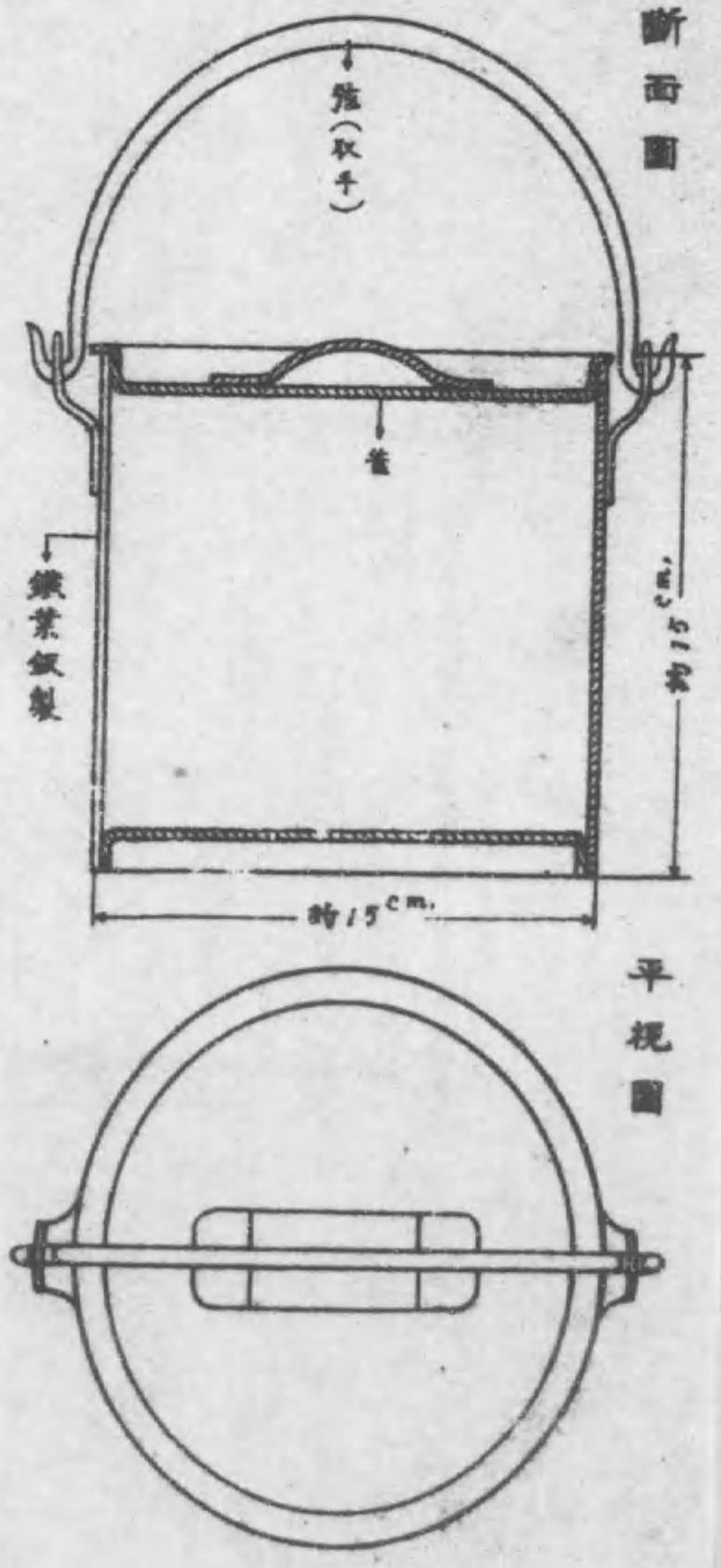
第二圖

固體及半固體脂油用小出罐



第三圖

「ペンキ」容器

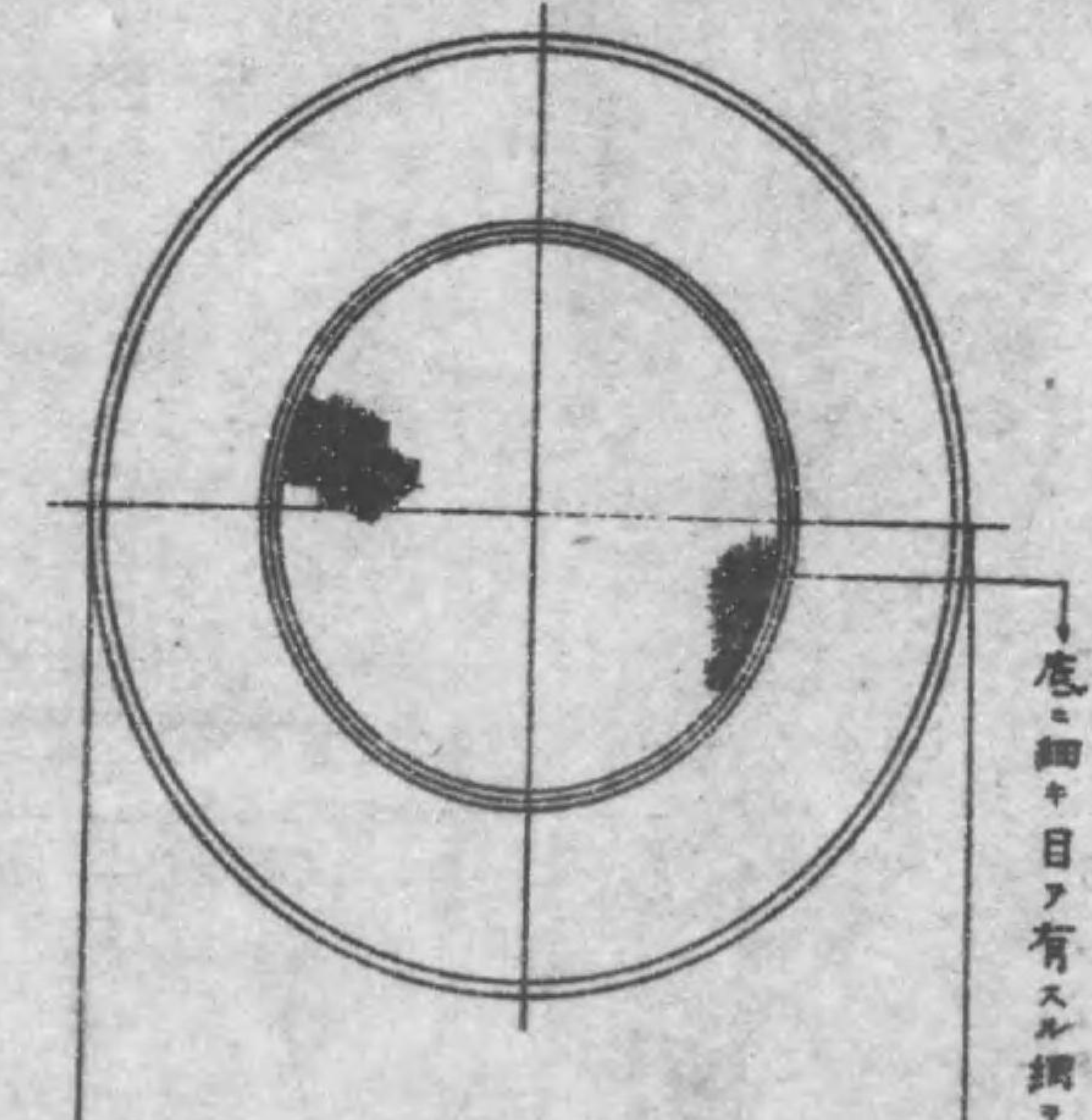


附圖

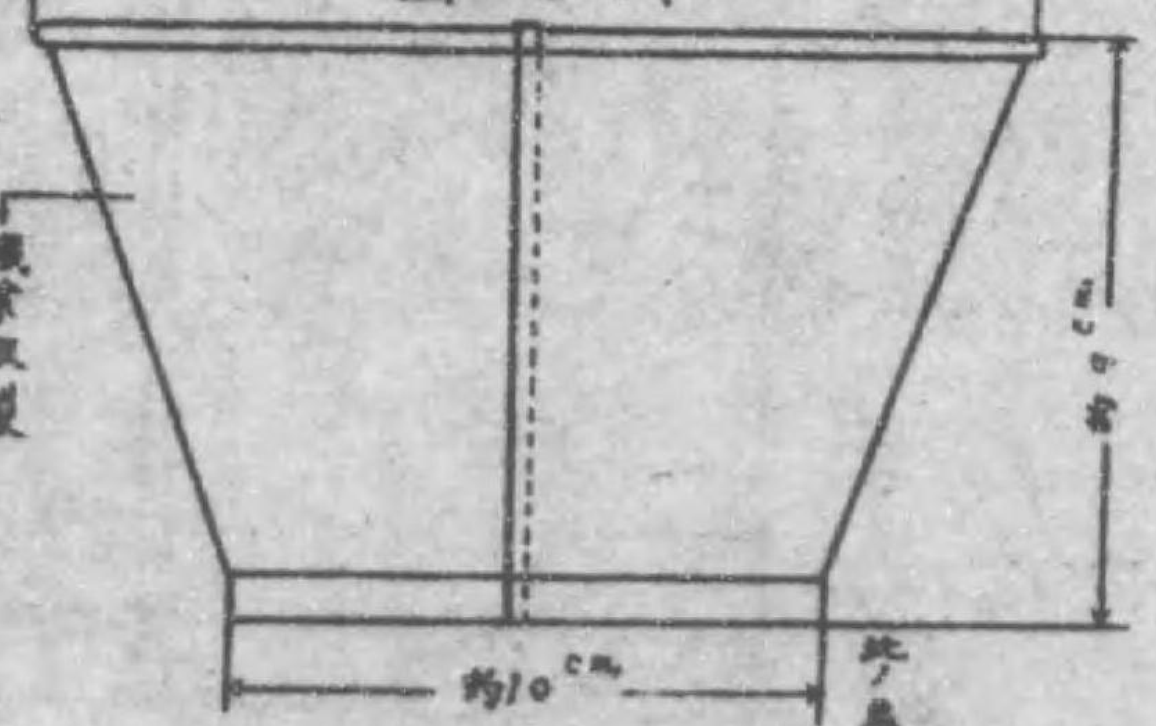
第四圖

「ペンキ」濾器

平視圖



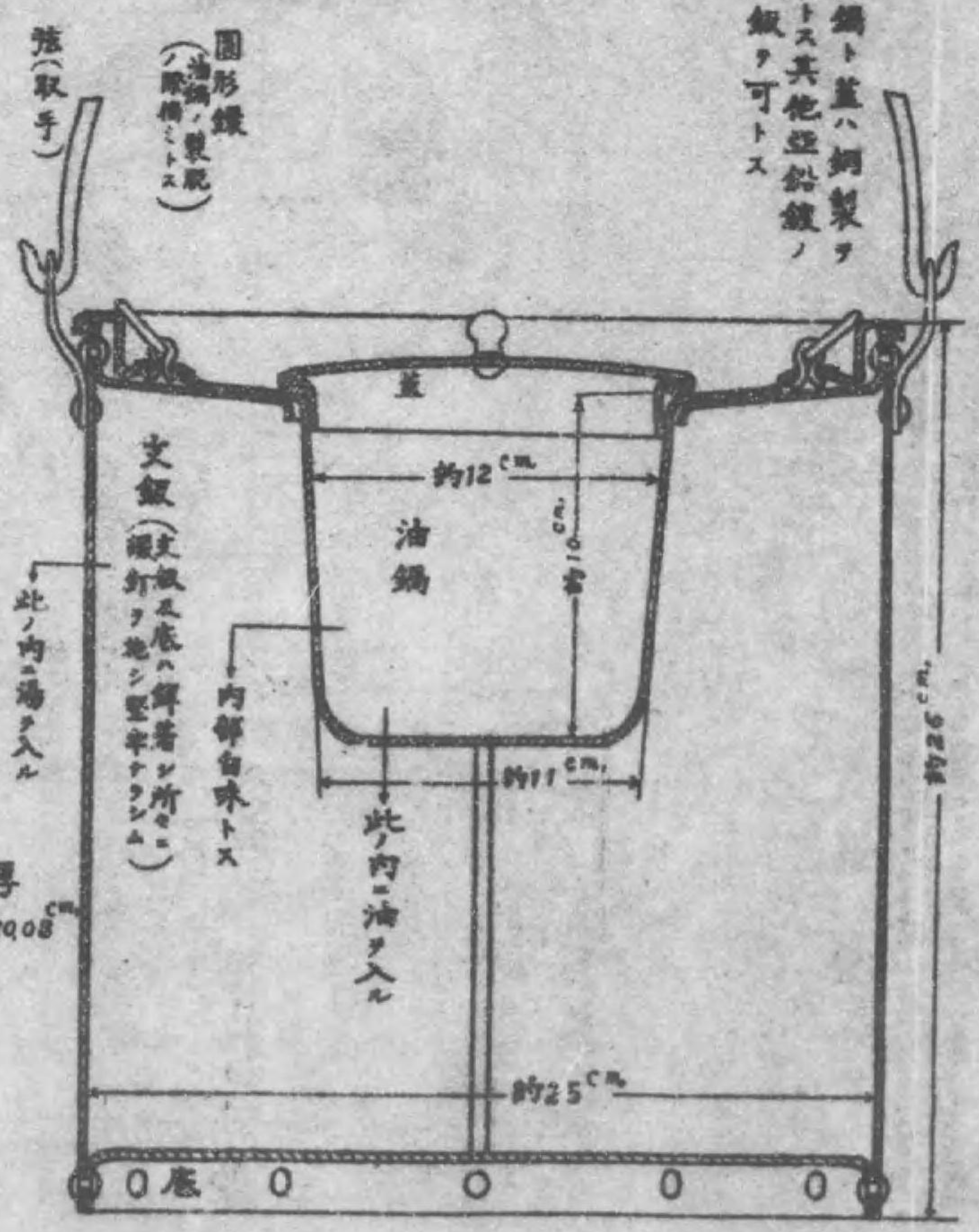
側視圖



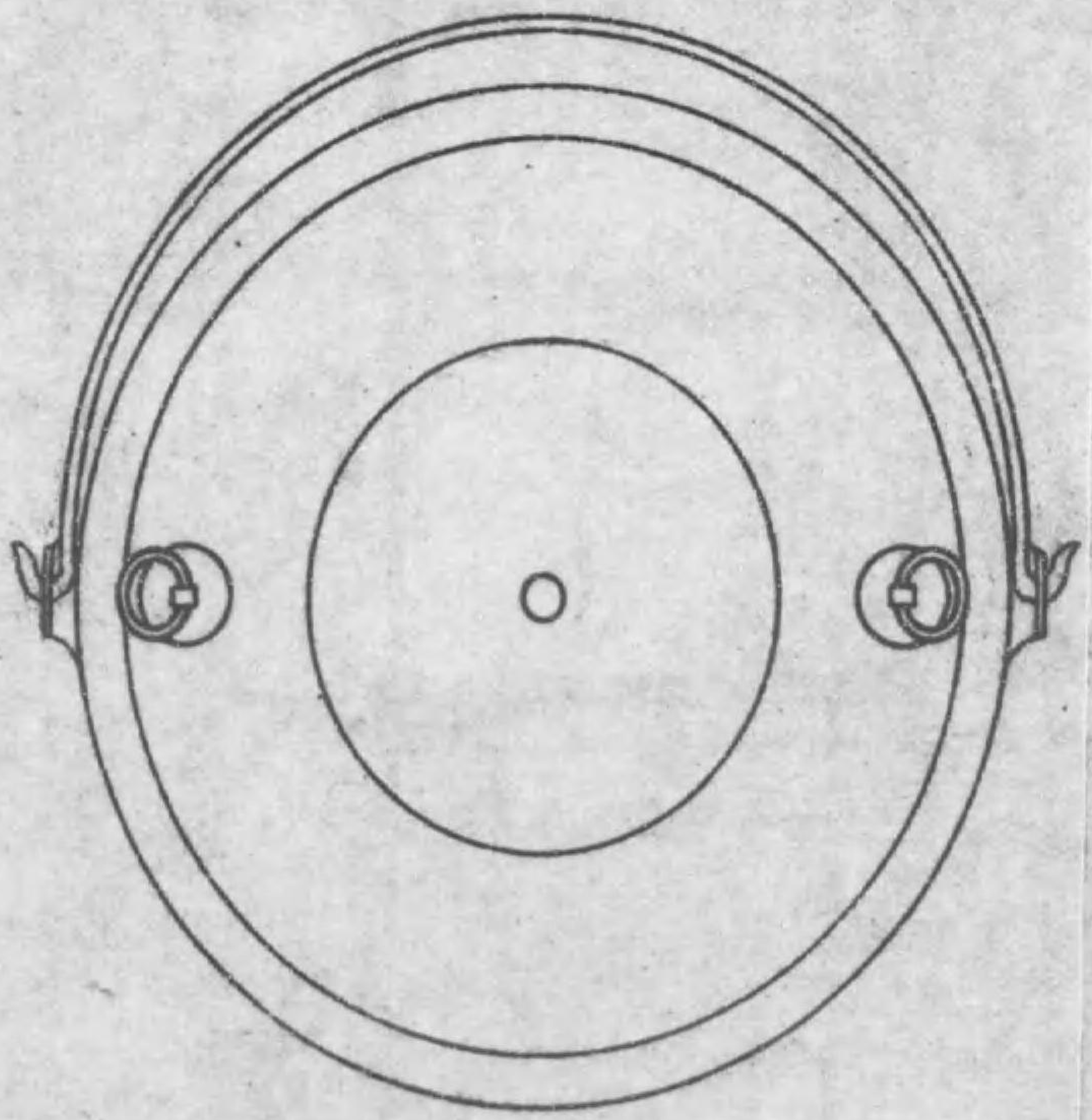
第五圖

脂油熔融用湯煎鍋

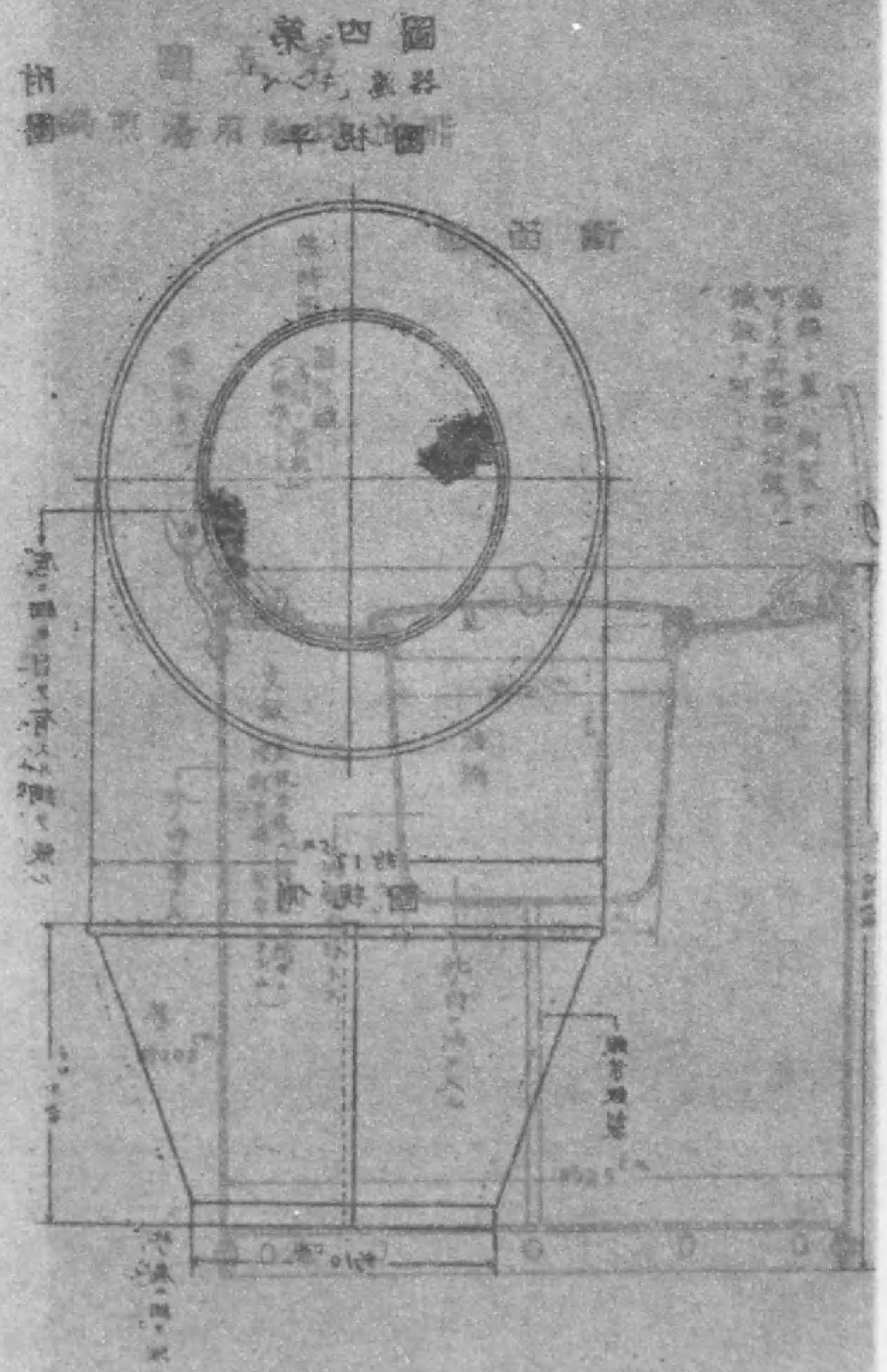
斷面圖



平面圖



第二類　刀、劍、銃、喇叭、歩兵砲



第二類　刀、劍、銃、喇叭、歩兵砲

目次

第一篇　三十二年式軍刀、三十年式銃劍……一頁

第一章　手入……一

第二章　格納……一

第三章　檢査……二

附錄　特別分解及結合……三

第二篇　三八式小銃、四四式騎銃……五

第一章　手入……五

第二章　格納……八

第三章　檢査……九

第四章　取扱上ノ注意……一二

第三篇　二十六年式拳銃……一四

第一章　手入……一四

第二章　格納……一四
第三章　檢査……一五
第四篇　機關銃……一七
第一章　三年式機關銃……一七
第一節　手入……一七
第二節　格納……一九
第三節　檢査……一九
第四節　取扱上ノ注意……二三
第二章　三八式機關銃……二五
第一節　手入……二五
第二節　格納……二六
第三節　檢査……二六
第四節　取扱上ノ注意……二七

第三章　十一年式輕機關銃……二九
第一節　手入……二九
第二節　格納……三〇
第三節　檢査……三〇
第四節　取扱上ノ注意……三四
第五編　喇叭……三七
第一章　手入……三七
第二章　格納……三七
第三章　檢査……三八
第四章　取扱上ノ注意……三八
第六篇　步兵砲……三九
第一章　十一年式平射步兵砲……三九
第一節　手入……三九

第二節　格納……四五
第三節　檢査……四七
第四節　取扱上ノ注意……五四
第二章　十一年式曲射歩兵砲……五四
第一節　手入……五五
第二節　格納……五七
第三節　檢査……五八
第四節　取扱上ノ注意……六三

第二類　刀、劍、銃、喇叭、步兵砲

第一篇　三十二年式軍刀、三十年式銃劍

第一章　手入

第一條　鞘ノ精密手入ハ刀ニアリテハ鯉口及鞜板、劍ニアリテハ上下部彈鎖子ヲ脫シ（之カ爲メ彈鎖子抽出桿(附圖第一圖)ヲ使用ス）洗滌用油ヲ鞘内ニ注入シ細キ針金類ヲ以テ底部ヲ攪拌シ適宜鞘ヲ動カシテ不潔物ヲ溶解セシメ該油ヲ去リ更ニ之ヲ乾燥シ常用礦油ヲ注キテ再ヒ鞘ヲ動カシ後倒立シテ油ヲ滴下セシムヘシ又銃劍鞘底ニ汚油膠著シ前記ノ方法ヲ以テ除去シ得サルトキハ彈鎖子抽出桿ニ布片ヲ裝シ挿入シ之ヲ拭除スヘシ（雨水等ノ著シク浸入セシ際ニ於テモ之ニ準ス）又貯藏品ト雖鞘内部ニハ特ニ格納用礦油ヲ塗布セサルモノトス

第二章　格納

第二條　刀ニアリテハ刀身ハ鞘ト分離シ已ムヲ得サレハ少シク抽出シ駐爪發條鯉口發條及切羽ノ衰損ヲ豫防シ劍ニ在リテハ劍身尖部ノ下部彈鎖子ニ觸接セサル程度ニ抽出シ格納スヘシ

第三章　檢査

第三條　刀劍ノ日常檢査ニ於テハ腐蝕、銹痕、破損、屈曲、手入等一般事項ノ外特ニ左ノ件ニ注意スシ

一　鯉口發條ノ機能良好ナリヤ但シ鞘板ハ鯉口發條ニヨリ正シク其ノ位置ニ保定セラレアリヤ又其ノ剝片鞘內ニ殘存セサルヤ

二　駐爪發條ノ機能良存ナリヤ但シ同發條ハ刀身ヲ正シク鞘ニ收メタルトキ其ノ爪部確實ニ鯉口ニ鉤シ刀身ト鞘トノ間ニ動搖ヲ來ササルヲ良トス

三　駐筍頭ハ十分緊定シアリヤ（駐剋ニ注意ス）駐筍ノ螺頭駐筍頭面ニ突出セサルヤ竝駐筍發條ノ機能良好ナリヤ

四　鞘、鯉口、鍔間ニ著シキ遊隙ナキヤ又鯉口ニ「切込ミ」ナキヤ（主トシテ加修法ノ不適當、劍身挿脫ノ際ノ不注意及滅反法ノ不良ヨリ生ス）

五　上、下部彈鎖子ノ機能良好ナリヤ但シ前者ハ劍ヲ倒ニシ鞘ヲ握リテ之ヲ上下ニ振ルモ劍身容易ニ脫出セス又後者ハ劍ノ柄部ヲ握リ之ヲ廣側面ノ方向ニ振ルモ鞘底部ニ音響ヲ發セサルヲ良トス

六　刀、劍身中衰損ノ爲彈性ヲ失セルモノアリヤ又滅反ハ規定ニ合シアリヤ

附錄　特別分解（精密手入、修理若ハ特ニ必要アル場合ニ普通分解セサル部分ニ亙リ行フ分解トス）及結合

第一　軍刀々身ノ分解及結合ノ順序方法左ノ如シ

一　分解

イ　蟹目轉螺子ヲ以テ柄頭牝螺ヲ戻回離脫シ次テ柄材駐牝螺ヲ戻回シテ同駐牡螺ヲ抽脫ス

ロ　刀身ヲ柄ヨリ抽出ス若シ抽出困難ナルトキハ木槌ヲ使用スヘシ

ハ　護拳ヲ離脫スルニハ其ノ尖端ヲ少シク外方ニ開キ柄鐶ノ駐筍ヨリ之ヲ脫シ次テ他端ヲ柄頭ヨリ脫ス

ニ　柄鐶、駐爪發條ヲ脫ス

二　結合

イ　駐爪發條ヲ裝シタル柄材ヲ柄ニ裝著シ次テ柄鐶ヲ柄ニ裝ス

ロ　駐爪發條ヲ護拳ニ挿入シ護拳ノ小端ヲ少シク柄頭ニ入レ柄鐶ノ兩駐筍ニ結合シタル後更ニ同小端ヲ柄頭ニ挿入ス

ハ　切羽ヲ裝セル刀身ヲ柄ニ裝シ柄材駐牡螺ヲ駐爪發條ト反對側ヨリ挿入シ同駐牝螺ヲ螺著シ柄頭牝螺ヲ螺著ス（切羽ナ刀尖方向ヨリ結合スルハ誤レル方法ナリトス）

第二　刀鞘ノ結合ニ於テハ鞘板ヲ鞘內ニ挿入シ其ノ端ヲ鯉口ヨリ少シク出シ置キ鯉口發條ヲ兩鞘板間ニ挿入シ次ニ鞘、鞘板及鯉口發條ノ駐螺孔ヲ一致セシメタル上鯉口駐螺ヲ螺著スヘシ

第三　銃劍々身ノ分解及結合ノ順序方法左ノ如シ

一　分　解

イ　柄木駐螺ヲ戻回シ柄木ヲ離脱シ駐杙螺及駐坐ヲ脫ス

ロ　萬力（口側ヲ裝ス）ニ駐筍頭ヲ咬ヘシメ劍身ヲ旋回シテ駐筍頭ヲ脫シ駐筍及發條ヲ離脫ス

二　結　合

イ　駐筍ヲ柄頭ニ裝入シ發條ヲ裝シタル後駐筍頭ヲ螺著シ駐筍ト同頭トノ接際部（駐筍ニ約三分同頭ニ約七分）ニ目打ヲ刻ス

ロ　柄木ヲ結合スルニハ駐杙螺ヲ駐筍頭側ノ柄木ニ裝シ駐坐ヲ他ノ柄木ニ裝著シタル後柄木ヲ柄ニ裝著シ駐螺ヲ螺著ス

第四　劍鞘ノ分解ニ於テ上部彈鎖子抽出困難ナルトキハ彈鎖子抽出桿ヲ以テ鞘ノ劍身背部ノ方側ニ於テ上部彈鎖子ニ鉤セシメ抽出スヘシ又下部彈鎖子ハ鞘ヲ倒ニシ口部ヲ木槌ニテ輕打スレハ下降スルモ若シ下降セサルトキハ彈鎖子抽出桿ヲ鞘ノ狹キ方側ニ挿入シ彈鎖子屈曲部ニ鉤シテ抽出スヘシ

第二篇　三八式小銃、四四式騎銃

第一章　手　入

第四條　腔中ノ普通手入ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　腔中ニ存スル汚垢銹痕又ハ殘渣等ノ除去ニ方リ單ニ布片ノミノ拭磨ニヨリテ其ノ目的ヲ達成スルコトハ多クハ困難ナルノミナラス徒ニ磨滅ヲ增大スルノミナリ此ノ如キ場合ニ於テハ腔面ニ多量ノ脂油類ヲ塗布シ暫時放置シ銹痕ノ素因タル物質ヲ浮出セシメ布片ハ單ニ其ノ浮出セル物質ヲ拭去スルニ止ムヘキモノトス

二　銃ヲ常ニ同一狀態ニ於テ架又ハ臺上ニ托シ手入ヲナストキハ假令保心筒ヲ使用スルモ腔面ニ偏磨ヲ生スルハ免ルヘカラサルモノトス故ニ手入ニ方リテハ適時銃ヲ回轉シ手入具ヲ以テ銃腔同一部ヲ偏磨セシメサル如クスルヲ要ス

第五條　日常手入ニ於テ銃腔、藥室ノ拭淨ニ際シテハ槊杖、遊底、彈倉附隨品ヲ脫シ銃ヲ略水平ニ臺上又ハ架上ニ托シ保心筒（內孔ノ變形セサルモノヲ使用スヘシ）ヲ裝シタル洗矢ニ布片ヲ纏繞シテ之ヲ腔中ニ挿入スルト共ニ保心筒ヲ尾筒ニ裝シ徐々ニ洗矢ヲ進退シテ舊油ヲ拭淨シタル後保心筒ヲ除キ藥室ハ藥室掃除棒ヲ以テ拭淨ノ後洗矢ニ布片ヲ纏ヒ腔中藥室ニ塗油スヘシ（旋回洗矢ヲ使用セサルトキハ其ノ旋回ニ抵抗セサル如ク洗矢ヲ支持スルヲ要ス）洗矢ヲ使用シ能ハサル

トキハ槊杖ニ補足槊杖ヲ装著シテ手入ヲ行フモノトス

藥室ノ拭淨ハ藥室掃除棒ニ布片ヲ纒卷（端末ハ布片ヲ以テ覆ヒ木部ヲ露出セサルヲ要ス）シテ挿入シ旋回又ハ進退シテ十分蓄油ヲ除去スヘシ（附圖第六圖）

銃尾（四四式騎銃ニシテ銃口蓋ヲ装シタル場合ニアリテハ銃口）ヨリ銃口（銃尾）附近ノ附著物除去困難ナルトキハ銃口（銃尾）ヨリ手入スルコトヲ得但シ手入用具ヲ銃口（銃尾）部ニ接觸セサル如ク布片等ニテ保持スヘシ銃身後端尾筒内部及遊底各部等ハ圓筒掃除桿ニ布片ヲ纒ヒ拭淨スヘシ（附圖第七圖）

第六條　射撃前ニ於テハ腔中藥室ヲ拭淨ノ後含油布片ヲ以テ塗油スヘシ特ニ空包射撃前ニアリテハ常用礦油、「ワセリン」又ハ格納用礦油ト常用礦油トノ混合油ヲ稍、多量ニ塗布スルヲ要ス

第七條　射撃後腔中藥室ヲ拭淨スルニハ日常手入ニ準シ常用礦油又ハ石油或ハ以上ノ混合油ニ浸シタル布片ヲ洗矢ニ纒ヒ之ヲ進退シ且屢、布片ヲ取換ヘ燼渣又ハ汚物ノ附著セサルニ至リ乾布ヲ以テ拭淨シ稍、多量ニ塗油スヘシ此ノ際洗滌臺ヲ使用シ洗滌手入ヲ行フトキハ一層有利ナリトス

洗滌法手入ニ於テハ先ツ洗滌用油（常用礦油、石油、以上ノ混合油或ハ揮發油等）ヲ洗滌臺油壺ニ入レ銃口ヲ該油中ニ浸ス如ク銃ヲ同臺ニ托シ旋回洗矢（頭部ニ豚毛製洗頭又ハ脱脂綿、布片ノ類ヲ附ス）ヲ進退シ洗滌用油ニヨリ汚垢燼渣ヲ洗滌除去スルモノトス但シ常用礦油以外ノ油使用後ハ十分之ヲ除去スル爲更ニ一度常用礦油ヲ以テ洗滌スルヲ要ス又洗滌用油ハ通常下洗用、中洗用及仕上洗用ノ三段ニ區分使用シ洗滌ノ效果ヲ大ナラシムルヲ可トス

第八條　射撃後ハ發銹ノ防止、附著燼渣ノ除去ヲ容易ナラシムル爲直ニ腔中藥室ノ手入ヲ行フヘシ若シ速ニ手入ヲ行フノ餘裕ナキトキハ少クモ稍、多量ノ塗油ヲ行ヒ一時同部ノ發銹ヲ防遏スルヲ要ス此ノ際重錘式塗油紐又ハ噴油器ノ類等ヲ使用スルトキハ一層有利ナリトス（附圖第九圖）腔中藥室ニ附著セル燼渣ハ一回ノ手入ニ於テ完全ニ除去スルコト困難ナルヲ以テ爾後布片ニ汚物ノ全ク附著セサルニ至ル迄日々之ヲ復行スヘシ

第九條　腐蝕甚シキ銃ニ對シテハ常ニ注意シテ手入ヲ行フヘシ殊ニ使用後ニ於テハ洗滌（若ハ輕ク拭淨）ノ後多量ノ常用礦油ヲ塗施シ暫時放置シ汚物ノ浮上ルヲ待チテ拭淨シ稍、多量ノ塗油ヲ行ヒ發銹ノ機會ナカラシムヘシ

第十條　手入用具ノ完否ハ腔中磨滅ニ影響スルコト多大ナルヲ以テ特ニ之カ整備ニ就キテハ注意ヲ要ス小銃手入ニ方リテハ左ノ器具ヲ使用スルヲ可トス但シ必要ニ應シ其ノ樣式ヲ變更シ又ハ他ノ器具ヲ使用スルモ妨ケサルモノトス

イ　旋回洗矢（附圖第二其ノ一、其ノ二）洗頭ヲ装著シ洗滌臺ト相俟ツテ腔中洗滌又ハ拭淨用ニ供ス

ロ　腔中手入用洗頭（附圖第三）旋回洗矢ニ装著シ膠著セル火藥燼渣、脂油及銹等ヲ除去ス

ハ　腔中塗油用洗頭（附圖第四）旋回洗矢ニ装著シ腔中ノ塗油ニ供ス

ニ　藥室掃除棒（附圖第六）頭部ニ布片ヲ纏絡シ藥室内ヲ拭淨ス

ホ　藥室塗油用刷毛（附圖第五）柄部ヲ適當ニ屈折シ藥室ノ塗油ニ供ス

ヘ　切出刷毛　銃身外部其ノ他ノ部分ノ塗油ニ供ス

ト　圓筒掃除桿（附圖第七）圓筒内外部、擊莖發條室等ノ手入ニ供ス

チ　細部塗油用毛筆　刷毛ヲ使用シ能ハサル部分ノ塗油ニ供ス

リ　小銃腔中洗滌臺及銃托架（附圖第八其ノ一、其ノ二）木製架ニシテ前者ハ銃ヲ約二十五度ニ托シ洗矢洗頭ヲ腔中ニ挿入シ之ヲ進退セシメ洗滌ヲ行フ又後者ハ腔中手入等ノ際銃ヲ水平ニ托スルニ供ス

ヌ　重錘式塗油紐（附圖第九）野外ニ於テ簡易ニ腔中ニ塗油スルニ供ス

第二章　格納

第十一條　銃ヲ格納スルニハ格納用銃口蓋ヲ裝シ遊底ヲ閉チ擊莖ハ發射ノ位置ニ置キ通常木被ト床尾トニ依リ銃架ニ托スルモノトス

第十二條　彈藥盒ハ懸吊ノ場合ニ於テハ左ノ如ク實施スヘシ

一　前盒ハ壓蓋革ヲ開キテ倒ニシ紐類ヲ以テ兩側鈕ニヨリ重疊結束ス（此ノ際變形毀損セサル樣注意ヲ要ス）

二　後盒ハ油壺ヲ脱シ蓋ヲ開キ倒ニシ底革ノ二穿孔ニ紐ヲ通シ前盒ノ如ク結束スヘシ（此ノ際鈕ニテ他盒ノ表皮ヲ傷ツケサル樣注意ヲ要ス）

三　騎銃彈藥盒ハ油壺ヲ脱シ蓋ヲ開キ負革短革ノ聯鐶部ヲ結束スヘシ

第三章　檢査

第十三條　普通檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　手入

腔中藥室、尾筒内部、圓筒及擊莖駐胛内部、擊莖頭部ハ清潔ナリヤ又塗油ハ適當ニ實施セラレアリヤ

二　分解結合

イ　用心鐵ハ銃床面ヨリ突起シ或ハ銃床面ニ平行セサルモノ若ハ動搖スルモノナキヤ（用心鐵ノ結合不良ナルモノハ往々銃ノ命中精度ヲ害スルコトアリ）

ロ　尾筒長、短駐螺ハ十分緊定シアリヤ殊ニ長駐螺ノ端本尾筒内面ヨリ甚シク低下シアラサルヤ（駐螺ノ緊定不十分ナルモノ及不良ノモノハ往々銃ノ命中精度ヲ害スルモノトス）

ハ　上帶、下帶ハ發條ニ十分鉤シアリヤ（然ラサルトキハ往々銃ノ命中精度ヲ害スルコトアリ）

ニ　劍ノ駐筍ハ戾回スルコトナク又螺頭ハ駐筍頭ト同高ナリヤ劍起伏ノ狀態ニ於テ著シク動搖

スルコトナキヤ

ホ　槊杖ハ上帶發條ニ鉤シアリヤ槊杖上部駐溝ノ上方弧接部カ全部同室ニ沒入スルハ槊杖室底突破セルモノトス

ヘ　轉扉ノ機能ハ良好ナリヤ

ト　照尺軸中表尺鈑起伏ニ伴ヒ旋回セサルモノアリヤ

三　機能

イ　安全裝置ハ確實容易ナリヤ逆鈎頭ノ後面カ左側尾筒階段部面ヨリ過度ニ前方ニアル時ハ安全發匠ハ困難ナルモノトス

ロ　抽筒及蹴筒機能ハ確實ナリヤ抽筒子爪部磨損又ハ變形シ若ハ同發條部衰損スルトキハ抽筒機能不良トナリ又蹴子ノ圓筒ト觸接スル部分過度ニ磨損スルトキハ蹴筒機能不良トナルモノトス

ハ　受筒鈑扛彈機能十分ナリヤロ、ハノ檢査ニハ擬製彈ヲ使用スヘシ

ニ　引鐵ノ抗力過弱(弱落)又ハ早落スルモノ或ハ軋落ナキヤ以上ハ主トシテ逆鈎頭部及擊莖擊發段ノ磨損變形逆鈎ト同室トノ摩擦ニヨル

ホ　引鐵ノ二段ニ鉤セサルモノナキヤ(一段落)主トシテ彎形部ノ磨損ニヨル

ヘ　引鐵ヲ半ハ引キ之ヲ放ツトキ旧位ニ復セサルモノナキヤ(引ブラ)主トシテ逆鈎頭部及擊發段ノ觸接面磨損シ傾斜スルニヨル

ト　引鐵ヲ逆ニ引キタル際擊發スルモノナキヤ(逆落)及第二段以後ニ於テ引鐵ノ引キ長キモノナキヤ(長落)前者ハ早落ノ一種ニシテ後者ハ主トシテ第二彎形部ノ形狀不正ナルニヨルモノトス

チ　遊底ノ閉鎖完了セサルニ擊發スルモノナキヤ(半閉鎖落)逆鈎筒尾筒內面ヨリ過度ニ低キトキハ閉鎖完了セサルモ擊發シ得ルモノトス但シ桿梃脚ト尾筒同室下部トノ間隙四粍以內ニ於テ擊發スルハ妨ケナシ

リ　照尺遊標ノ上緣ハ表尺鈑刻線ト零粍五以上相違スルモノナキヤ又表尺鈑ノ屈曲セルモノ及起立ノ際直角ナラサルモノアリヤ

四　損傷

イ　銃腔損傷ノ有無程度竝手入ノ良否

ロ　銃身中屈撓(四四式騎銃ニアリテハ特ニ銃口部及劍ノ屈撓)セルモノアリヤ

ハ　照準機各部損傷竝結合ノ良否

ニ　擊莖尖頭變形及腐蝕ノ有無變形腐蝕大ナルモノハ雷管突破若ハ擊莖折損ヲ來ス

ホ　擊莖頭圓筒包底面ヨリ突出ノ度一乃至二粍ノ間ニアルヲ可トス及圓筒包底面擊針孔ノ闊大、變形ノ有無

ヘ　抽筒子爪部缺損ノ有無

ト　上帶、下帶ノ動搖著シク動搖スルモノハ命中精度ヲ害ス

チ　上支鐵上面ニ於ケル損傷擊莖駐脚ノ結合不良ナルモノヲ尾筒ニ裝入スルトキハ駐脚耳部ヲ上支鐵ニ衝突セシメ損傷ヲ生ス及同後部銃床ノ龜裂ノ有無

リ　木被ノ浮動セルモノ及同龜裂ノ有無

第十四條　射擊前後ニ於テハ各部ニ對シ檢査ヲ實施スヘシ發射ニ際シ瓦斯多量ニ後方ノ漏出セシトキハ藥莢、圓筒頭部、駐退桁、擊莖頭、抽筒子、藥室、尾筒駐退桁室等ニ就キ異狀ヲ檢スヘシ又特ニ射擊後ニ於テハ腔中藥室ヲ檢スルヲ要ス殘渣ノ除去シ終ル迄ハ特ニ注意スヘシ

命中試驗前ニ於テハ損傷結合狀態等ニシテ命中精度ニ關係アル部分ニ對シテハ十分ニ注意シ檢査ノ上要スレハ加修シタル後使用スヘシ然ラサレハ射擊ノ成果ヲシテ往々徒勞ニ歸セシムルコトアリ

第十五條　特別分解及結合ヲ行ヒシトキハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　上帯若ハ床冠部ノ銃身相當部ニ著シキ偏壓ノ痕跡ナキヤ

二　銃床、木被、尾筒、用心鐵、彈倉、上下支鐵ニ刻セル部品番號ハ一致シアリヤ

三　木被駐坐、上帯發條駐坐、同駐螺頭ハ銃床ノ銃身室ニ突出シアラサルヤ（突出セルトキハ銃身ト銃床トノ結合ヲ妨ケ且銃ノ命中精度ヲ害スルコトアリ）

四　蹴子駐螺、遊底駐子駐螺ハ十分緊定シアリヤ（然ラサレハ銃床ト尾筒トノ結合ヲ妨ケ銃ノ命中精度ヲ害スルモノトス）

第四章　取扱上ノ注意

第十六條　取扱ニ方リテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一　遊底離脫ノ際ハ擊莖駐胛筍ニテ床尾ヲ損スヘカラス

二　槊杖裝入ニ際シ銃床ノ槊杖室底ヲ擊突セシムヘカラス

三　銃口、照星、照尺及遊底ヲ地ニ觸レシメ又銃ヲ依托スル際照星ヲ直接物體ニ接觸セシムヘカラス

四　銃ヲ使用セサルトキハ擊莖發條ヲ擊發ノ位置ニ置キ銃口ニハ銃口蓋ヲ裝シ木、紙、布片等ニテ假栓スヘカラス

五　銃身ト銃床トノ接際ニ大ナル遊隙ヲ存スルモノニハ硬脂ヲ附著シ置クヘシ

六　四四式騎銃ノ劍ハ必要以外ニ屢、起伏セシムヘカラス又起立ノ際ハ過度ニ力ヲ加ヘサルヲ要ス

七　彈藥ハ先ツ彈倉內ニ裝塡シ遊底ニヨリ藥室ニ裝入スヘシ彈藥ヲ最初ヨリ藥室ニ裝入シ遊底ヲ閉鎖スルトキハ抽筒子ノ保存ヲ害スルモノトス（但シ狹窄射擊用實包ハ最初ヨリ藥室ニ插入ス）

第三篇 二十六年式拳銃

第一章 手入

第十七條 常用品ノ手入ニ方リテハ左ノ如ク實施スヘシ

一 用心鐵、左銃把、擊鐵發條、支桿、搬軌、押桿、擊鐵及彈巢ヲ離脫シ布片ヲ纒繞セル洗矢若ハ柄杖ヲ銃尾ヨリ腔中ニ挿入シ舊油ヲ拭除シタル後塗油スヘシ

二 彈巢及同軸摩擦部ニハ稍〻多量ニ塗油スヘシ又排筒桿ハ藥莢蹴出ノ位置トシテ手入スヘシ

三 銃身ヲ俯仰シ銃身及銃床外面竝槓桿鈑ト遊鈑トノ間隙ニ塗油スヘシ（但シ後者ニハ稍〻多量ニ塗油シ銃身ヲ數回旋回シテ油ヲ內部ニ洽及セシムルヲ要ス）

第十八條 射擊後ハ前條ノ外小銃射擊後ノ手入ニ準シ實施スヘシ

第十九條 貯藏品ノ手入ハ常用品ニ準據スヘシ

第二章 格納

第二十條 格納ニ方リテハ左銃把ハ之ヲ離脫シ又嚢ハ通常嚢蓋ヲ鎖筍ヨリ脫シ鈹鉋ハ之ヲ脫シテ別ニ格納スルヲ要ス

第三章 檢査

第二十一條 普通檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一 手入

腔中藥室、銃床內部各部品、排筒桿竝同桿ト彈巢トノ觸接部、銃床擊針孔等ノ拭淨及塗油ノ良否

二 分解結合

イ 銃身ノ上下左右ニ動搖スルモノナキヤ

ロ 支桿駐螺ノ緊定適度ナリヤ（緊定強キニ過クレハ搬軌ヲ引クトキ運動ノ圓滑ヲ害スルモノトス）

ハ 逆鉤發條ノ結合正シキヤ（其ノ長肢ヲ擊鐵ノ發條室ニ結合セルモノヲ可トス）

ニ 樞軸栓ノ結合確實ナリヤ（樞軸栓頭部及駐螺頭部ハ銃床ニ密著シ且動搖セサルヲ可トス）

ホ 排筒桿ハ彈巢ノ同室ニ正シク位置シアリヤ

ヘ 排筒桿支筍ハ十分緊定シアリヤ（緊定不十分ナルトキハ彈巢開閉ノ際支筍ト銃床ト甚シク觸突ス）

ト 擊鐵、支桿、押桿、搬軌、用心鐵、彈巢、銃把、側鈑、銃床、槓桿鈑、遊鈑及銃身ノ部品番號ハ一致シアリヤ

三 機能

イ　擊發機能過弱ナラサルヤ又擊發後擊鐵ハ舊位置ニ復スルヤ（過弱ナルハ擊鐵發條ノ衰損ニ起因ス）

ロ　搬軌ヲ引カサルトキ擊針銃床面ヨリ突出シアラサルヤ（突出セルハ支桿ノ中央段部ノ擊鐵接觸面ノ磨損ニ起因ス）

ハ　搬軌ヲ引キタルトキ彈巢ノ逆廻轉スルモノナキヤ（押桿右肩部磨滅又ハ押桿ノ支桿室傾斜面ノ磨損ニ起因ス）

ニ　搬軌ヲ引カサルトキ彈巢ノ逆回轉スルモノナキヤ（無抵抗ニテ逆轉スルモノハ排筒桿鋸歯部ト押桿頭部ト全然鈎合セサルモノニシテ又彈巢ノ某局部ノミ逆回轉スルハ押桿頭部カ其ノ鋸歯部ニノミ鈎合スルニ因ル）

ホ　搬軌ヲ引キタル儘鎖鉤ヲ開キ得ルモノナキヤ

ヘ　彈巢ノ旋回容易ナリヤ（旋回困難ナルハ彈巢軸及排筒桿支筩ノ磨損セル爲彈巢ト銃床ト摩擦シ若ハ彈巢軸ト彈巢トノ間ニ土砂燼滓等附著シタルニ起因ス）

ト　排筒機能ハ確實ナリヤ（遊鈑鈎部ノ磨損、排筒桿發條ノ折損セルトキ機能不良トナル）

四　損傷

イ　銃床ノ排筒桿支筩室上部ニ擦傷ナキヤ（支筩ノ螺著不十分若ハ支筩過長ナルトキ擦傷ヲ生ス）

ロ　擊針ニ擦傷ナキヤ且其ノ頭部ハ屈曲、變形、腐蝕シアラサルヤ

ハ　擊針孔ハ變形、開大、腐蝕セルモノナキヤ（主トシテ擊針ノ屈曲、弛動等ニ基ク偏擊及瓦斯漏等ニ對スル手入不十分ナルニ因ル）

第四篇　機關銃

第一章　三年式機關銃

第一節　手入

第二十二條　日常手入ニ於テハ通常床尾、復坐發條、活塞、遊底、槓桿、送彈輪坐、碍子、送彈機、規整子ヲ離脱シ左ノ如ク實施スヘシ

但シ送彈輪坐、碍子及送彈機ノ分解手入ハ二—三週間ニ一回ヲ適當トス

一　腔中ハ先銃身ヲ略〻水平トナシ保心筒ヲ装シタル洗矢ヲ尾筒ニ挿入シ保心筒ハ床尾駐栓ヲ以テ床尾ニ結合セシ後小銃腔中手入法ニ準シ手入スヘシ

二　瓦斯誘導螺ハ瓦斯孔蓋螺ヲ離脱シタル後銅線又ハ竹片等ニ布片ヲ纒繞シ瓦斯喞筒下面ヨリ拭淨スヘシ

三　三脚架ハ銃耳托架ヲ旋回シ照準齒弧、方向緊定鈑、昇降軸ノ齒部ニハ稍〻多量ニ塗油スヘシ又轉把ノ回轉容易ナラサルモノハ油孔發條ヲ開キ油孔螺ヲ脱シテ各注油孔ヨリ注油スヘシ

第二十三條　射擊後ノ手入ニ於テハ前條ニ準シ分解ノ後左ノ如ク實施スヘシ

一　腔中藥室ノ手入ニ方リテハ昇降軸ヲ扛起シ銃口部ヲ下降シテ洗滌用油中ニ浸シ前條第一項竝小銃射擊後ノ洗滌手入法ニ準シテ行フヘシ

二　銃身外部、緊定管、放熱筒ハ銃身ヲ離脱シ之ヲ拭淨スヘシ又瓦斯誘導螺ハ内外部ニ附著セル渣燼ヲ十分拭除スルヲ要ス

三　瓦斯唧筒ハ規整子ヲ脱シ瓦斯唧筒洗桿ヲ以テ洗滌用油ヲ浸シ拭淨スヘシ要スレハ瓦斯掻ヲ使用シ附著燼渣ヲ除去ス

四　規整子ハ分解シテ燼渣ヲ拭淨スヘシ

五　野外ニ於テ射擊後速ニ手入ヲナスヘキ時間ノ餘裕ナキトキ及腐蝕、磨滅ノ甚シキ腔中ニ對スル手入ノ要領ハ三八式小銃ニ準ス但シ前項時間ニ餘裕ナキ場合ニアリテモ爲シ得レハ閉鎖、活塞頭部、瓦斯唧筒内部ヲモ拭淨スルヲ可トス

第二十四條　普通分解セサル部分ノ手入ハ左ノ如ク實施スヘシ

一　銃身、引鐵、逆鉤駐子、同壓桿、規整子ハ分解シ舊油ヲ拭除ノ後塗油スヘシ

二　油槽ハ分解ヲ行ヒ洗滌用油ヲ以テ汚物ヲ除キタル後同油ヲ拭除スヘシ

三　三脚架ハ銃耳托架、同駐螺桿、昇降軸緊定桿、解脱子、齒弧轉輪、同駐爪、方向緊定鈑、方向緊定桿ヲ脱シ拭淨スヘシ

照準齒弧、轉把、起動螺、誘導齒輪ハ通常脱スルコトナク手入スヘシ

第二節　格納

第二十五條　銃ハ三脚架ヨリ脱シ（要スレハ銃身、緊定管、放熱筒ヲ分離シ各箇ニ格納ス）又ハ裝シタル儘格納ス而シテ銃ヲ離脱シタル三脚架ハ要スレハ折疊シ格納スルコトヲ得又附著革ノ保存及塗料ノ剝脱セサル如ク注意スヘシ豫備銃身ハ包布ヨリ脱シ銃身孔蓋及準梁覆ヲ除キ架上若ハ箱内ニ收容スヘシ

第三節　檢査

第二十六條　普通檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　手入

腔中藥室、瓦斯唧筒内部、瓦斯誘導螺及銃身同室、圓筒内部及擊莖、尾筒内部、油槽、照準機ノ拭淨及塗油ノ適否（銃身ヲ分解シタルトキハ特ニ銃身外部緊定管内外部、放熱筒内面ヲモ檢ス）

二　結合

イ　銃身ト尾筒トノ結合ハ正シキヤ（結合正シキトキハ銃口面墫鈑部ハ正シク左右ニアルモノトス）

ロ　緊定管ハ同壓螺ニヨリ適當ニ緊定シアリヤ

ハ　瓦斯誘導螺ノ結合確實ナリヤ誘導螺ノ端面銃身ノ同室底ニ接着スルハ不可ナリ坐鈑部ニ於テ階段部ニ密着スヘシ

ニ　逆鉤駐子、活塞駐子及碍子ハ活塞ニ鉤シ非サルヤ之等カ平素活塞ニ鉤シアレハ復坐發條衰損ス

三　機能

イ　圓筒、活塞ハ其ノ前進後退ニ際シ軋ルコトナキヤ

ロ　活塞駐子ノ機能良好ナリヤ

ハ　逆鉤、同駐子、碍子及引鐵ノ機能良好ナリヤ

ニ　照尺ノ機能良好ナリヤ遊標駐鉤ハ確實ニ表尺鈑ニ鉤スルヲ要ス

ホ　油槽ノ機能良好ナリヤ油槽駐子ハ確實ニ尾筒ニ鉤シ又油導子ノ機能ハ適良ナルヲ要ス

ヘ　送彈、排筒機能良好ナリヤ排筒機能ハ抽筒及蹴筒作用ニ就キテ檢スヘシ

ト　規整子ハ零分畫迄確實ニ螺入シ得ルヤ

チ　復坐發條ノ抗力十分ナリヤ

リ　蹴出窓蓋發條ノ機能十分ナリヤ

ヌ　方向緊定機能確實ナリヤ方向ヲ緊定スルモ銃ノ左右ニ動搖スルモノ或ハ昇降輪ヲ捻下シテ緊定ノ際把部後脚ニ觸接スルモノハ適宜緊定補助鈑ヲ使用スヘシ

ル　上下照準緊定機能確實ナリヤ又容易ニ轉把ノ戻回スルモノナキヤ

ヲ　解脫子駐筍ノ機能良好ナリヤ

ワ　三脚架ノ折疊機能良好ナリヤ就中脚ノ樞鈑部磨滅ノ爲弛緩シ著シク脚ノ動搖ヲ來セルモノナキヤニ注意スヘシ

カ　保彈鈑爪部ノ機能良好ナリヤ不良ナルハ實包保持不確實ニシテ射撃ノ際實包浮動シ又保彈鈑右側前端部ノ下方屈折ノ度不十分ナルトキハ裝塡ヲ不良ニス

四　損傷

イ　銃身後端面ニ圓筒若ハ抽筒子頭ノ接觸ニヨル打痕反起ナキヤ圓筒ノ前進ハ尾筒ニヨリ阻止セラレ直接銃身ニ觸突スヘキモノニアラス然レトモ多數發射ノ後ニ於テハ圓筒駐子部ノ磨滅ニヨリ圓筒ハ漸次前進シ遂ニ銃身ニ衝突スルニ至ル

ロ　擊茎尖頭及圓筒擊茎尖頭室變形腐蝕シ非サルヤ擊茎尖頭ノ變形大ナルモノハ雷管突破ヲ來シ尚圓筒擊茎尖頭室ヲ擴大シ又雷管ノ破損ニ起因シ同室ノ變形スルコトアリ又腐蝕ハ擊茎折損ノ大原因タナス

ハ　圓筒抽筒子室開大シ非サルヤ

ニ　抽筒子爪部、同發條ハ損傷若ハ衰損シ非サルヤ

ホ　閂子及同受ハ破損又ハ磨損シ非サルヤ

ヘ　舌形鈑端面ハ變形若ハ傷損シ非サルヤ

ト　活塞準梁增肉部上面ニ突傷又ハ肉部減磨セルモノナキヤ、活塞上面斜堤、活塞頭部ハ著キ損傷ナキヤ又活塞隆鼻部附近ニ龜裂ナキヤ

チ　逆鉤駐子壓桿前端斜面、逆鉤、同駐子ハ甚シク磨損ナキヤ

リ　復坐發條軸ノ動搖スルモノナキヤ

第二十七條　射撃前後ニ於テハ腔中其ノ他各部ヲ檢スルノ外特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　射撃開始前規整子分畫ノ適否ヲ檢スヘシ

二　始メテ射撃ヲ行フ銃及銃身、圓筒、活塞ヲ交換セシトキハ若干ノ單發及連發射撃ヲ行ヒ適當ナル瓦斯誘導螺竝規整子分畫ヲ定ムヘシ活塞ノ後退ハ單發射撃ヲ行ヒ得ルヲ度トス若シ活塞後端床尾ニ衝突シ手ニ著シク振動ヲ感スルカ或ハ打殻藥莢ノ遠ク蹴出セラルルモノハ活塞ノ後退活潑ニ失スルノ徴トス（活塞後退活潑ニ失スルトキハ抽筒子ヲ損シ若ハ實包保彈鈑ヨリ浮動シ突込ミノ原因ヲ爲ス之ニ反シ後退不十分ナルトキハ保彈鈑ノ移動十分ナラス爲ニ裝塡ヲ害シ又ハ一保彈鈑ヲ射盡シタルトキ活塞碍子ニ鈎セサルコトアリ）

三　擊莖ヲ交換セシトキハ單發射撃ヲ行ヒ其ノ長短適否ヲ檢スヘシ（擊莖過長ナルトキハ發射後雷管ノ圓陷セル底部ニ小孔ヲ穿チ或ハ擊莖頭ニテ活塞ノ前進ヲ支ヘ爲ニ折損スルコトアリ又過短ナルトキハ不發スルカ、雷管中心ニ擊莖孔大ノ圓孔ヲ穿ツカ、雷管擊針底破損スルコトアリ）

四　射撃中主トシテ檢スヘキ事項左ノ如シ

イ　單發機能ノ良否（機能不良ナルハ主トシテ活塞後退不足ニ因ルモ稀ニ逆鈎及同駐子ノ甚シク磨損セルカ同駐子發條ノ衰損ニ起因スルコトアリ）

ロ　抽筒及排筒作用ノ良否

ハ　油槽内ノ油ノ有無

ニ　屢々擊殻藥莢ニ就キ雷管衝痕ノ状況及塗油ノ良否ヲ檢ス

ホ　雷管連續不發スルトキハ擊莖折損ノ有無、銃身後端圓筒部室異物ノ有無、次テ圓筒擊莖室或ハ活塞、圓筒、門子間ニ異物ノ有無ヲ檢ス

五　命中試驗前ニ於ケル注意ニ關シテハ小銃ニ準ス

第四節　取扱上ノ注意

第二十八條　射撃間機關部運轉ノ狀態ニ注意シ異狀ノ徴アルトキハ機敏ニ適切ノ處置ヲ執ルハ特ニ必要ニシテ圓滑ナル機關銃射撃ノ重要條件ナリ

第二十九條　規整子ハ新銃ニアリテハ通常十分畫ヲ適度トス然レトモ著シキ顫動又ハ手ニ激突ヲ感スル場合ハ規整子ヲ螺出シ瓦斯唧筒ノ內容積ヲ增シ又單發不能或ハ活塞後退不十分ニシテ其ノ原因瓦斯壓不足ト認ムルトキハ規整子ヲ螺入スヘシ

機關部ノ運動漸次圓滑トナリ若ハ瓦斯漏孔增大スルニ從ヒ銃ノ顫動、激突等ハ愈、加ハルヘキヲ以テ規整子ノミノ修正ハ通常困難ナルニ至ル此ノ場合ニ於テハ適宜漏孔面積ノ小ナル瓦斯誘導螺ト変換使用シ以テ機關ノ運動ヲ調節スルヲ緊要トス而シテ常ニ規整子分畫ハ爾後ノ小修正ニ應シ得ル爲十分ノ豫備ヲ存スル如ク瓦斯壓ヲ調整スルコトニ注意スヘシ

第三十條　引鐵ノ壓迫ヲ緩ムルモ尙連續發射スルトキハ槓桿ヲ後方ニ支持シテ活塞ノ運動ヲ阻止シ然ル後處置スヘシ

第三十一條　緊塞折損シ其ノ破片ノ除去困難ナルトキハ擊莖拔ヲ使用スヘシ

第三十二條　極寒時ニ於テ射擊スル場合ハ機關部ノ油凍結シ機能ヲ害シ又ハ破損スルコトアルヲ以テ適宜塗油ノ量ヲ減少スルカ又ハ輕ク塗油ヲ拭除スルカ或ハ「アイスマシーン」油ト石油トノ混合油等ヲ使用スヘシ若シ射擊ニ方リ活塞ノ前進緩漫ニシテ擊發不能ノ場合ニハ先ツ槓桿ヲ以テ急速ニ數十回活塞ヲ進退セシムヘシ(此ノ操作ハ射擊前實施シ活塞ノ前進十分ナルコトヲ確メ置クヲ要ス)尙要スレハ若干單發射擊ヲナスヲ可トス

第三十三條　射擊間實包ノ爲故障ヲ生セシトキハ活塞ヲ中途マテ引キ(圓筒頭部ヲ瓦斯出孔後端ト齊等迄)處理スヘシ(活塞全部ヲ後退スルトキハ實包カ尾筒內ニ落込ムコトアリ)

第三十四條　抽筒セスシテ擊殼藥莢藥室內ニ殘留セシトキハ洗桿ヲ以テ排出スヘシ又藥莢橫截シ一部藥室內ニ殘留セシトキハ藥莢拔ヲ遊底ニ裝シ抽出スヘシ

第三十五條　「伏セ」ノ姿勢ニテ保彈鈑ヲ裝塡スル場合ニハ往々保彈鈑ヲ斜ニ强ク挿入スル爲先端ノ實包變位シ又ハ保彈鈑爪部ヲ屈曲セシメ第一發ニ於テ故障ヲ生スルコトアリ

第三十六條　既ニ裝塡セシ保彈鈑ノ抽出ヲ要スルトキハ槓桿ヲ十分後方ニ引キ碍子ノ下枝ヲ强ク外方ニ引キ碍子頭及送彈子ト保彈鈑トノ吻鉤ヲ解キタル後保彈鈑ヲ左方ニ抽出スヘシ

第三十七條　一度使用シタル保彈鈑ヲ再用スルニハ保彈鈑修正器ヲ以テ之ヲ修正シタル後ニ於テスヘシ(但シ爪部缺損セル爲實包ヲ保持スル能ハサルトキハ其ノ部ノ實包ヲ缺キ使用スルヲ得此ノ際相當位置ニテ空擊ヲナスヲ以テ直ニ槓桿ニテ活塞ヲ後退スヘシ)

第三十八條　解脫子ノ握把ヲ後方ニ倒シタル場合ニハ齒弧轉輪ヲ旋回スヘカラス是レ銃耳托架ノ鋸齒部竝齒弧轉輪駐爪ヲ損傷スルヲ以テナリ

第三十九條　前脚及後脚ノ樞軸部過度ニ動搖ヲ來ストキハ命中精度ヲ害スルニ至ルヲ以テ取扱上特ニ注意ヲ要ス

第二章　三八式機關銃

第一節　手入

第四十條　手入ハ特ニ左ノ件ニ注意スルノ外三年式機關銃ノ手入法ニ準シ實施スヘシ

第四十一條　日常手入ニ於テハ通常裝塡架、床尾、復坐發條、用心鐵、活塞、遊底、槓桿、規整子、蹴子、表尺ヲ離脫シ左ノ件ニ注意スヘシ

一　尾筒內部、瓦斯喞筒內部、裝塡架(各部品ヲ分解ス)復坐發條、用心鐵、安全栓、(引鐵及發條ヲ離脫ス)遊底(各部品ヲ分解ス)活塞、槓桿(發條ヲ離脫ス)規整子(各部品ヲ分解ス)蹴子、表尺ハ舊油ヲ拭淨シタル後塗油ス

二　銃ハ三脚架ヨリ離脫シ齒弧駐栓及齒弧駐梁ノ手入ヲ行フ

第四十二條　射擊後ノ手入ニ於テハ特ニ左ノ如ク實施スヘシ

一　瓦斯孔ハ瓦斯唧筒ヲ離脫シタル後銅線或ハ竹片ニ布片ヲ卷キ洗滌用油ヲ浸シ支鋸下面ヨリ之ヲ拭淨スヘシ

二　銃身後端ハ前項ト同シ方法ニヨリ尾筒裝塡架室ヨリ拭淨スヘシ

三　尾筒內部ニ附著セル燼滓ハ瓦斯唧筒洗桿ニ洗滌用油ヲ浸シ拭淨スヘシ又瓦斯唧筒ハ支鋸ヨリ離脫シ更ニ規整子ヲ脫シ三年式ニ準シ手入スヘシ

第二節　格納

第四十三條　格納法一般ノ要領ハ三年式機關銃ニ準據スヘシ

第三節　檢査

第四十四條　檢査ハ左ノ件ニ注意スルノ外三年式機關銃ノ檢査法ニ準シ實施スヘシ

普通檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　分解結合

イ　引鐵及碍子ハ活塞ニ鉤シ非サルヤ又引鐵ハ連發桿ニ鉤シ非サルヤ

ロ　瓦斯唧筒鍔部ノ刻線ト支鋸ノ刻線ト一致シアルヤ（一致セサルトキハ銃身及支鋸ノ瓦斯孔ト瓦斯唧筒ノ瓦斯孔ト一致セサルモノトス）

ハ　齒弧轉輪駐爪ノ結合正シキヤ（照準齒弧ヲ緊定シタルトキ齒弧轉輪ノ後方ニ旋回スルモノハ通常同駐爪ノ結合不良ヨリ來ル）

ニ　連發桿發條ト引鐵發條ト相互誤リ結合セルモノナキヤ（前者ハ其ノ力著シク弱キヲ以テ後者ニ使用スルトキハ單發ヲ不能ナラシム）

二　損傷

イ　門子及門子受ハ破損若ハ甚シク磨損シ非サルヤ（新ナル擬製彈ヲ藥室ニ挿入シ活塞ヲ除キ遊底ヲ閉鎖スルトキ門子後面ト門子受面間ニ多大ノ遊隙ヲ存シ少シモ門子ヲ緊スルコトナクシテ深ク門子受面ヨリ沈降スルモノ及左右甚シク觸接不等ナルモノハ不良ナリトス）

ロ　引鐵、逆鉤、碍子筍、碍子ハ甚シク磨損シ非サルヤ（引鐵、逆鉤ノ磨損大ナルモノハ往々單發機能ヲ害シ碍子、同筍ノ磨損大ナルハ一保彈鈑ノ實包ヲ射盡シタル際活塞前進スルモノトス）

ハ　活塞三角準梁後端及長準梁前端甚シク損傷シ非サルヤ（損傷セルモノハ裝彈齒輪及齒止ノ齒部磨損或ハ發條ノ衰損セル爲裝彈齒輪嚙合齒ノ該部ニ衝突セルニヨル）

ニ　排筒器ハ動搖セサルヤ

ホ　裝塡架ハ甚シク動搖スルコトナキヤ

第四節　取扱上ノ注意

第四十五條　取扱上ニ關シテハ左ノ件ニ注意スルノ外三年式機關銃ニ準據スヘシ

第四十六條　規整子ハ新銃製作當初ニアリテハ十四乃至二十分畫ヲ適度トスルモ使用セル銃ニアリテハ

各銃ニ就キ適當ナル分畫（確實ニ單發ヲ行ヒ得ル分畫トス）ヲ豫知スルトキハ射擊前之ヲ規整スヘシ若シ豫知セサルトキハ最近ニ於ケル適度ノ分畫ト同一ニ規整スルヲ要ス

第四十七條　遊底閉鎖ノ位置ニ於テ安全裝置ヲ施シ活塞ヲ後退セシムルトキハ逆鉤及引鐵ヲ損傷スルヲ以テ把子ハ水平ニ位置セシムヘシ

第四十八條　送彈機能ノ不十分及稀ニ舌形鈑屈曲、裝塡架駐筍ノ變形等アルトキハ藥室後端面ニ彈頭衝突シ若ハ遊底實包ノ上部ニ阻止セラルルコトアリ此ノ場合ニハ藥莢抽出鉤ヲ以テ裝塡シ得サル實包ヲ抽出スヘシ

第四十九條　連發桿及槓桿ノ使用ニ就キテハ左ノ件ニ注意スヘシ

イ　保彈鈑ヲ裝入スル際引鐵連發桿ニ鉤スルトキハ直ニ連續射擊スルコトニ注意スヘシ

ロ　槓桿使用後ハ定位置ニ復シ置クヘシ

ハ　射擊中不發等ヲ生シタルトキハ引鐵連發桿ニ鉤シアラサルヤニ注意シ（鉤シアルトキハ之ヲ脫シ）活塞ヲ後退シテ引鐵ニ鉤セシメ引鐵ヲ引キテ活塞ヲ前進セシム

第五十條　碍子、同發條、安全栓、引鐵、同發條、逆鉤、槓桿發條、連發桿、同發條、同駐栓ノ內一部若ハ全部缺損スルモ尙安全ニ連續射擊ヲ行フコトヲ得又瓦斯喞筒駐螺、規整子支爪ハ缺損スルモ一時射擊ヲ續行スルコトヲ得

第二章　十一年式輕機關銃

第一節　手入

第五十一條　手入ハ左記各條ニ依リ實施スルノ外概ネ三年式機關銃及小銃ノ手入法ヲ準用スヘシ

第五十二條　普通手入ニ於テハ通常裝塡架、油槽、尾筒底、復坐發條、活塞、遊底、槓桿及規整子ヲ離脫シ左ノ如ク實施スヘシ

一　腔中ノ手入ハ通常銃口蓋ノ蓋ヲ開キ銃口ヨリ之ヲ行フヘシ
　藥室ハ尾筒ヨリ藥室掃除棒ヲ以テ拭淨ノ後適度ニ塗油スヘシ

二　其ノ他ノ部品ハ內外部ノ舊油ヲ拭淨シ適度ニ塗油シ置クヘシ

右ノ外放熱筒及銃身ハ二若ハ三週間每ニ少クモ一回分解シテ手入ヲ行フヲ可トス雨雪天ノ際ニ使用シタルトキハ特ニ然リトス

第五十三條　射擊後ハ前條ノ部品ノ外更ニ放熱筒及銃身ヲ分解シ左ノ如ク實施スヘシ

一　腔中藥室ハ銃尾部ヲ油ニ浸シ洗滌手入ヲ行フヘシ

二　銃身後端、瓦斯漏孔竝緊塞鐶附近、放熱筒內部、瓦斯喞筒內面（殊ニ螺子部ニ注意スヘシ）規整子（殊ニ瓦斯孔ニ注意スヘシ）活塞、圓筒包底面、擊莖室、抽筒子室及尾筒內面ハ燼渣ノ附著特ニ著シキヲ以テ必要ニ應シ洗滌用

油ヲ使用シ又其ノ部位ニ應シ瓦斯搔、手入桿、圓筒洗管ヲ以テ手入スヘシ

第二節　格納

第五十四條　銃ハ結合ノ儘脚ヲ閉チ托架上 脂油ヲ吸收セサル裝置ヲ施シ ニ格納スヘシ但シ一時格納ノモノニ在リテハ脚ヲ開キ床又ハ棚上ニ整置スルコトヲ得又豫備品ハ屬品差ヨリ離脱シ發錆ノ虞アルモノハ一般部品ノ格納要領ニ準シ格納スヘシ 特ニ復坐發條ハ屈曲セサルコトニ注意ヲ要ス

第三節　檢査

第五十五條　普通檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　手入

腔中、藥室、瓦斯喞筒内部、活塞頭部、圓筒内部 以上ノ部分ニ對シテハ特ニ發錆及煤滓附着ノ有無ヲ檢ス 撃莖、尾筒内部、油槽、裝塡架内部、照準機ノ拭淨及塗油ノ適否

二　結合

イ　放熱筒ト尾筒トノ結合ハ正シキヤ又動搖スルコトナキヤ 結合正シキトキハ尾筒及放熱筒下面ノ刻線ハ相一致シ且瓦斯喞筒駐栓ハ確實ニ尾筒ニ挿入シアルモノトス

ロ　規整子ノ結合正シキヤ 規整子ノ後線ハ瓦斯喞筒下面ニアル二平行線間ニアリテ所要分畫カ刻線ト一致シ駐子ハ正シク瓦斯喞筒前端刻鈝部ニ鉤シアルヲ要ス

ハ　裝塡架駐子ハ尾筒ニ正シク鉤シアリヤ

ニ　彈送止ハ十分下方ニ壓下シアリヤ 壓下不十分ナルトキハ彈送盤及彈送ヲ落失スルコトアリ

ホ　挿彈子止ハ確實ニ裝著シアリヤ

ヘ　安全栓ハ發射ノ位置ニ裝シアリヤ又尾筒底駐栓ハ確實ニ挿入シアリヤ 活荷ノ機能ニ注意スヘシ

ト　活塞ハ逆鉤ニ鉤シアラサルヤ 平素逆鉤ニ鉤シアラハ復坐發條衰損ス

三　機能

イ　圓筒、活塞ハ其ノ前進、後退ニ際シ軋ルコトナキヤ 但シ發動セスシテ槓桿ヲ靜カニ引クトキハ環桿發條カ其ノ駐鉤部ヨリ脱スルトキ、圓筒カ轍子頭ヲ越ユルトキ及活塞逆鉤々部カ逆鉤ヲ超ユルトキ指頭ニ力ヲ感スルモノトス又用心鐵駐栓ノ弛ミタルトキ若ハ其ノ結合ヲ誤リタルトキハ槓桿ノ運動ヲ阻碍ス

ロ　逆鉤、引鐵及安全栓ノ機能良好ナリヤ

ハ　照尺ノ機能良好ナリヤ

ニ　油槽ノ機能良好ナリヤ 油槽ハ確實ニ油槽止ニ鉤シ油螺子ノ運動支障ナク油ノ流出適當ナルヲ要ス

ホ　送彈並排筒機能良好ナリヤ 擬製彈ヲ用ヰ點檢スルヲ可トス

ヘ　脚頭鐶駐栓發條ノ機能良好ナリヤ

ト　彈送止、挿彈子止ハ機能良好ナリヤ 挿彈子止爪部ハ彈倉内ニ約二・〇粍突出シ擬製彈（已ムヲ得サレハ實包）五發ヲ裝塡シ彈頭ヲ彈倉前壁ニ接シタルトキ挿彈子ニ對シ約〇・五粍

鈎シアルヲ適當トス而シテ裝塡シタル彈藥ヲ十分後方ニ致シ挿彈子爪部ニ載セ靜カニ壓桿ヲ倒ストキ支障ナク之ヲ彈倉底ニ壓下シ得ルヲ要ス壓下シ得サルハ爪部過長ナルカ或ハ爪ノ上方水平部彈倉內ニ突出シアルニ起因ス

チ　壓桿發條ハ著シク衰損シアラサルヤ又壓鈑ハ最下實包ノ挿彈子ヲ確實ニ壓下シ得ルヤ

四　損傷

イ　銃身後端面ニ圓筒若ハ抽筒子等ノ衝突セル痕跡ナキヤ

ロ　擊莖尖頭及圓筒擊莖頭部室ノ變形若ハ腐蝕セルモノナキヤ

ハ　圓筒抽筒子室ノ開大セルモノナキヤ又蹴子通路ニ反起ナキヤ

ニ　抽筒子爪部及抽筒子發條ハ損傷若ハ衰損シアラサルヤ

ホ　銃身止ノ著シク變形又ハ磨損セルモノナキヤ

ヘ　尾筒後端耳部ノ龜裂セルモノナキヤ

ト　尾筒底ニ活塞ノ著シク衝突セル痕跡ナキヤ（主トシテ瓦斯壓ノ過大又ハ復坐發條ノ衰損ニ因リ活塞ノ後退過激ナルニ起因ス）

チ　閂子及同受ニ破損、反起ヲ生シ又ハ著シク磨損セルモノナキヤ

リ　裝塡架駐子若ハ尾筒ノ駐子鈎部磨滅シ裝塡架ノ動搖スルモノナキヤ

ヌ　尾筒彈丸通路附鈑ノ變形セルモノナキヤ（送彈不良ノ際彈丸除去ニ當リ緻打變形セシムルコトアリ缺損傷ハ彈丸ノ滑走ヲ害シ送彈不良ヲ生ス）

ル　彈送爪部ニ變形損傷ナキヤ（爪部ノ缺損ハ送彈機能ニ影響ス）又上部彈送楕圓形凸筍ニ損傷ナキヤ

ヲ　彈送止ノ發條衰損シアラサルヤ

ワ　活塞平盤部ノ斜溝、同平盤部左側後端及彈送坐下面ノ菱形突筍ニ反起又ハ損傷ナキヤ

カ　活塞頭部及同逆鈎々部ニ著シキ磨損、反起ナキヤ

ヨ　瓦斯喞筒前端刳缺部（規整子駐子ノ吻入スル部分）ニ變歪又ハ損傷ナキヤ

タ　放熱筒ト瓦斯喞筒トノ結合部緩解シアラサルヤ

レ　復坐發條軸ノ變歪、動搖スルモノナキヤ

ソ　脚桿ハ變歪セサルヤ又銃把部ニ裂傷ナキヤ

第五十六條　射擊前後竝射擊中ニ於テハ概ネ三年式機關銃ノ檢査法ニ準スル外特ニ左ノ諸件ニ注意スヘシ

一　射擊前ニハ特ニ規整子、裝塡架駐子及彈送止結合ノ良否竝油槽內油ノ充否

二　單發機能ノ良否（特ニ機能點檢ノ爲之ヲ要スル場合）（機能不良ナルハ主トシテ瓦斯壓過小若ハ活塞運動ノ圓滑ナラサルニ基ク活塞ノ後退不足ニ因ルモ稀ニ逆鈎及活塞逆鈎々部ノ著シク磨損セルカ又ハ逆鈎發條ノ挫損、引鐵部ノ軋リ等ニ因ルコトアリ）

三　連發機能ノ良否

イ　爆音ノ調子ニ留意スルコト緊要ナリ而シテ速度頗ル早ク（三秒以內ニテ三十發ヲ發射スルモノハ調子過早ナリトス）藥莢過激ニ蹴出セラルルカ或ハ速度緩漫ナルカ又ハ中途ニ於テ緩トナリ若ハ調子不良ニシテ藥莢ノ蹴出不整ニ陷ルコトナキヤ（此等ハ主トシテ活塞後退ノ過激ナルカ或ハ活塞ノ後退不足スルニ起因スルモノニシテ更ニ其ノ原因ヲ探究シ機敏ニ適切ノ處置ヲ講スルハ本銃射擊ノ重要事項ナリ）

ロ　抽筒不良ナラサルヤ（油槽ニ依ル實包塗油ノ不足、抽筒子ノ損傷及機能不良、藥室内汚物介在等ニ起因ス）

ハ　蹴筒不良ナラサルヤ（活塞後退不足スルカ又ハ蹴子嘴及之ニ關聯スル圓筒部ノ變形ニ因ル）

ニ　不發ナキヤ（撃莖折損又ハ過短ナルカ復坐發條衰損セルカ或ハ多數彈發射ノ爲活塞、圓筒頭部、圓筒撃莖室、銃身圓筒頭部室ニ蝋、燼渣等ノ蓄積スルニ起因ス尙雷管發火スルモ裝藥ニ點火セサル爲不發ヲ生スルコトアリ）

ホ　突込ヲ生セサルヤ（主トシテ抽筒不良ノトキ併起ス）

ヘ　送彈不良ナラサルヤ（槓桿ノ引キ方不十分ナルトキ、活塞後退不足ノトキ、挿彈子止ノ機能不良ノトキ、挿彈子内實包ノ占位不良ノトキ又ハ彈送爪部ニ變形、損傷アルトキ等ニ生起ス）

ト　挿彈子ノ落下不良ナラサルヤ（挿彈子ノ變位ニ因ル）

四　時々蹴出セシ打殻藥莢ニ就キ撃莖衝痕ノ狀況、藥莢外面ニ於ケル塗油ノ適否、蹴子痕ノ狀況等ニ注意スヘシ

第四節　取扱上ノ注意

第五十七條　取扱上ニ就テハ十一年式輕機關銃假取扱法取扱上ノ注意ニ依ルノ外尙左ノ各條ニ依ルヘシ

第五十八條　本銃ハ機構精細ナルヲ以テ施油缺乏スルトキハ機能ヲ害シ易シ故ニ給油ヲ適度ナラシムルコト特ニ必要ナリ又酷暑時ニ在リテハ油ノ選擇及補充竝頻次ノ塗施ニ注意スルコト肝要ナリ（射撃ニ際シテハ銃身及放熱筒表面ヨリ發散スル煙霧ノ爲照準ヲ害シ易キヲ以テ該表面ノ塗油ハ過度ナラサルヲ要ス）

極寒地ニ於ケル注意ハ概ネ三年式機關銃ニ準ス

第五十九條　裝塡架内部ニ土砂、塵埃等附著スルトキハ送彈機能ヲ害スルコトアルヲ以テ特ニ注意ヲ要ス又擬製彈及挿彈子ノ舊式品若ハ變形セルモノヲ使用スヘカラス

第六十條　脚桿ヲ彎曲セシメサルコト及尾筒銃身止、瓦斯喞筒先端ヲ破損若ハ變形セシメサルコトニ就テハ取扱上特ニ注意スルヲ要ス

第五編　喇叭

第一章　手入

第六十一條　普通手入ニ於テハ口、伸縮管、開閉螺ヲ離脱シ内外部ヲ清潔ナル布片（鐵部ニハ僅ニ含油セル布片ヲ用ユ）ヲ以テ拭淨スヘシ

使用後ニ於テハ口ヲ離脱シテ唾液ヲ十分除去シ黄銅部ニ汗等附著シ甚シク汚レタルトキハ含水布片ヲ以テ拭淨ノ後乾布ニテ拭フヘシ

第六十二條　黄銅部ニ發銹若ハ甚シク汚點ヲ生シタルトキハ眞鍮磨ノ類ヲ用ヒ徐々ニ拭除スルコトヲ得

又内部ニ甚シク汚垢附著セシトキハ口及伸縮管ヲ脱シ水或ハ温湯ヲ通シ十分洗滌シタル後水氣ヲ除去スヘシ

第二章　格納

第六十三條　格納ニ方リテハ飾紐及提巻ヲ離脱シ口及開閉螺ハ緩メ棚上又ハ箱内ニ收容シ成ル可ク塵埃ノ附著ヲ豫防スヘシ特ニ自在鐶、開閉螺等ノ鐵部ニハ格納用礦油ヲ塗布シ置クヲ要ス

附屬毛製品ハ「ナフタリン」ト共ニ密閉格納スヘシ一時格納ノ場合ニ於テモ成ルヘク毛製品ハ分離格納

スルヲ可トス

第三章　檢査

第六十四條　檢査ニ方リテハ特ニ開閉螺機能ノ良否、口及伸縮管離脫裝著ノ難易、黃銅部凹痕竝接合部空氣漏洩ノ有無等ヲ檢査スヘシ

第四章　取扱上ノ注意

第六十五條　手入不良ナルトキハ各部ノ機能ヲ害シ又微細ナル變形損傷ト雖直ニ音色ヲ害スルコト大ナルヲ以テ取扱上ニハ特ニ注意ヲ要ス

第六十六條　開閉螺ノ緊定ハ伸縮管ヲ保持スルヲ以テ度トスヘシ緊定強キニ失スルトキハ螺絲ヲ傷損スルモノトス

第六篇　步兵砲

第一章　十一年式平射步兵砲

第一節　手入

第六十七條　常用品ノ普通手入ハ概ネ左ノ如ク實施スヘシ

一　砲身體

イ　砲腔ノ手入ハ通常先ツ閉鎖機ヲ離脫シ洗桿ヲ用キ其ノ頭部ヲ藥室緣端等ニ擊突セシメサルコト及砲口ヲ偏磨セシメサルコトニ注意シテ之ヲ行フヘシ又過度ノ磨拭ニ依リ腔面ヲ磨損セシムヘカラス

ロ　腔面ノ狀態ニ應シ乾布若ハ石油、常用礦油ヲ浸シタル布片ヲ洗桿頭ニ纏ヒ砲口ヨリ藥室ニ至ルマテ等齊ニ拭淨シ後僅ニ塗油スヘシ若石油ヲ使用セシトキハ其ノ油氣ヲ十分ニ除去シタル後塗油スルヲ要ス（手入後日ナラスシテ腔面ニ發銹スルカ如キハ石油ノ除去不十分ナルニ因ルコト多シ）

ハ　藥室前端、藥室接續斜面及腔綫ノ起部ハ銹鏽及汚垢ノ除去困難ナルヲ以テ注意シテ手入スヘシ（殊ニ燒蝕ヲ生シアルモノニ於テ然リトス而シテ燒蝕ノ部分ハ稍多量ニ塗油スヘシ）

ニ　閉鎖機室、裝塡孔等ノ隅角部及凹部ハ布片ヲ被ラセタル木若ハ竹片ノ類ヲ以テ隈ナク拭淨スヘシ

ホ　防塵鈑注油壺ニハ十分ニ常用礦油ヲ注入スヘシ（注油ニ方リテハ砲身ニ十分射角ヲ附與シテ行フヲ可トス）

ヘ　砲腔面ニ附著セル銅ハ强テ之ヲ除去スルヲ要セス

二　閉鎖機及開閉機

イ　通常分解シテ各部ヲ拭淨スヘシ之カ爲第一類ニ準據シ塵埃ヲ避ケ毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テ行フヲ要ス

ロ　各部ノ拭淨ニ方リテハ塵埃ヲ十分ニ除去シ（殊ニ隅角部刳缺部等ニ注意ヲ要ス）發銹ヲ豫防スヘシ

ハ　槓桿、同軸ノ摩擦部及槓桿軸臂、鎖栓ノ刳缺部、抽筒子樞軸部等ニハ十分ニ塗油スヘシ

ニ　擊莖室ハ布片ヲ被ラセタル木若ハ竹片ヲ以テ隈ナク拭淨シ十分ニ塗油スヘシ

三　搖架

イ　砲耳托架ヨリ脫シ叮嚀ニ砲耳ヲ拭淨スヘシ

ロ　準鈑、同發條及表尺托架ハ分解スルコトナク拭淨スヘシ

又表尺托架準溝及後坐尺導溝ハ布片ヲ被ラセタル木若ハ竹片ヲ以テ拭淨スヘシ

ハ　搖架上鈑ノ準梁部ハ砲身ヲ結合セル儘手入ヲ行フ場合ニ在リテハ砲身ヲ略水平ニシ接續螺

軸ヲ離脫シ砲身ヲ後退セシメテ拭淨シ十分ニ塗油スヘシ

四　駐退機

イ　活塞桿ノ緊塞革及革環ニ接觸スル部分ハ毎月一回活塞桿ヲ若干抽キ出シテ拭淨シ要スレハ揮發油又ハ「テレビン」油ヲ以テ清拭スヘシ但シ强摩シテ該部ヲ磨滅セシメサルヲ要ス又腐蝕痕アルモノハ薄ク格納用礦油ヲ塗布シ置クヘシ

ロ　駐退機ヲ分解セシトキハ活塞桿ハ特ニ壓定鐶、緊塞革及革環ニ接觸スル部分ヲ綿密ニ拭淨シ又壓塞螺、壓定鐶、緊塞革、壓塞鐶、革環及活塞ニ膠著セル汚垢ハ之ヲ除去スヘシ

ハ　駐退管內部ハ清水ヲ注入シテ洗滌シ又ハ含濕若ハ含油布片ヲ被ラセタル桿ヲ以テ拭淨シ後坐漏孔等ニ附著セル金屬屑粉又ハ塵埃ヲ除去スヘシ（此ノ際特ニ砂塵ヲ侵入セシメサルコトニ注意シ又布片等ヲ殘留セシムヘカラス）

ニ　駐退液ヲ注入スル直前ニハ必ス管內ヲ清拭スヘシ又分解ノ儘放置スルトキハ內部ニ塵埃侵入シ且發銹シ易キヲ以テ布片等ヲ用キ管口ヲ閉塞シ（直ニ結合セサルトキハ常用礦油又ハ「ワセリン」等ヲ塗布シ）一時防銹ノ處置ヲ講シ置クヘシ

ホ　駐退管ノ外部及復坐發條ハ要スレハ舊油ヲ拭淨シ格納用礦油ヲ塗布スヘシ又接續螺ハ拭淨ノ上格納用礦油ヲ塗布シ尙彈𥜿ニ附著セル油分及汚垢等ハ拭除スルヲ要ス

ヘ　駐退液ハ濾過シテ金屬屑粉又ハ汚垢等ヲ去リ其ノ上澄液ヲ使用スヘシ（液ヲ完全ニ濾過スルニハ深キ容器ニ容レ約一晝夜之ヲ

靜置シ浮游物ヲ沈降セシメ其ノ上澄液ヲ採リ數重ノ木綿布等ニテ濾過スヘシ會液ノ容器ハ清淨ニシテ液ヲ不純ナラシムルカ如キコトナキヲ要ス又「グリセリン」ニ配合スヘキ水ハ酸若ハ「アンモニア」ノ微量ヲモ含有スヘカラス

五　三脚架

イ　砲耳托架ハ砲耳室、砲耳蓋鈑要スレハ支桿、發條等ヲ分解シ手入スヘシ及圓筒部ヲ叮嚀ニ拭淨塗油スヘシ

ロ　架頭ハ提棍挿入部、駐栓孔等ニ布片ヲ通シテ拭淨塗油スヘシ又開脚軸ハ後脚ヲ開閉シツツ塗油スルヲ要ス

ハ　小架ノ樞軸孔部及叉形部内部、前、後脚ノ各樞軸孔部ハ舊油及汚垢ヲ拭淨シ十分塗油スヘシ

ニ　方向照準螺ハ方向照準轉輪ヲ旋回シツツ螺絲部ヲ拭淨塗油スヘシ要スレハ分解ノ上手入スヘシ又方向照準牝螺ノ小架後端叉形部トノ吻合部ハ叮嚀ニ拭淨シ「パラワセリン」ヲ塗布スヘシ

ホ　高低照準螺托鈑上面ハ叮嚀ニ拭淨塗油シ球頭部ニハ注油スヘシ高低照準螺ハ轉輪ヲ旋回シツツ螺絲部ヲ拭淨シ要スレハ分解ノ上手入スヘシ

六　表尺、眼鏡及補助桿

イ　手入ハ塵埃ヲ避ケ成ルヘク毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テ行フヘシ

ロ　表尺ハ横尺室、分畫鈑及眼鏡室鈑ヲ十分拭淨シ僅ニ塗油スヘシ特ニ表尺托架ニ挿入スヘキ準鈑、眼鏡室、燕尾溝等ハ手入ノ爲過度ニ磨滅セシメサルコトニ注意スヘシ

ハ　眼鏡ノ手入ハ第七類ニ依ル

ニ　表尺補助桿ノ眼鏡ヲ裝スヘキ燕尾溝及底部ノ燕尾形準梁ノ手入モ亦（ロ）ニ準ス

七　提燈ハ熔蠟及煤煙ヲ除去シ軟布ヲ以テ反射鏡ヲ拭淨シ要スレハ薄ク塗油シ蛇線發條ニハ格納用礦油ヲ塗布スヘシ

八　砲口蓋、砲尾蓋、表尺蓋及擔紐等ノ手入ハ第一類皮革、麻製品ノ手入法ニ依ル

九　屬品箱、彈藥箱ハ布片ヲ以テ内外部ヲ拭淨シ樞鈕部及前鈑、中鈑ニハ塗油スヘシ

第六十八條　雨雪天若ハ泥濘甚シキトキニ於ケル砲ノ手入ハ第一類ニ準據スル外左ノ件ニ注意スヘシ

一　雨雪ニ露出スル砲身、閉鎖機、照準螺等ノ樞要部ニハ使用前稍多量ニ塗油シ置クヘシ

二　雨雪天ニ使用シタルモノハ一般ニ脂油ヲ稍多量ニ塗施シ各部ノ發銹ヲ豫防スヘシ

三　水洗スル場合ニ於テハ砲身、砲架殊ニ照準機ノ内部等ニ水濕ヲ及ホサヽルコトニ注意シ洗滌後ハ十分各部ノ水氣ヲ除去スヘシ

第六十九條　射撃前ノ手入ハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲腔、閉鎖機及同室ハ塵埃、汚垢ヲ留メサル如ク拭淨シ適度ニ塗油スヘシ

二　開閉機、撃發機、安全機ハ分解シテ拭淨シ十分塗油スヘシ

三　駐退機、方向及高低照準機ハ要スレハ分解シテ手入ヲ行ヒ機能ヲ圓滑ナラシメ（高低照準螺ノ球頭ト球頭室トノ間及小架ノ後端叉形部ト方向照準牝螺トノ間ニハ防擦ノ爲十分塗油スルヲ要ス）又搖架上面砲身ノ滑走部ヲ淸拭シテ十分塗油スヘシ

第七十條　射擊間ノ手入ハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　不發火又ハ瓦斯漏洩アルトキハ取扱法ノ示ス處ニ依リ其ノ原因ヲ探求シ要スレハ撃發機ヲ分解シテ手入スヘシ

二　腔綫起部附近、藥室、鎖栓前面、撃茎孔周、撃發機及同室等ハ時々之ヲ拭淨塗油シ又射擊中止間時間之ヲ許セハ努メテ砲腔ヲ拭淨塗油スヘシ

三　長時間射擊スルトキハ爲シ得ル限リ各摩擦部ニ給油シ防塵鈑ノ注油壺ニハ時々注油スヘシ

第七十一條　射擊後ノ手入ハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲腔、閉鎖機ノ手入ハ成ルヘク速ニ實施スヘシ

二　射擊後砲腔ノ手入ハ第六十七條一ノ(ロ)ニ準シ石油ヲ使用シテ十分ニ燼渣ヲ除去スヘシ若射擊直後ニ手入ヲ行フ能ハサルトキハ稍多量ニ常用礦油ヲ塗布シ置キ後成ルヘク速ニ手入スルヲ要ス（燼渣ハ射擊後砲身全ク冷却スルニ至レハ腔壁ニ膠著シ其ノ除去益々困難トナルモノトス）

三　砲腔、閉鎖機内部等ニ附著セル燼渣、蠟等ハ通常一回ノ手入ニ於テハ十分除去シ難キヲ以テ（藥室接觸斜面部、腔綫起部、隔壁ノ隅角部ニ於テ特ニ然リ）適宜時日ヲ間シ手入ヲ復行シ遂ニ痕跡ナキニ至ラシムヘシ但シ此ノ期間内ニ在リテモ屢、砲腔及其ノ他ノ要部ヲ檢査シ發銹ノ徴ヲ認ムルトキハ直ニ手入スヘシ

第七十二條　精密手入ハ秋季演習後、其ノ他射擊後等ニ於テ必要ト認ムル場合ニ於テ實施スヘシ尙使用中ノモノヲ格納セムトスルトキニ於テ之ヲ行フヲ要ス

第七十三條　精密手入ヲ行フニハ十一年式平射歩兵砲假取扱法ニ則リ各部ヲ分解シテ前諸條ニ準シ之ヲ行ヒ又要スレハ塗料ノ塗換若ハ補修塗ヲ行フヘシ分解手入ニ方リテハ摩擦部、樞軸部ノ反起、偏磨或ハ發條、螺桿、駐栓等ノ衰損、屈曲、折損又ハ緊塞革、革環ノ變形、衰損セルモノ等ハ修正若ハ交換シ日常外部ヨリ拭淨シ能ハサル部分（特ニ樞軸部及摩擦部）ハ拭淨後十分塗油シテ結合スヘシ

第七十四條　貯藏品（附品類ニシテ平常使用セサルモノヲ含ム）ノ手入ハ脂油ノ效力及發銹其ノ他貯藏間ノ衰損、變質、龜裂等ニ注意シ前諸條ニ依リ之ヲ行ヒ防銹油ハ格納用礦油ヲ使用スヘシ但シ數箇月以内ノ貯藏品ニハ「パラワセリン」ヲ用ウルコトヲ得

第二節　格納

第七十五條　砲ハ結合ノ儘床上ニ置クヘシ（要スレハ下方ニ支材ヲ置ク）要スレハ砲身ト砲架トヲ分離シ砲身ハ脂油ヲ吸收セサル裝置ヲ爲セル架(棚)上ニ置クコトヲ得（分離シタル砲身ハ特ニ防塵鈑ヲ損セサル如ク取扱ニ注意シ尙砲身及搖架ノ連結部ハ發銹セサル如ク十分防銹油ヲ塗布スルヲ要ス）又砲身ニハ成ルヘク防塵ノ設備ヲ爲シ砲口ニハ亞鉛製ノ假砲口蓋ヲ裝シ置クヘシ

第七十六條　駐退機ハ復坐發條一箇及隔鐶ヲ離脱シテ復坐發條ノ衰損ヲ豫防シ駐退管内ニハ駐退液ヲ滿量ナラシメ置クヘシ

活塞桿ノ緊塞革ニ觸接スル部分ハ常用品ニ準シテ毎月一回手入スヘシ又常時活塞桿ヲ若干抽出シ置キ手入ノ都度緊塞革ニ觸接スル部位ヲ毎回變更スルコトヲ得此ノ際活塞桿ノ露出部ハ特ニ防銹ニ注意スヘシ

第七十七條　部品類ハ別ニ格納スヘシ又諸箱、匣及嚢等ノ收入品中分離格納ヲ有利トスルモノハ之ヲ取リ出シ合番號ヲ有スルモノハ混淆セサル如ク區分シ格納棚若ハ格納箱ニ收容スヘシ特ニ防銹油ノ剝離豫防及照準具、駐退機部品ノ如キ重要ナルモノノ損傷豫防ニ就テハ注意ヲ要ス

假鋭類ハ第七類ニ依リ格納スヘシ

第七十八條　彈藥箱ハ凹陷又ハ變歪セサルコトニ注意シ適宜重層シテ格納スルコトヲ得

其ノ他皮革及麻製品ノ格納法ハ第一類ニ依ル

第七十九條　復坐發條ヲ格納スルニハ其ノ屈撓ヲ豫防スル爲直桿ノ架ニ貫通シ又ハ脂油ヲ吸收セサル裝置ヲ爲セル棚若ハ箱内ニ平置スヘシ又緊塞革及革環ハ麻絲又ハ紐類等ニテ縛スルカ或ハ型ニ容レ其ノ膨脹ヲ豫防シ且脂油ヲ附著セシメサル如ク注意スヘシ

第八十條　洗桿ハ植毛ノ蟲害ヲ豫防スル爲厚紙等ヲ以テ之ヲ被包シ内部ニ「ナフタリン」ヲ容レ懸吊スヘシ要スレハ棚又ハ架上ニ平置スルコトヲ得

第三節　檢　查

第八十一條　檢查ハ第一類ニ依ル外特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲身體

イ　砲腔ハ清潔ニシテ疵痕、反起、銹痕、腐蝕、燒蝕及膨脹ナキヤ、隔墻ハ平滑ニシテ砲口部ニ偏磨ナキヤ

ロ　燒蝕ノ生起シ易キ藥室接續斜面部及腔綫起部附近ノ手入良好ニシテ塗油潤澤ナリヤ

ハ　鎖栓室内面ニ擦痕ナキヤ、抽筒子室、横桿軸臂室、抽筒子樞軸孔及横桿軸孔ニ反起ナキヤ

ニ　砲尾後面突耳、安全子托軸室及其ノ周圍ニ在ル小孔、接續螺軸裝入部(突耳)等ハ反起、龜裂又ハ著シキ磨滅ナキヤ

ホ　砲身下部準溝及防塵鈑ハ變歪セサルヤ、防塵鈑駐螺ハ緩解又ハ脫落セルモノナキヤ

ヘ　後坐尺銜爪ハ著シク磨損又ハ變形シアラサルヤ(後坐ニ方リ砲耳蓋鈑ノ傷摩擦スルコトナキヤニ注意スヘシ)

ト　砲身外部ニ發銹セル處ナキヤ又注油壺ノ破損若ハ緩ミタルモノナキヤ

二　閉鎖機

イ　擊發ノ機能確實ナリヤ又擊莖ノ位置(鈹栓前面ヨリ約一、五粍後退)及突出量(約二、五粍突出ス)適度ナリヤ

ロ　各部ノ塗油適度ニシテ特ニ摩擦部ニ於テ其ノ塗施十分ナリヤ

ハ　鎖栓ノ前面ハ平滑ニシテ頭螺ニ毀損ナク且其ノ螺著確實ナリヤ

ニ　鎖栓外面ニ搔痕ナキヤ、其ノ下面ノ槓桿頭部トノ觸接部ニ著シキ反起ナキヤ、兩側準梁ハ甚シク磨損セサルヤ、撃茎室內部ニ打痕、反起ナキヤ又鎖栓ノ閉鎖確實ナリヤ

ホ　撃茎ハ著シク磨損、反起ナキヤ、頭部變形シアラサルヤ、撃茎駐螺トノ吻合ハ良好ナリヤ

三　開閉機

イ　開閉機能ハ圓滑、確實ナリヤ

ロ　槓桿ハ偏磨シアラサルヤ、槓桿軸臂突箭ハ著シク磨滅シアラサルヤ

ハ　轉把方孔部ニ龜裂ナキヤ又中央ノ突耳ハ磨滅若ハ龜裂シアラサルヤ

ニ　曳桿壯螺ニ損傷ナキヤ、牝螺ノ裝著確實ナリヤ、轉把突耳トノ吻合部ニ龜裂ナキヤ

ホ　曳桿發條力適當ナリヤ、發條筒ト砲身發條筒托坐トノ吻合良好ナリヤ

ヘ　抽筒子ハ各部ニ反起、龜裂ナキヤ又著シク磨滅特ニ爪部ト踵部ナク其ノ機能良好ナリヤ

四　撃發機及安全機

イ　撃鐵發條ノ機能良好ナリヤ　撃鐵ヲ扛起セシメテ手ヲ放ストキ撃鐵旋囘シテ待位置ニ復スルヲ可トス

ロ　安全子後面ニ撃鐵ニ依ル疵痕ナキヤ　安全ノ位置ニ在ルトキ撃發ヲ試ミシ結果トス

又安全機發條ハ其ノ機能良好ナリヤ

ハ　撃鐵ノ頭部著シク磨損變形シアラサルヤ、方窓部ニ安全子ニ依ル疵痕ナキヤ又撃鐵ハ撃茎ノ中心ヲ打撃スルヤ　閉鎖機ノ閉鎖位置ニ於テ降下セルモノニ在リテハ撃鐵ハ撃茎ノ中心ヲ打撃セスシテ不發ヲ生スルコトアリ

五　搖架

イ　砲耳ノ塗油十分ナリヤ

ロ　譴讓彈撥ニ變質又ハ變形ナキヤ

ハ　準鈑駐軸ノ甚シク緩ミタルモノナキヤ、準鈑發條ノ螺著確實ニシテ其ノ機能良好ナリヤ

ニ　表尺托架ノ動搖スルモノナキヤ、駐螺戻囘防止ノ括線ハ施シアリヤ

ホ　後坐測尺遊標ノ發條ハ機能完全ニシテ遊標ノ滑走ハ適度ニ緊密ナリヤ　指頭ヲ以テ除ロニ進退シ得ルヲ適度トス

六　駐退機

イ　駐退管前方外周ニ在ル青銅帶ノ磨損セルモノナキヤ、管內面ニ發銹、疵痕等ナキヤ又金屬屑等ノ殘留ナキヤ

ロ　活塞桿ハ眞直ニシテ且腐蝕シアラサルヤ又磨損シテ緊塞ヲ不良ナラシムルモノナキヤ　特ニ緊塞革及革環ニ接觸スル部位ニ注意スヘシ

ハ　活塞ハ搔痕ナク且磨滅ノ形跡ナキヤ、活塞駐螺ノ緩解ナキヤ

ニ　駐退液ノ漏出ナキヤ、液ハ淸澄ニシテ殘渣ナク且其ノ容量ニ不足ナキヤ

ホ　注液孔塞螺革環ハ衰損シアラサルヤ又其ノ閉塞確實ナリヤ、壓塞螺發條ハ適度ニ緊定シアリヤ

ヘ　復坐發條ハ折損、龜裂又ハ著シク屈曲、短縮、發條力衰損（過弱ナルトキハ復坐不足ヲ基因スセル鎖栓ノ不開、抽筒不良ヲ生起ス）モノナキヤ、其ノ組合セ適當ナリヤ又隔鐶ニ變形ナキヤ

ト　活塞桿𠂔螺ハ結合確實ニシテ動搖セサルヤ又確實ニ搖架帽ノ相當室ニ鉤シアリヤ

チ　結合ノ姿勢ニ於テ砲身ハ十分復坐ノ位置ニ安定シアリヤ其ノ他結合上ノ誤リナキヤ

七　三脚架

イ　屈曲部又ハ隅角部ニ毀損（特ニ龜裂）ナキヤ

ロ　砲耳托架ハ砲耳部及圓筒部ノ塗油十分ナリヤ、蓋鈑支桿ノ機能良好ナリヤ

ハ　前脚ハ架頭部ニ於テ磨滅ニ基ク著シキ動搖ナキヤ

ニ　後脚ノ脚頭ハ變歪又ハ龜裂ナキヤ、托鐶及架匡托坐ノ變歪、磨損又ハ動搖ナキヤ、駐動ノ結合確實ニシテ著シキ動搖ナキヤ又脚桿ノ屈曲ナキヤ

ホ　小架後端叉形部ノ屈曲又ハ著シキ磨滅ナキヤ（該部ハ方向照準𠂔螺トノ吻合間ニ於テ漸次磨滅間大シ射擊精度ヲ害スルヲ以テ特ニ注意ヲ要ス）

ヘ　方向照準螺、方向照準𠂔螺、照準螺托筒ノ塗油十分ニシテ機能良好ナリヤ又方向照準轉輪ニ變形又ハ空轉ナキヤ

ト　駐軸螺ノ機能確實ナリヤ

チ　高低照準螺、同球頭、同托鈑ノ塗油十分ナリヤ、球頭ノ磨滅著シキモノナキヤ、緊定螺ノ作用確實ナリヤ又高低照準轉輪ニ空轉ナキヤ、同駐螺ノ脫落ナキヤ

八　表尺、眼鏡及補助桿

イ　表尺ハ同托架ニ裝著セル際動搖スルコトナキヤ

ロ　橫尺室上面燕尾溝及右側準鈑ニ打痕反起ナキヤ又分畫鈑動搖セサルヤ、眼鏡室發條ノ機能良好ナリヤ

ハ　各轉輪ノ囘轉圓滑ニシテ空轉ナキヤ

ニ　表尺補助桿ハ上部ノ燕尾溝及下部ノ準梁ニ打痕、反起ナキヤ、表尺及眼鏡トノ吻合良好ナリヤ

ホ　眼鏡ノ檢査ハ第七類ニ依ル

九　屬品又ハ裝塡品

イ　提燈ハ蓋、發條其ノ他各部ニ損傷ナキヤ又熔蠟ノ除去及內部ノ手入良好ナリヤ

ロ　復坐發條ハ發銹又ハ變形セサルヤ又鍍類ニ發銹ナキヤ

十　屬品箱及彈藥箱

イ　體ハ打痕、凹陷ナキヤ又綴釘及脚鐵等ノ弛緩ナキヤ、塗料ノ著シキ剝離ナキヤ、吊鐶ト鐶鈑トノ吻合容易ナリヤ、

ロ　內部ニ砂塵、汚垢又ハ濕氣ヲ留メサルヤ、蓋鈑ノ壓護謨ニ變質若ハ毀損ナキヤ

十一　皮革、麻布類ノ檢査ハ第一類ニ依ル

第八十二條　射擊前ノ檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　閉鎖機、開閉機及擊發機ノ機能ハ良好ナリヤ

二　照準機ノ各部ハ機能良好ナリヤ又照準具ノ精度ハ良好ナリヤ特ニ眼鏡ノ覘線ハ正シキヤ

三　砲身ト搖架及砲耳托架トノ結合確實ナリヤ、準溝內被ノ準梁ハ清潔ニシテ塗油十分ナリヤ

四　駐退機內部ニ磨損及疵痕ナク各部ノ結合完全、機能良好ナリヤ

五　後坐尺ハ其ノ滑動適度ナリヤ

六　各部ノ駐螺、割栓ハ射擊ノ爲脫落ノ虞ナキヤ

七　彈藥筒ハ塵埃ヲ附著シアラサルヤ

第八十三條　射擊間（射擊直前直後ヲ含ム）ノ檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲腔、閉鎖機及同室ニ土砂、塵埃等ノ附著ナキヤ

二　閉鎖機、開閉機及擊發機ノ塗油十分ニシテ機能圓滑ナリヤ

三　火藥瓦斯ノ漏洩セルコトナキヤ、頭螺ニ毀損ナキヤ、擊莖孔周、擊莖室及擊莖等ニ燼渣又ハ蠟附著ノ爲擊莖ノ運動ヲ害セサルヤ

四　鎖栓及同室、藥室ニ燼渣等附著ノ爲開閉機能、彈藥筒ノ裝塡及藥莢ノ抽出ニ澁滯ヲ生セサルヤ

五　藥莢ノ蹴出不十分ナルコトナキヤ（之レ主トシテ曳桿發條力ノ過強ナルカ復坐發條力ノ衰損ニ起因シ且準鈑駐軸ニ遊隙多クシテ準鈑動搖シ復坐ノ際鎖栓ノ下降十分ナラサル爲抽筒子ノ踵部ニ衝突スル力過弱ナルニ因ル又時トシテ砲架仰起シ撞著スル際反動ニテ藥莢ヲ鎖栓上ニ殘留スルコトアリ）

六　曳桿牝螺逐次戾回シ離脫スルコトナキヤ

七　後坐長ハ規定ニ合スルヤ、後復坐ノ速度概ネ整齊ナリヤ、後復坐ノ際搖架ニ軋音ヲ發セサルヤ（復坐發條折損ニ因ルコト多シ）

八　復坐不足ヲ生セサルヤ（連續發射ニ於テ復坐不足ヲ生スルハ液ノ溫度上昇ノ結果膨脹ヲ來セルニ因ルコト多キモ時トシテ搖架準梁ノ塗油不足及搖架上面ニ土砂塵埃等ノ附著ニ因リ生起スルコトアリ實射ニ方リテ特ニ注意ヲ要ス）

九　駐退液ノ漏出ナキヤ（連續發射後ニ於テ生起スルコトアリ主トシテ駐退管壓塞螺ノ螺定不良又ハ注液孔塞螺革環ノ衰損ニ起因ス）

十　防塵鈑、照準機等ノ各摩擦部ハ注油ヲ要セサルヤ又防塵鈑駐螺、護謨彈撥駐螺其ノ他ノ駐螺、割栓等ニ緩解脫落ナキヤ

十一　彈藥筒ニ土砂、塵埃ヲ附著シアラサルヤ

第八十四條　貯藏品ニ對スル檢査ハ第八十一條ニ準スル外尚左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲腔、閉鎖機、撃發機其ノ他素地部ニ於ケル格納用礦油ノ效力十分ナリヤ又其ノ剝離、凝固、塵埃ノ附著若ハ發銹セルモノナキヤ（炎熱甚シキトキハ往々格納用礦油ノ流下スルコトアリ）

二　豫備緊塞革、革環ハ損傷又ハ膨脹ニ對スル保護適當ナリヤ

第四節　取扱上ノ注意

第八十五條　取扱上ニ關シテハ十一年式平射歩兵砲假取扱法取扱上ノ注意ニ依ル外左ノ件ニ注意スヘシ

一　分解手入ヲ行フニハ各部品ハ順序正シク排列シ混淆又ハ紛失ヲ避ケ結合ノ際ハ其ノ順序ヲ誤ラサル如ク特ニ合番號ニ注意スヘシ

二　駐退機ノ分解ハ必ス砲身ヲ離脱シタル後ニ於テスヘシ

三　表尺蓋ノ著脱ニ際シテハ兩手ヲ用キテ靜ニ之ヲ行ヒ眼鏡接眼筒部ノ保護ニ努ムヘシ

四　安全子ヲ安全ノ位置ニ爲シタル儘撃鐵ヲ操作スヘカラス

五　砲身ヲ離説セルトキハ誘導箍準溝又ハ防塵鈑等ヲ變形セサル如ク特ニ注意スヘシ

第二章　十一年式曲射歩兵砲

第一節　手入

第八十六條　常用品ノ普通手入ハ概ネ左ノ如ク實施スヘシ

一　砲身體

イ　砲腔ノ手入ハ通常先ツ砲身ヲ砲架ヨリ離脱シタル後概ネ第六十七條ノ一ニ準シテ之ヲ行フヘシ

ロ　砲尾ノ螺體ヲ嵌裝スヘキ牝螺部、砲耳部等ハ布片ヲ被ラセタル木若ハ竹片ノ類ヲ以テ隈ナク拭淨スヘシ

二　閉鎖機及撃發機

イ　手入ハ概ネ第六十七條ノ二ニ準スヘシ但シ螺絲部及撃莖托筒、撃莖室、撃莖内部ノ噴氣孔（鋼線等ヲ使用シテ手入スヘシ）ニハ汚垢、爐滓等ヲ留メサル如ク十分ニ手入ヲ行ヒ螺絲部ニハ稍多量ニ塗油スヘシ

ロ　安全機ハ要スレハ結合ノ儘外部ヲ拭淨シ摩擦部ニ塗油スヘシ（安全機ヲ分解シタルトキハ内筒、外筒ノ結合ヲ誤ラサルコトニ注意スヘシ）

三　砲架ハ外部ノ塵埃汚垢ヲ拭淨シ砲耳室鈑及齒弧鈑ノ各摩擦部ニハ「パラワセリン」ヲ、射向盤托架内面ニハ常用礦油ヲ塗布スヘシ

四　床板ハ外部ヲ拭淨シ分畫鈑前面、砲架旋囘軸室ニハ塗（注）油スヘシ

五　高低照準機

イ　高低照準螺ハ轉輪ヲ旋回シツツ螺絲部ヲ叮嚀ニ拭淨シ塗油スヘシ

ロ　緊定螺及駐栓ハ外部ノ汚垢ヲ除去シ適宜塗油スヘシ其ノ他ノ部分ハ各其ノ外部ヲ拭淨塗油スヘシ

六　方向照準機ハ外部ヲ拭淨シ齒輪竝同軸及其ノ他ノ摩擦部ニハ適度ニ給油スヘシ

七　射向盤、距離鈑及測角器

イ　手入ハ塵埃ヲ避ケ成ルヘク毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テ行フヘシ

ロ　射向盤ハ外部ヲ清拭シ十分汚垢ヲ除キ素地部ニハ僅ニ塗油スヘシ殊ニ垂直軸下部射向盤托架ニ嵌入スル部分ハ手入ノ際過度ノ摩擦ヲ避クヘシ

ハ　距離鈑ハ機能部ノ塵埃、汚垢ヲ拭淨シ鋼部ニ塗油スヘシ

ニ　測角器ノ手入ハ第七類ニ依ル

八　提燈、砲口蓋、砲尾蓋等ノ手入ハ第六十七條ニ準シ之ヲ行フヘシ

九　彈藥箱ハ内外部ヲ拭淨シ發條部ニハ僅ニ塗油スヘシ

第八十七條　雨雪天若ハ泥濘甚シキトキニ於ケル手入ハ第六十八條ニ準シ之ヲ行フヘシ

第八十八條　射撃前後ノ手入ハ第六十九乃至第七十一條ニ準シ之ヲ行フ外左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲腔特ニ彈丸初動位置ニ注意スヘシ及撃茎托筒分解シテ手入スルヲ要ス内外部ハ射撃前叮嚀ニ拭淨シ十分塗油スヘシ撃茎托筒ハ極寒地ニ在リテハ脂油凍結ノ爲撃茎ノ運動ヲ害スルコトアルヲ以テ内部ノ塗油ヲ減シ若ハ拭除シ或ハ他ノ耐寒性脂油ヲ必要トスルコトアリ

二　射撃間ニ於テハ砲腔面及特ニ撃茎托筒、螺體等ニ燼渣ノ附著甚シク之カ爲危險ヲ生シ易ク又往々分解ヲ困難ナラシムルコトアルヲ以テ砲腔ハ射撃斷續ノ時間ヲ利用シテ手入ヲ行ヒ若射撃後直ニ手入ヲ行フ能ハサルトキハ砲口ヨリ稍多量ニ塗油スヘシ又螺體ハ外部ヨリ螺絲部ニ、撃茎托筒ハ撃茎室内ニ注油シ爲シ得レハ是等ノ部分ヲ手入スルコト肝要ナリ

三　射撃後砲腔、撃茎托筒、螺體ノ手入ハ成ルヘク速ニ之ヲ實施スヘシ

第八十九條　精密手入ヲ行フニハ十一年式曲射歩兵砲假取扱法ニ則リ各部ヲ分解シ第七十二、第七十三條ニ準シ之ヲ行フヘシ又貯藏品ノ手入ハ第七十四條ニ準スヘシ

第二節　格納

第九十條　格納ハ左ノ如ク實施スヘシ

一　砲ハ床上又ハ棚上ニ整置スヘシ要スレハ砲身ト其ノ他ニ分離シ砲身ハ脂油ヲ吸收セサル裝置ヲ爲セル架上ニ置クコトヲ得又砲身ニハ一號撃茎托筒ヲ裝シ且撃發機安全機ヲ損セサル如ク注意シ成ルヘク防塵ノ設備ヲ爲シ且砲口ニハ亞鉛製假砲口蓋ヲ裝シ置クヘシ

二　砲身ト分離セシ床板ハ特ニ照準機ヲ損セサル如ク平置又ハ適宜重疊シテ格納スヘシ

三　撃莖托筒砲身ニ結合セルモノヲ除クハ分解シ脂油ヲ吸收セサル裝置ヲ爲セル箱又ハ棚上ニ整置スヘシ

四　其ノ他ノ部品、屬品類ハ前章第二節ニ準シ格納スヘシ

第三節　檢　査

第九十一條　檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲身體

イ　砲腔ノ檢査ハ第八十一條一ノ(イ)(ロ)ニ準スヘシ但各號撃莖托筒ニ應スル彈帶初動位置ノ腔面カ他ノ部ニ比シ稍顯著ナル磨滅ナキヤニ注意スヘシ

ロ　距離鈑坐ニハ打痕ナキヤ、砲耳部扇形部及其ノ外端鈎部ニ注意スヘシニ損傷ナキヤ又砲身ハ著シク動搖セサルヤ

ハ　撃鐵托坐駐螺ノ綏解ナキヤ又駄載用托鐶ノ螺著確實ナリヤ

二　閉鎖機及撃發機

イ　閉鎖機ノ手入ハ十分ナリヤ殊ニ撃莖托筒内部ノ手入ニ注意スヘシ

ロ　撃莖托筒ハ裝著ノ場合ニ於テ動搖スルコトナキヤ、撃莖托筒駐筍ハ頭部磨損スルコトナク其ノ機能良好ナリヤ

ハ　撃莖駐螺ノ戾回スルコトナキヤ

ニ　撃莖ハ頭部變形シアラサルヤ、體ハ屈曲又ハ龜裂ナキヤ、瓦斯進入孔及同逸出孔ノ手入十分ナリヤ、後端ハ著シク磨損又ハ變形シアラサルヤ

ホ　撃莖發條ノ張力著シク衰損セルモノ又ハ發條ノ折損セルモノナキヤ

ヘ　撃鐵托坐ノ動搖スルモノナキヤ駐螺ニ注意スヘシ又突耳ニ變歪ナキヤ

ト　撃鐵頭部ノ左右ニ偏倚スルモノナキヤ、撃鐵發條力ハ十分ニシテ撃鐵ノ仰起作用良好ナリヤ又遊筒ノ回轉圓滑ナリヤ

チ　安全機ハ其ノ機能良好ナリヤ、內筒外筒ノ結合ニ誤リナキヤ又突筍ノ缺損ナキヤ

三　砲架

イ　砲耳室鈑、射向盤托架及齒弧鈑ノ各摩擦部ハ塗油十分ナリヤ、砲耳室突梁ニ變歪ナキヤ

ロ　射向盤托架ニ打痕又ハ屈曲ヲ生セサルヤ、動搖スルモノナキヤ又駐螺戾回防止ノ括線ハ確實ニ裝シアリヤ

ハ　齒弧鈑ニ毀損ナキヤ、齒弧鈑駐筍ノ螺著確實ナリヤ

四　床板

イ　床板體木部ニ龜裂又ハ變歪ナキヤ、諸綴釘ノ弛緩、折損セルモノナキヤ

ロ　床板ニ附著セル諸托鈑、脚鐶、駐鈑ノ動搖スルモノナキヤ又砲架托鈑分畫面ハ發銹シアラ

サルヤ

ハ　駐鋤ノ著シク動搖スルモノ又ハ變形、磨損セルモノナキヤ

五　高低照準機

イ　各部ノ結合ニ誤リナキヤ、各部ノ機能ハ圓滑、確實ナリヤ

ロ　砲架旋囘軸ハ駐牝螺ノ裝著確實ナリヤ又照準螺托筒トノ結合良好ナリヤ

ハ　照準螺ハ手入良好ナリヤ、砲身トノ連結確實ナリヤ、駐栓ノ機能良好ナリヤ又誘導螺ノ注油孔ニハ注油シアリヤ

六　方向照準機

イ　轉輪ニ依ル左右移動圓滑、整齊ナリヤ

ロ　緊定螺ニヨル壓定作用ハ良好ナリヤ

七　射向盤

イ　射向盤ハ同托架ニ裝著位置ニ於テ動搖スルコトナキヤ

ロ　稜鏡ノ標矢ハ鮮明ナリヤ、稜鏡室ノ俯仰確實ナリヤ又激突ニ因リ稜鏡ニ小罅裂ヲ生シアラサルヤ

ハ　囘轉盤ノ囘轉圓滑ナリヤ、轉輪ニ空轉ナキヤ又解脫子ノ機能良好ナリヤ（解脫子ヲ操作スルトキハ十分之ヲ扛起シテ同轉盤指標ヲ略分畫ノ位置ニ來シタルトキ靜ニ扛起ヲ緩ムルヲ要ス、然ラサルトキハ發條ヲ折損セシムルコトアリ）

ニ　射向盤補助分畫及水準器補助分畫ハ本分畫ト合致スルヤ

ホ　水準器ハ氣泡ノ運動正確、鋭敏ナリヤ、氣泡管ノ轉位又ハ動搖ナキヤ又液ノ著色セルモノナキヤ

八　距離鈑及測角器

イ　水準器ノ規正良好ナリヤ

ロ　分畫鈑面及齒弧鈑面ニ打痕、反起ナキヤ又齒弧鈑ノ齒弧磨滅セサルヤ

ハ　氣泡ノ運動ハ正確、鋭敏ナリヤ又齒輪轉子ノ機能良好ナリヤ

ニ　距離鈑分畫ト射角トハ一致ヲ缺クコトナキヤ

ホ　測角器ハ機能良好ナリヤ

九　屬品、裝塡品、屬品箱及彈藥箱

イ　提棍接合部ハ損傷ナキヤ、補助桿及彈丸抽出器ハ機能良好ナリヤ

ロ　其ノ他ハ第八十一條ニ準シ檢査スヘシ

第九十二條　射擊前ノ檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　閉鎖機（殊ニ擊莖托筒ノ手入及機能）ノ手入及機能良好ナリヤ

二　撃發機ノ機能良好ナリヤ、安全機ノ結合ニ誤リナキヤ

三　砲身ト砲架及高低照準機トノ結合確實ナリヤ

第九十三條　射撃間及射撃後ノ檢査ニ於テハ特ニ左ノ件ニ注意スヘシ

一　砲腔、閉鎖機及撃發機等ニ土砂、塵埃ノ附著ナキヤ又其ノ塗油ハ十分ニシテ機能圓滑、確實ナリヤ

二　撃茎托筒内部及螺體等ニ爐渣附著ノ爲機能ヲ害セサルヤ就中撃茎頭部ニ爐渣膠著シ撃茎ノ運動ヲ阻害スルコトナキヤ（多量ノ爐渣ノ爲撃茎突出ノ儘同室ニ膠著シ次發裝塡ニ際シ不慮ノ危險ヲ生スルコトアリ特ニ注意ヲ要ス）

三　撃鐵托坐ノ駐螺緩解セシモノナキヤ

四　高低、方向照準機緊定螺ハ射撃中自然ニ緩解スルコトナキヤ

五　砲架托鈑螺桿頭部ノ缺損セルモノナキヤ

六　安定良好ナリヤ（不良ナルトキハ著シク照準操作ヲ困難ニシ精度ヲ害シ且各部ノ弛緩、動揺又ハ龜裂等ヲ生スルヲ以テ床板位置ノ選定及適宜安定ヲ良好ナラシムル處置ヲ講スルコトニ注意スルコト肝要ナリ）

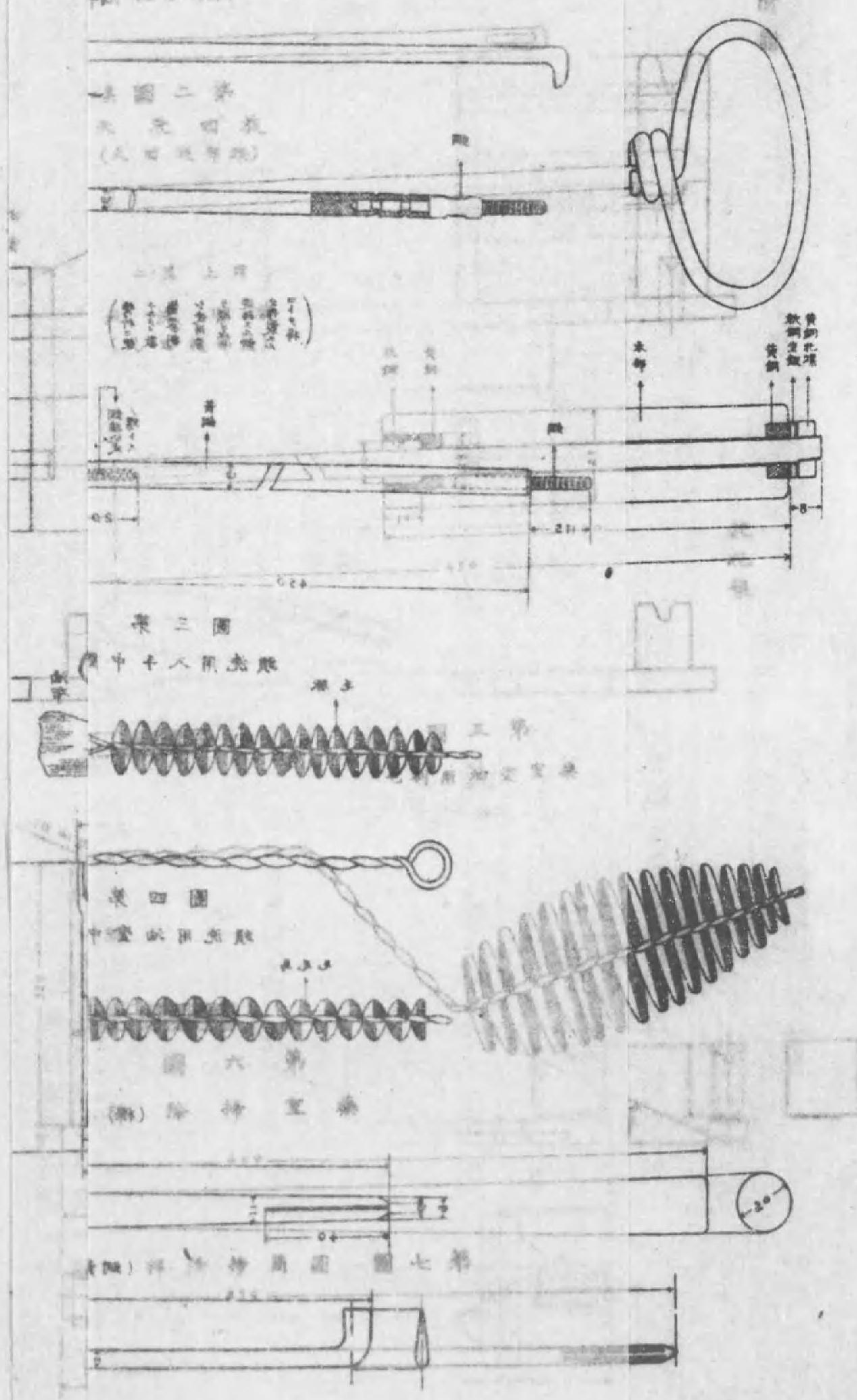
七　彈藥ニ土砂、塵埃ヲ附著シアラサルヤ

第九十四條　貯藏品ニ對スル檢査ハ第九十一條ニ準シ素地部ニ於ケル格納用礦油ノ效力又ハ其ノ剝離、凝固等ノ有無、發銹及塵埃ノ附著竝塗料塗施ノ狀態等ヲ檢スルモノトス

第四節　取扱上ノ注意

第九十五條　本砲ノ取扱ニ就テハ十一年式曲射歩兵砲假取扱法取扱上ノ注意竝第一章第四節ニ準據スヘシ

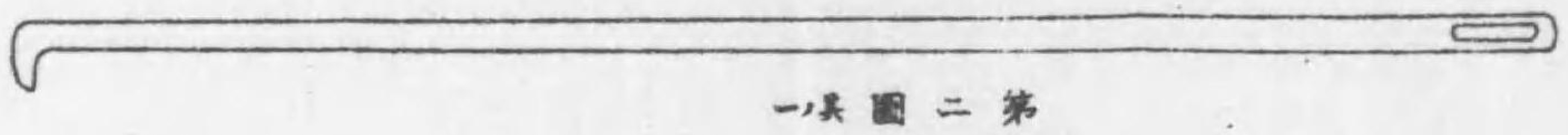
附圖



附圖

第一圖

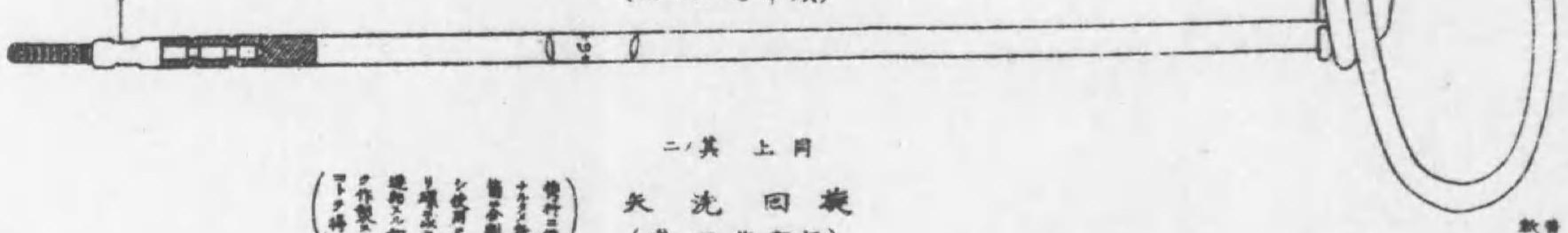
彈鎖子抽出桿



第二圖其ノ一

旋回洗矢

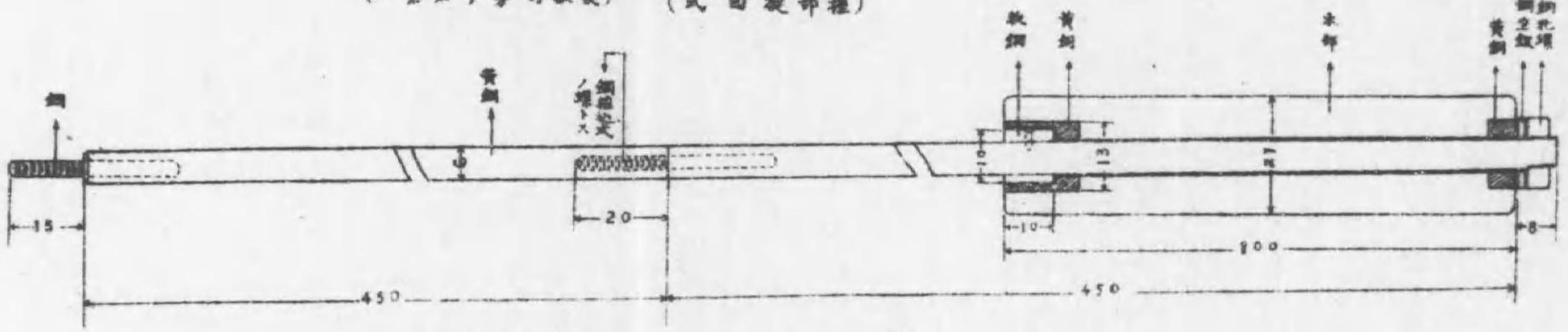
（頭部旋回式）



同上其ノ二

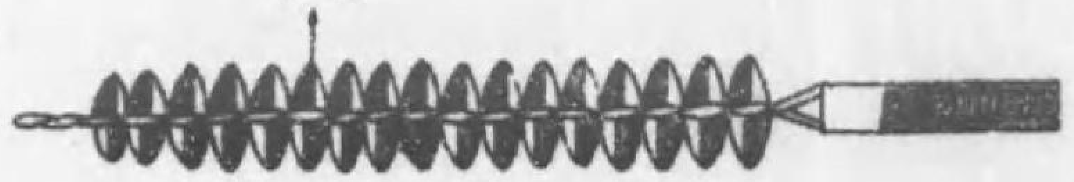
旋回洗矢

（握部旋回式）



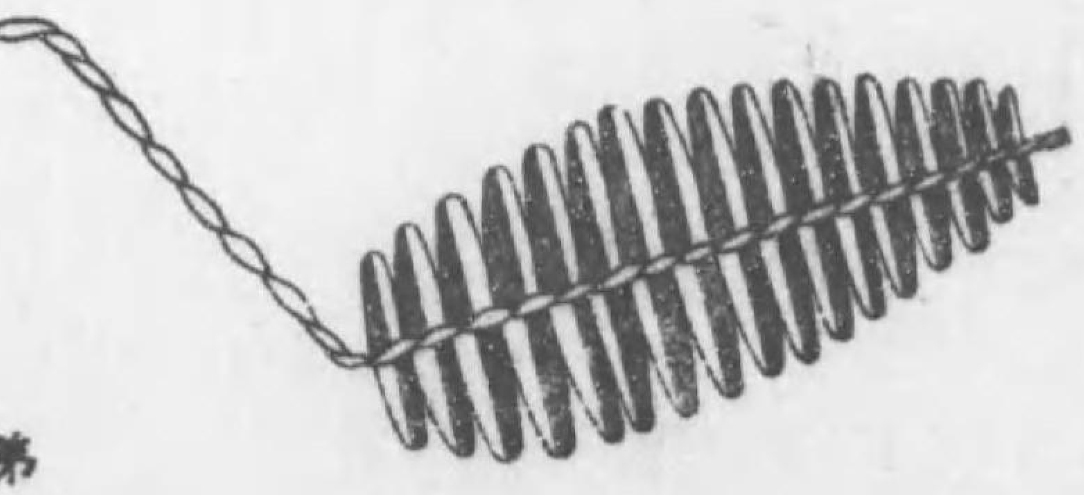
第三圖

腔中手入用洗頭



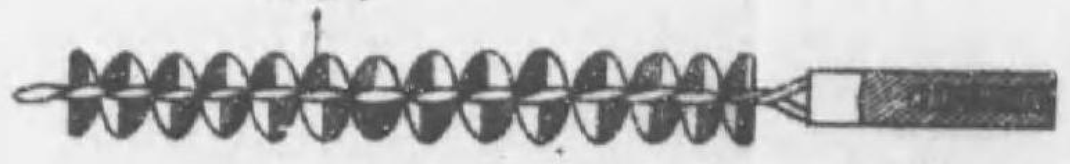
第五圖

藥室塗油用刷毛



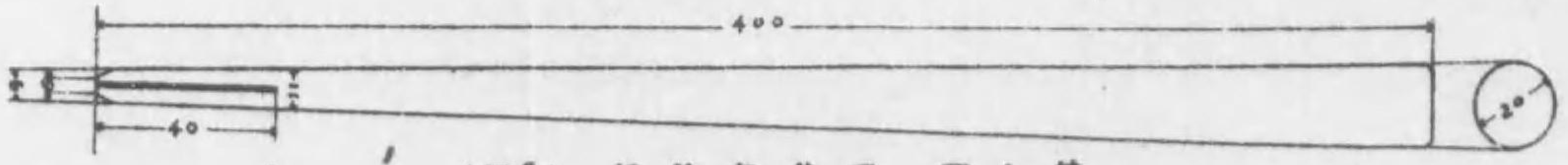
第四圖

腔中塗油用洗頭

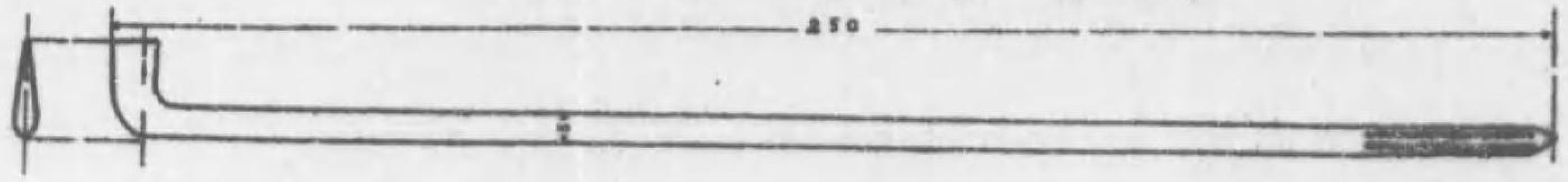


第六圖

藥室掃除棒（桂）

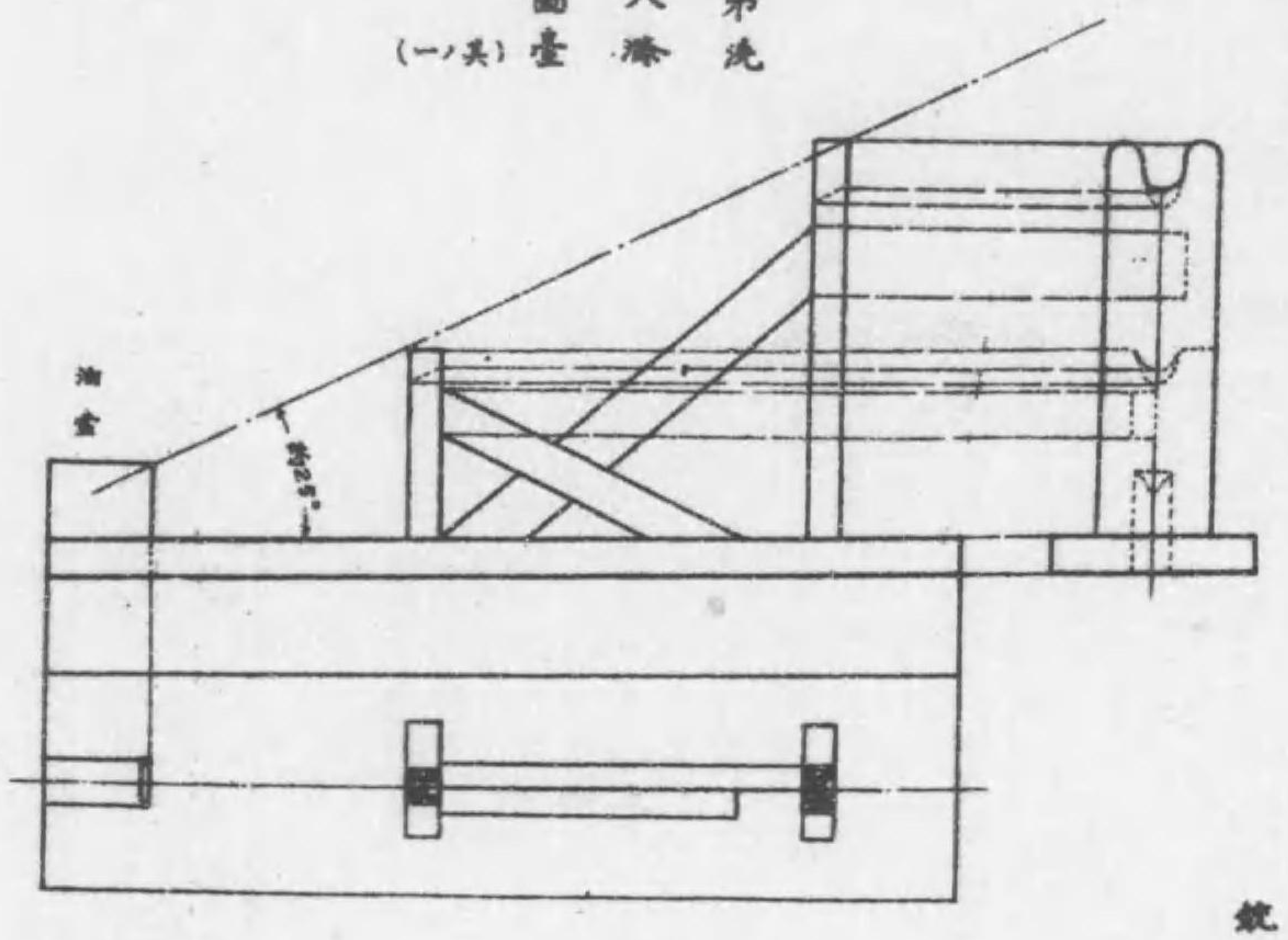


第七圖 圓筒掃除桿（黃銅）

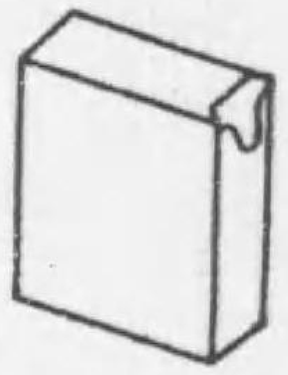


附圖

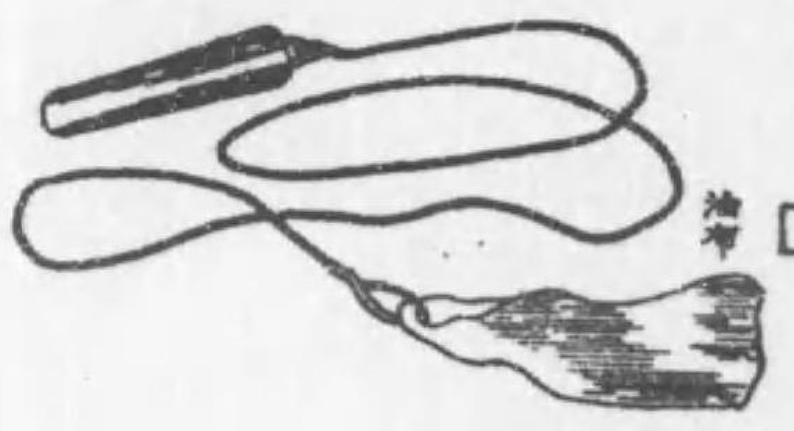
第八圖
洗滌臺(其ノ一)



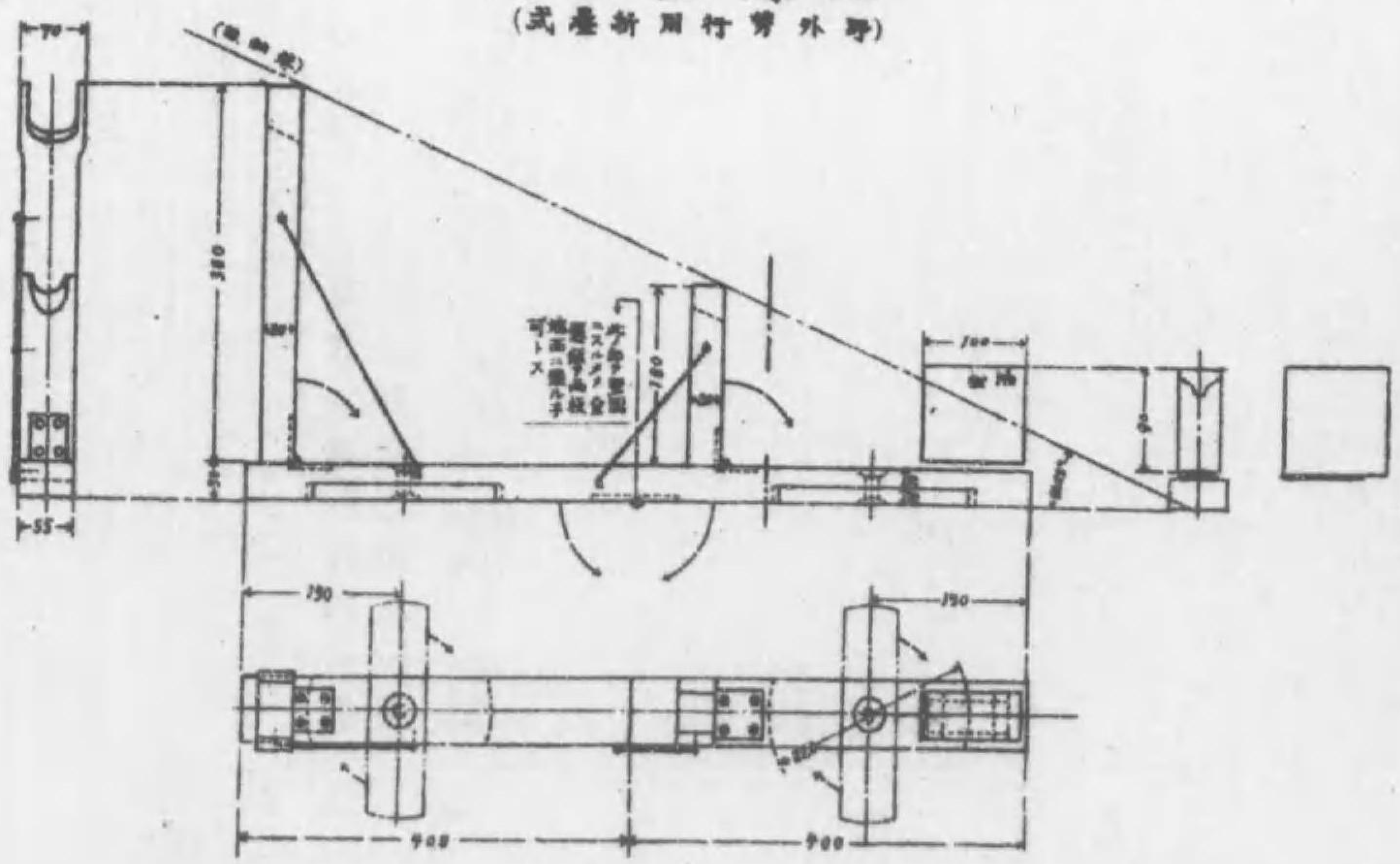
銃托架

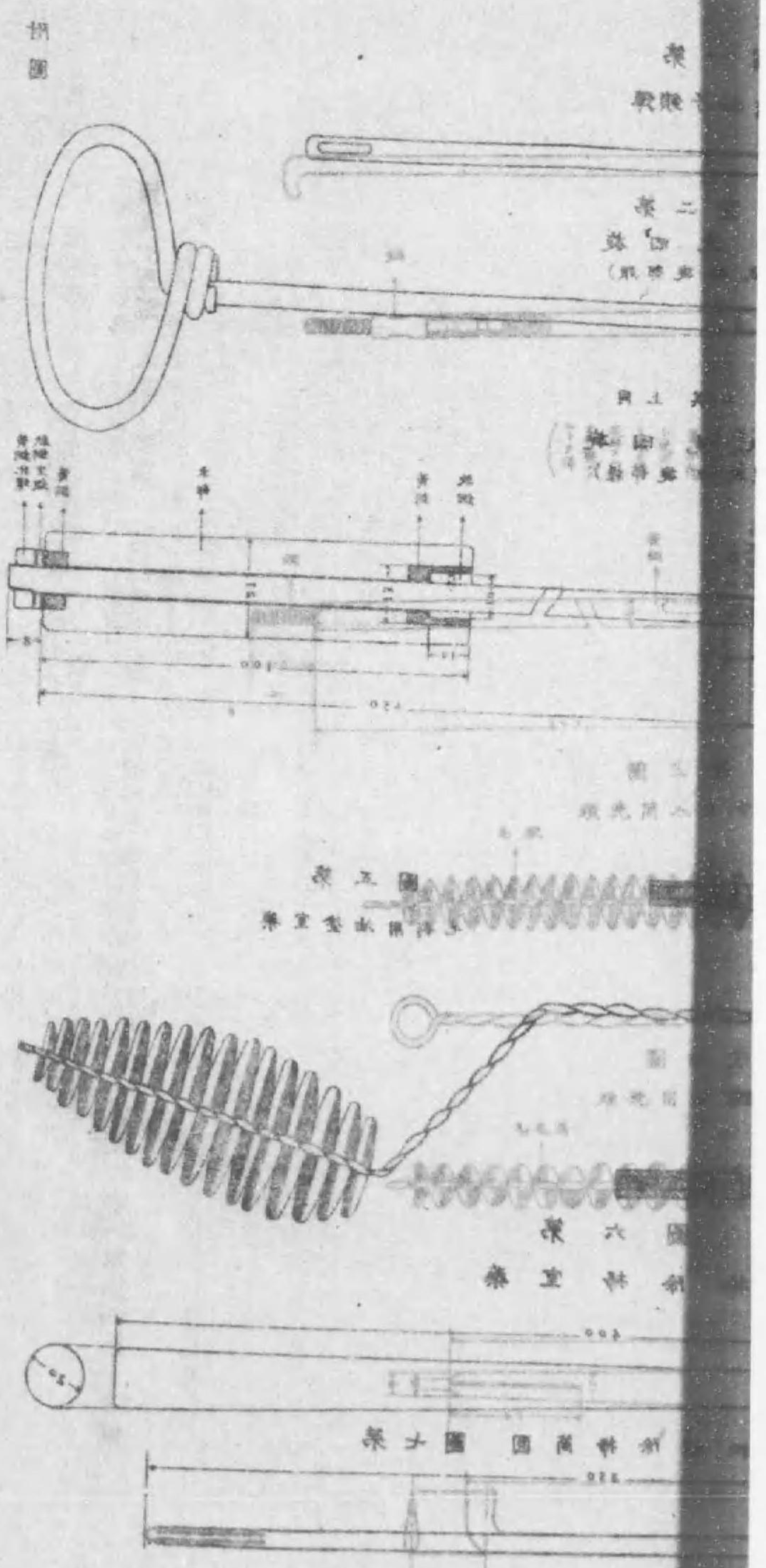


第九圖
重錘式塗油組



洗滌臺(其ノ二)
(野外背負行用新案式)





大正十三年八月一日印刷
大正十三年八月八日發行
大正十五年一月八日追加合本印刷
大正十五年一月十二日再版發行

（兵器保存要領第一類第二類奥付）

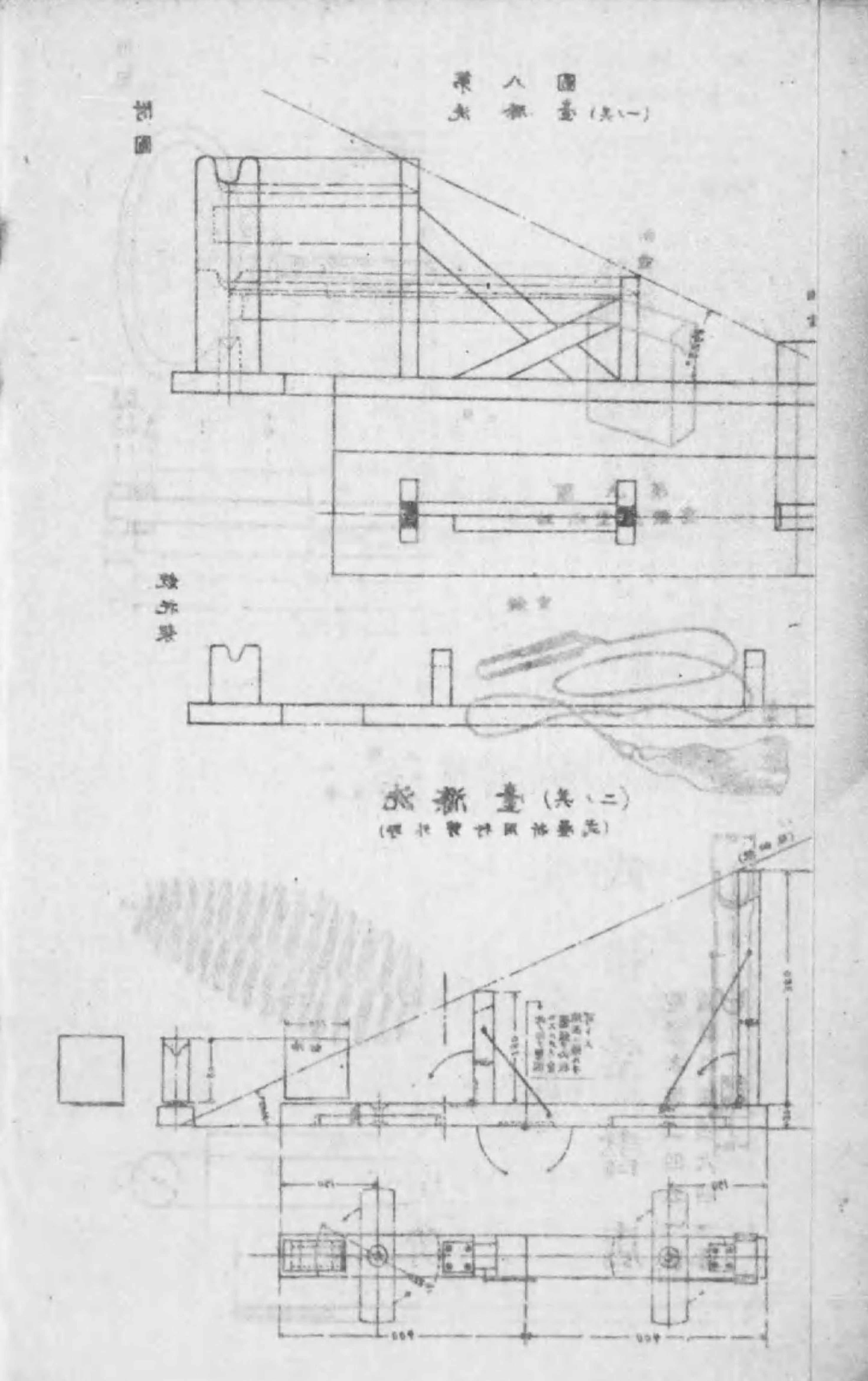
（定價金五拾錢）

陸軍省
檢閲濟

翻刻發行兼印刷者　東京市日本橋區通三丁目七番地
小島棟吉

印刷所　東京市京橋區南小田原町二ノ十二
健誠舍印刷所

陸地測量部御發行地圖元賣捌所
陸軍省檢閲濟軍隊教科用書發行所
東京市日本橋區通三町目七番地
武揚堂書店
電話本局二四五一番
振替口座四六四一番



292
422

陸軍省檢閲濟軍隊教科用書目(復興版)

書名	錢
○陣中要務令	五〇
○軍隊內務書	三〇
○步兵操典草案	三〇
○交通教範	二五
○突擊作業教範草案	三〇
○体操教範	四五
○劍術教範	二五
○陸軍演習令	三〇
○步兵射擊教範草案	五〇
○步兵機關銃射擊教範	三〇
○馬術教範草案	五〇
○築營教範	二五
○兵器保存要領	五〇
○野戰築城教範改正草案	三〇
○衛生法及救急法	二〇
○衛戍條例、衛戍勤務令 合本	一五
○陸軍禮式同附錄 合本	二〇
○陸軍刑法、陸軍懲罰令 合本	二〇
○三八式步兵銃及騎銃取扱法	三〇
○被服手入保存法	三〇
○陸軍軍隊符號	二〇
○騎兵射擊教範草案	五〇
○陸軍喇叭譜	三〇
○喇叭教程同附錄 合本	三五

○其他順次發行仕候

終